
夢物語

矢玉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢物語

【Nコード】

N7240Q

【作者名】

矢玉

【あらすじ】

「私は――月、――あなたの仲間――」

ゆえは毎日夢の中で一人の少女と邂逅する。

記憶を失ったあの日から、ゆえはこの悪夢とも吉夢とも判断のつけがたい夢を毎日見続けていた。そんな中、一人の少女が転校してきた……

記憶を無くした少年と薄墨色の瞳の少女が出会う時、世界の歯車は

再び廻りはじめた。現実と夢が交錯する異世界&現実ファンタジー。
長編予定。

第一章 初 一

霧の中だった。

伸ばした指先さえ霞む程、視界は濃厚な乳白色に染まっている。

「ゆえ」

不意に彼方から声が響く。

「ゆえ」

高すぎず落ち着いた、それでいて澄んだ綺麗な声。
唄うように、声は告げる。

「私は――月――あなたの仲間――よ」

第一章 初 ツツキノハジマリ 一

耳障りな電子音が耳に入り若狭^{わかさ} ゆえはうつすらと目を開けた。

寝乱れた薄茶の髪は柔らかでやや長く、不機嫌そうにしている。端正な顔立ちによく似合っている。

無造作に髪をかき上げて起き上がり、音源である携帯のアラームを止める。

表示された日付は九月一日。全国の学生の大多数が来るなど願う日である。

だが、ゆえが不機嫌なのは今日が夏休み明けである事ではなかった。先程まで視ていた光景が脳裏に浮かび上がる。

乳白色の世界

不意に届く綺麗な声

そして、その言葉。

（仲間……ってどういう事だ？）

この悪夢とも吉夢とも判断のつけがたい夢を、ゆえはあの日から毎日見続けているのだ。一定時間眠ると必ず追い掛けてくる不可思議な夢、それがゆえをいらだたせる。

月という名前の人物にも心あたりは無い。

だが、いつも目が覚める瞬間まで、知っているかのような気になっているのだ。

知っているのに、なにかに無理やり封じられるような奇妙な感覚。それが目覚めた後も漂い、毎朝ゆえをいらだたせていた。

暦の上では秋でもまだまだ残暑は厳しく残っており、頭上から容赦無く照りつける太陽は、炎のかたまりのような風情で真夏のそれと相違ない。秋だと言われると『嘘だ！』と絶叫したくなる気候である。

踊り場で深い息を吐き、ゆえは口の中で悪態を呟いた。ゆえの教室である四階まで残りの階段は後僅か。それを見上げて再び走り出す。

教室の前に着く頃には息はすっかり上がっていた。口が乾き喉が痛む。

軽く息を整えてから戸を開けると、始業三分前の教室はほとんどのクラスメイトが揃っているようで、夏休み明け特有のざわついた空気が流れている。

「遅かったなゆえ。ぎりぎりだぞ」

「嫌がらせか、翔……どけよ」

翔と呼ばれた少年は肩をすくめて横の空席に移った。

硬質の黒髪につり目がちの眼、明るい気風を持つ武蔵 翔という少年は、愛想皆無であるゆえの唯一の友人だった。

「そっぴや今日転校生来るって話、聞いたか？」

「いや、別に」

「相変わらず無感動だよなあ、お前もう少し何か反応示せよ」

普通はそういう物なのだろうか、内心ゆえは首を傾げた。

「……で、その転校生がどうしたんだ？」

「まあ、体した事じゃないけどそいつ小二の頃までこの辺に住んでた。急に戻ってきたんだよ」

「知り合いなのか？」

「幼馴染みたいな感じだな、それで――」

がらりと戸が開けられ、担任が口を開いた。

「みなさんおはようございます、自分の席に戻ってくださいね。もう、みなさんのほとんどの人が知っているようですが、今日は私のクラスにお友達が一人入りますよ」

呆れの目線が集中するが、担任である佐藤先生はにっこり笑っただけだった。昨年まで小学校の教師だったせいか、はたまたただの天然か――大半の生徒は後者だと思っている――

どうかはわからないが、常にこの口調なのだ。いい加減気付いて欲しい、との願望は今日も届きそうにない。

そんな脱力気味の空気が、少女が現れた途端一新した。

まず目につくのは長い艶めく黒髪。三編みにしても毛先は腰まである事から、背中に流せばかなりの量となるだろうと知れる。対照的なほど白い肌、それに映える切れ長の双眸。

やや古風顔立ちと合間って、胡粉塗りの日本人形を連想する容姿。

だが、纏う生き生きとして凜とした空気は、少女が人形などではありえないことを証明している。

そんな和の印象から唯一瞳だけが異なった風情をたたえていた

——神秘的な、銀とも灰色とも白とも言いきれない、真昼の望月のような淡い薄墨の色彩を宿す瞳。

何とも謎めいた、不思議な印象を醸し出す少女に、クラス中の人間が魅入られる。

そんな中ゆえだけは少女本人ではなく、担任によって書かれた少女の名前を凝視していた。

担任に促され、少女が口を開く、放たれた声は高すぎず落ち着き、それでいて澄んだ声色。

「初めまして第一遠江から来た、あわじ淡路 つき月です」

ゆえの心臓がどくん、と強く奇妙な鼓動を打つ。

クラス全員の視線を受け、少女は綺麗な微笑みを浮かべた。

視線の先では、校長が比喻と装飾語の限りをつくし熱弁を振るっている。体重のほとんどを背に預け、ゆえは深い溜め息を着いた。演説台の校長の話の完全に無視し、ゆえは教室での回想を始めた。

自己紹介が終った後の事だ。ゆえの耳に親しさのこもった声で転校生が友人を呼ぶ声が届いた。

「翔！」

「月、引っ越し済んだのか？」

「ぎりぎりね、明日華さんあすかが引っ越しの車出してくれるよう頼んだ人が渋滞で遅れたの。昨日は貫徹よ」

「だから昨日はいなかったのか。そーいや明日華さんはもう日本発つたのか？今度は海外だろ」

「そろそろ飛行機乗った頃だと思う。引越しも終わったよ、荷物は先に現地に着いてるはずだし。って言ってもあの人が持ってく物なん

て限られてるけどね、今度も現地調達！つか言ってたし」

「変わんないなあの人も。あつそだ、こいつ前言つてた若狭ゆえ」

翔は近くにいたゆえの肩を叩く。ゆえは話は聞いていたものの、行き成り話し掛けられて内心かなり動揺した。

「あ、こんにちは」

言ってから後悔した。普通こういう時は“初めまして”というものだろう、と。何となく眼の前の少女の声が例の夢にでて来る少女の声と被ってしまった、この言葉が口に出てしまった。

「ゆ、え君？」

転校生が素早く目線で翔に問掛けたのにゆえは気づいた。翔が軽くかいぶりを振る。

「変わった名前ね。どういう字書くの？」

「・・・・・・平仮名なんだ。中国語からとったらしくて・・・・・・」

一瞬少女から表情が消えた。だが次の瞬間何事も無かったように笑顔で言ったのだ。

「よろしく」

その後集会のため移動となったので、それ以上話はしなかったが、どうにも気になって仕方がない。

（同一人物・・・・・・？）

まさか、と浮かんだ疑問を自分で否定する。

同じなのは下の名前だけ。似ているのは声色だけ。

只でさえ非現実的な出来事、それだけの根拠では到底言いきる気になどなれなかった。

後五分で式終了の時刻だというのに、眼前の話は終りそうにない。何か気をまぎらわす物はないかと視線を巡らせると、妙な物を見付けた。

始め、それは黒いロングコートを身に付けていると思った。夏のような気候の日に、どんな物好きがいるんだか、そう考えた時点でおかしな事に気付く。

その男———なのだろうおそろく———の輪郭がに
じんだようにぼやけているのだ。よくよく見れば身に付けている物
もコートなどでなく、黒い布を頭から被っているだけである。

あまりの異様さにすばやくあたりを見し気付いている者を探して
しまった。だが見事に誰も不気味な存在に気づいた様子が無いのだ。
誰も彼もが暇を持て余しているのにもかかわらず、だ。

それがそもそも異常事態だと気付かず、ゆえはおそろおそろ視線
を再び黒衣の男に戻してみる。

本心を言えば見たくないのだが、目をそらした所で気になる事には
変わり無い。ゆらゆらと不安定に揺れる姿ははつきりと像を結ば
ない虚像を連想する。ひときわ揺れが大きくなり、姿が歪んだ。

「なッ………!!」

すると、ゆえが見つめる中それはまるで気体のように無散して消
滅した。

「どうした、ゆえ。終わったぞ？」

不思議そうな声で我に返れば、回りは人がおらず皆入り口へと集
まっていた。

「………幻覚を見た、って言ったら信じるか？」

翔の目におもしろがる光が宿る。

「ふうん、どんな」

「黒い服着た変な男だ。外へ行く方の入り口に立ってて、消えた」
翔の瞳が驚きによって見開かれる。

「お前あれを見たのか?!」

軋んだ音が、聞こえた気がした。

それは止まっていた歯車が動きだす音。

それは強靱な殻の崩壊の始まりの音。

堅固な檻が今、破られる。

第一章 初 一（後書き）

オリジナル自前サイトからの二重投稿です。感想を聞かせていただきたいと思い、投稿してみました。なので気軽に感想などお寄せいただけると嬉しいです。一言でも、酷評でもかまいません！

物語は序章の序章。手元では七章まで（うち六章は未完）連載しているので、ストックが尽きるまで連続更新を目指したいと思います。よろしく願いします！

第一章 初二

二

「あれはゆえよ。わかるでしょ？」

「まあ顔は似てると思うけど・・・・・・雰囲気が大違いだろ」

「そうかしら。どんな時でもなぜか目を引くって所は同じじゃない？」

「お前だけにはあいつも言われたくは無いと思うぞ」

謎めいた転校生としてもはや校内で知らぬ者はいない存在だというのに、少女はその言葉に訝しげに眉をひそめた。

「どーゆー意味よ」

「お前の方が目立って言ってんだよ」

それともうちよつと普通に笑えよ、と続ける少年の言葉に少女は肩をすくめて苦笑した。

「どうにかしなきゃね」

言っている事とは裏腹に全く別の事を考えている少女の顔を、少年は軽く突付く。

「暴走、するなよ」

「うわ、何で決定事項なの？疑問系ですらなかったでしょ」

「だから、あれからお前目が笑ってないんだよ」

いたずらっぽく笑う少女を本気で嫌そうに見つめながら、面倒そうに口を開く。

「俺も最初は色々聞いてみたさ、名前が同じだったからな。けどあいつは何にも答えないんだよ、どれだけあっちの話をしても単なる夢の話としかとらえない。そんな奴が『ゆえ』な訳無いだろ」

「理屈で言えばそれが正論」

けどね、と続ける少女の瞳に銀の光が灯る。

「あれは『ゆえ』よ。私はそう感じる、ただの直感でしかないけど、

これを無視する事なんて私には出来ないわ」

口だけで微笑み、少女——月は答えた。

階段を降りながらゆえは深く溜め息をついた。窓の外では既に部活にいそしむ生徒の伸びやかな声が響くのに対し、校舎内は薄暗く人氣が無い。

あの後、いくら問いつめても翔は『いつか話す』としか答えずそのまま黙り込んでしまったのだ。

文句を言おうにも相手はホームルームが終ると同時に転校生と共に姿を消してしまい、言えなかった愚痴めいた言葉だけがゆえの頭に渦巻いている。何と無く面白くない事ばかりが続いている気がしてゆえは再び溜め息を吐いた。

その上ゆえは一人で帰宅している。

一人が嫌だという訳ではないが、こんな時に一人だとろくな事にならない。いつもなら翔が真っ先に気づき、何やかんやと話題を振って気をまぎらわせてくれる。だが自分だけでは意識転換が大の苦手なため、ずるずると思考の泥沼にはまっていくのだ。

眉間に皺を寄せ、乱雑に頭をかく。

本当の原因は他にある事はわかっている。真実心にひっかかっているのはあの、転校生。

心中で渦巻く感情は、焦燥か、不安か、戸惑い、困惑か——

——夢から目覚めた時にも似た感情がああ転校生を見てからずっと心の底にこびりついているのだ。確かめようとするすると手から滑り落ちるごとく消え失せのに、靄のごとくつきまとうこの感じはつきりと自覚が無いまま、むしろ自覚が無いからこそ、もどかしい不安といらだちを抱えこむ事となり、自然とゆえの顔は険しくなる。

むすつとしたまま下駄箱の蓋を開けたゆえはそのまま硬直した。

(・・・・・・?)

視線の先には白い手紙があつた。そつと取り出し封を切る。
中にはこんな文字が記されていた。

若狭 ゆえ様へ もしあなたが夢想界むそうかいのゆえなら図書館まで来て
下さい。 淡路 月より

数秒間の思考停止の後、ゆえは頭の中で紐状の物が千切れる幻聴
を聞いた。

そうすると同時にまるで湧き上がるように怒りが湧いてきた。冷
静に考えてみればこの手紙だけでそこまで怒りを覚えるのはおかし
い。けれど自覚の無いまま疑問と不審を溜め込んでいたゆえは、自
分でも不審に思うほど腹が立って、腹が立った理由がよくわからな
いのでまた腹が立つ。

ゆえは雪達磨式に増えた怒りをいだき、そのままの勢いで図書館
がある階まで上がって行つたのだ。

流石に四階分の階段を一気に駆け上つたので息がきれた。息を整
えながら図書館の薄茶色をした木製の引き戸睨みつける。通常は人
が溢れ、活気のある憩いの場なのだが、そのせいか人気の無い今は
廃墟のような雰囲気をかもしだしている。

磨り硝子越しに見える影から、手紙の差出人は窓際の本棚にもた
れかかっているようだ。

手をかけ一気に戸を開ける。軋んだ音が静かな空間に響いた。

ゆえが室内に足を踏み入れるのと、少女が顔をあげたのは同時だ
つた。

薄茶と薄墨の視線が重なる。

引き込まれるような虹彩の色に、ゆえは一時怒りを忘れた。

驚く程澄み切っていて真剣な光を称えている瞳は、銀の光を宿している。名前や声だけに気を取られていて気がつかなかった綺麗な顔立ちにも、密かに眼を見張った。

不思議な気分だった。目が離せなくなるのに、なぜかこれ以上近づいてはいけないと感じる。

少女はふつと表情をやわらげた。

「よかった。やっぱりゆえだったのね」

行き成り意味不明の事を言われた、ゆえはぽかんと立ち尽くした。少女は尚も続ける。

「間違つてたらどうしようかと思った。転校した初めの日に変な奴だと思われるのは、絶対嫌だったからね、良かった。それはそうとあんた一体今まで夢境界のどこに居たのよ？行き成りいなくなつて一年半も姿くらませて。翔も柚もすつごく心配したのよ」

一年半——その言葉を聞いた瞬間、出端を挫かれ今まで忘れていた感情が一気に戻ってきた。その感情に押し流され、吐き出すかのように言い放つ。

「俺はあんたなんか知らないし、ムソウカイって何の事だ！？俺がこの場に來たのは、ただこの手紙がどういう意味なのか気になったから！ただのいたずらならやめてくれ」

驚きに月の瞳が見開かれ、淡い色の瞳を更に薄くする。それを見てゆえは我に返った。

「悪い。怒鳴るつもりじゃなかったんだけど。だけどあんたがあまりにも夢に出てきた人と似ていて……」

口を滑らせたと気がついたのは言った後だった。慌てて口を閉じたがそれを無視するように月が言った。

「本当に、本当にゆえじゃないの？翔も全然“似てない”って言うたけど。まあ眼つきは全然似てないし、髪も普通なのは認めるけど、でも、名前全部同じだし、顔立ち似てるし」

「だから知らないって言っているだろう。だいたい一年以前の記憶は俺には無いんだ、あの事故で記憶喪失になったんだか……」

「しまった、と思ったが時はすでに遅く、今度こそ相手に言葉が届いてしまった。」

「記憶喪失って……」

何、とでも聞きたかったのであろうが、不意に背後から声が響いた。

「あなた達、校時刻はとくに過ぎていますよ！こんなところで何をしているのですか」

ゆえにとつては嬉しい事に、会話を打ち切る口実をわざわざ与えてくれたようなタイミングで図書館担当の教師が近付いてくる。

「一体何をしていたのですか？」

ゆえが言い出すより早く、少女が口を開く。

「若狭君に図書館の利用の仕方をきいていたんです。私、今日初めてこの学校に来たので」

咄嗟に堂々とこんな大嘘がよくつける物だとゆえは感心しそうになった。

教師もこの大嘘を信じてしまった様子で『それは明日にして、早く帰りなさい』とだけ言い残してさっさと行ってしまった。

足音が完全に遠のいた後、少女が振り返った。

「これ以上ここに居るとまたさつきみたいになるとの思うから、場所を変えようか？」

形は問いかけだが実質的には決定と変わらない言葉。

「私の家でもいい？それ以外思いつかないし。あ、でも此処から行くとなると場所がいまいち良く解らないんだけど。この場所わかる？」

月がゆえに手帳を渡す。簡単な地図と走り書きのような字で住所が記されていた。

「『丘陵^{丘陵}荘A・二白^{二白}詰』って……」

「変わっているよね、それアパートの名前よ」

尚も沈黙しているゆえにいぶかしみ月が尋ねる。

「どうしたの？」

「俺の家、『丘陵荘A』一葵……………」

何と、隣部屋だったのだ。

（何やってんだろう）

目の前で鞆から鍵を取り出そうと、悪銭苦闘している少女を見ながらもうもう一度同じ言葉を、今度は吐きだすように小声で呟いた。
「何やってるんだろ……………」

よりによって二学期最初の始業式。隣にある自分の家にも帰らずに今日会ったばかりの第一印象最悪の転校生と五分間も部屋の前で鍵を探している……………そう考えると頭痛がした。

「管理人さんに頼んで開けてもらおうか？」

その声には、早く終わらして欲しい、という気持ちかなり入っていたが、それに気づいているのか気づかないふりをしているのかわからないが月は答える。

「あ、ちよつと待ってもう少し。慌ててたけどちゃんと入れたのはわかってるのよ。あ……………あった！」

語尾はそのまま歓声にかわった。月はすまなさそうに手早く鍵を開ける。

「ごめんね、待たせちゃつて。あんまり片付いてないけど、上がった」

言いながら自分から先に急いで中に入ってしまった。
のぞきこめば部屋の作りは隣室とかわらない1Kの部屋が見える。一番奥の窓側にベッドがあり、右側には机と本棚。左側にはダンボール箱が七、八箱積み上げてあった。

殺風景な部屋、というのがゆえのこの部屋へ対しての感想だった。ゆえ以外の人が見ても同じ感想を述べただろう、また人の住んで

いる気配の無い部屋、と言ってもいい。

布団が角に畳まれているベッド。からっぱの本棚。同じく何も置いてない机。何年も人が住んでいないような雰囲気。部屋中にたちこめていた。少女がダンボール箱の一つを開けて硝子のグラスを取り出す。

「今日の八時頃引越して来てね。私は両親とも亡くしていて、明日華さん——叔母さんに育ててもらったの。けど、その人仕事の関係で外国に転勤になっちゃって私だけ日本に残ったのよ。道理で隣に人が引っ越してきた事を知らなかったわけだとゆえは思った。学校まで行くのに十五分近くかかるためにはいつも八時四十五分には家を出ているのだ。」

月は冷蔵庫からペットボトルをとりだし、先程のグラスに麦茶を注ぎながら続ける。

「それで、ついでに住んでたマンションも売ろうってことになったの。どうせなら知り合いの多い土地のほうが言って、わざわざこっちのアパート探してくれて。でも、そのおかげで始業式ぎりぎり引っ越してくる事になって」

はい、と麦茶の入ったグラスをゆえに手渡し、今度は備付けのクローゼットからなにやら座布団まで引っ張り出す。

変わった奴だつとゆえは思った。人が聞いたわけでもないのに自分の家の事情を話し始める者などそうはいないだろう。

「ところで図書館で記憶喪失がどうのこうのって言っていたけどどういう事？」

行き成り核心を突かれて、ゆえは飲んでいたお茶でむせた。

そして、もうこうなったら全部話そうと口を開く。半分以上自棄の感情が手伝っているきがするな、と心の隅で思ったが故意に無視した。

「二年——正確には一年半前、俺は交通事故にあっただんだ。月は驚いたように何か言おうとしたが、思い直して先を促した。「家族で旅行に行くはずだったらしい。そしたら山道でスリップし

て……あんまり人が来ないような場所だったから、発見されるのも遅くって。父親や母親はほとんど即死らしくて助からなかった……俺もかなり瀬戸際までいったらしくって、そのせいで記憶喪失になったらしい。

……と言うかこれも後から聞いた話だから実感無いんだ。とにかく気づいたら病院のベッド上で。一般常識とかはわかるんだけど、家族や、友人や、自分の名前さえ、わからなかったんだ……」

コップの中のお茶に目を落とし続ける。焦げ茶の液体は握りしめた体温で少しづつぬるくなっていった。

「そのまま同じ土地にはいくらなんでも住めないだろう、って言う事でここに引越した。だから、もし昔の俺の事を知っているなら、そういう事だから覚えていないんだ」

少しの沈黙の後、月が奇妙にうわずった響きの声で問う。

「事故の後に、妙な感覚がするの事なかった？例えば誰かに呼ばれているような気がする事とか」

「は？」

ゆえの不思議そうな顔を見て月は困ったように笑う。

「心当たりが無いなら気にしないで別に変な意味は無いから。変な夢を見る事は無い？例えば繰り返し同じ夢を見るとか」

変な夢なら見たことがある、と思ってゆえは月に今朝も見た夢――

――事故があつた日から見続ける夢の内容を語った。

それを聞いた月は何やら困惑しつつも納得したような笑顔を浮かべた。

「やっぱり、あなたは私達の探しているゆえだと思う。前住んできたのって京都でしょ」

「そうだけど……俺も一つ聞いていいか？」

どこことなく嬉しそうにしている少女にゆえは質問してみた。

「さっき、図書館で言っていたムソウカイって何？」

月は嬉しそうな表情を消して、僅かに困ったような表情になった。

「ごめん。今は説明できない、と言うより信じてもらえない。でも、すぐに説明出来るようになると思うよ」

月は微笑ながら答えた。

（そんな事言われたら・・・・・・・・・・気になるだろう）

重苦しい溜息をついて、ゆえは頭を振った。

最近、ため息が癖になったような気がして顔をしかめる。今日だけで何回溜息をついたか数えようとして、結局はやめた。とても馬鹿なことをしているような気がしたし、今日の奇妙な出来事が鮮明に脳裏に浮かんでしまったのだ。

頭に置いたタオルで適当に頭を拭きながら脱衣所を出ると、電話の再生ボタンが点滅していた。珍しいと思いついて押してみる。この電話には留守電どころか電話一本かかってくることさえ珍しく、再生ボタンを押すのも数週間ぶりになる。不愛想な自分の声の後に響いた声を聞いて、ゆえは硬直した。

『淡路 月です。言い忘れていたけれど、もし今日の夢で夢境界っていう変な世界行ったらオリイコフの港町にある時計塔にきてください』

ピー、っと電話が鳴った。

ますます訳がわからなくなった頭で考え、もう今日は寝てしまおうと言う結論にたどりついた。妙に疲れた気分です団に潜り込む。

眠りにつく瞬間に、あるいはもう眠った後だったかもしれないが、声を聞いた。ゆえは気づかなかったけれど、確かに声はこう言った。

『出会ってしまった・・・・・・・・・・もう、止められない。“時”が動き出してしまう・・・・・・・・・・』

声は確かにそう言った。

第一章 初三

三

一番最初に、『異変』に気がついたのはゆえの五感の内“嗅覚”だった。

部屋の中では絶対ありえない、沢山の瑞々しい木々の香り。

二番目は“感覚”だった。

ベッドに寝ていたはずなのに、手から伝わってくる感覚は間違いなく草だったその下に硬い地面の感覚もある。体の上に載っている軽い物——たぶん落ち葉だろう。まで感じられた。

三番目は“聴覚”だった。

葉の擦れ合う音。木々のざわめきや小鳥の声。

最後は“視覚”。

起き上がったゆえの目に映ったのは林の朝だった。林と言ってもさほど大きくも無い様子で、少し先までいくとその先は道になっていて行き交う人々の姿が見え、声が響く。

茫然としているゆえの頭の中を、全く当たり前の個性がないセリフがぐるぐる廻りだす。『ここはどこだ』という疑問系の言葉。しばらくその言葉は廻り続けたが、ただ座っているだけでは能がないと判断し、のろのろと立ち上がる。

体の上の落ち葉を払いながらまた、妙な点に気がついた。

服装である。歴史の教科書で見たフランス革命前の平民と貴族の中間のような服。青い上衣を革のベルトを締め、その下には黒い細身のズボンが覗いていた。上着と帽子、それに銃があったなら西部劇のようにも見えたかも知れない。

さらに困惑しながらも、とりあえず森を抜け道に出る。

そこは朝市の真っ最中らしかった。女も、男も、老人も、子供も、売り手や買い手になり夢中で自分の利益を得よう必死になっている。

「おい。そのあんた。あんた旅人だろう？この辺じゃ見ない顔だちだし。うちの干し肉どうだい？味がいいし何より日持ちがするから、旅にはもってこいだよ！」

どうやら自分に話し掛けているようだったと思い、ゆえは目線を声のほうに向ける。声をかけた中年の女性は、砂漠に住む民族のよう目元以外は布を被った衣装をまとっていた。

「あの。ここ、どこですか？」

女性はさも当たり前のように誇らしげに答えた。

「何だ知らないのかい？オリイコフの港町さあ、ああそうか。あんたは陸から来たんだね。それなら知らないの無理はないさ。ここは、夢想界一の港町なんだよ！」

“夢想界” っていう、言葉を聞いてゆえの頭に閃くものがあつた。確かあの手紙にそういう言葉があつたではないか。寝る前に聞いた留守電のメッセージにも。

すると、どうなるのだろう—— 確かあのメッセージの続きは——

「おばさん！！時計塔ってどこにあるっ！！」

「へ？！と、時計塔？あ、ああそれなら五つ目の角を曲がってすぐの広場にあるけどそれがいったいどうしたんだい？」

それだけ聞くとお礼もそこそこには、勢いよく走り出した。茫然とそれを見送った女は隣の店の主人と顔を見合わせた。

「なんだっ たんだろう、ねえ？」

「さあな」

ゆえは、何かに急かされるように走った。途中で何回か、籠に荷物を詰め込んだ人物にぶつかり、一人には危うくつかみかかれそうになったが、何とかうまく逃げ仰せた。

無茶な走り方に加えそんな事を繰り返していたので、建物の先か

ら時計塔が見え隠れする頃には完全に息があがっていた。

目的の時計塔は水晶の原石のような六角形型の建物。上の方に妙な文字でかかれたやたら大きい文字盤が目立ち、針が朝陽を受けて銀色に輝いている。

その時計塔の下にゆえの直感どおり、少女がいた――長

い黒髪を細く三つ編みにした、薄墨色をした瞳を持つ少女。

「おかえり、ゆえ」

淡路 月は独り言のように、そう告げた。

「流石に今日中だとは、思わなかったわ」

月は驚いたような声で言ったが、それほど態度と表情に表れてはいない。

平然と『まあ、これるとは思ったから教えたんだけど』などと呟いている。対してゆえは息を整え、一番不思議に思っている事がつ、半分ほど確信していることを言ってみた。

「もしかして夢想界って……この、事？」

「あれ？良くわかったね」

ゆえが半信半疑で口した言葉に月はきわめてあっさり答えた。余りにも普通に言われた。確信していた事とはいえ余にもあっさり言われたのでゆえその意味がすぐに理解できなかった。

「突っ立ったまま説明するのも難だし。歩きながら説明するわ」

ゆえが走ってきたとは、逆の方角――――おそらく西の方を

月は指差す。

「夢想界っていうのは、此処の事。まあ、こっちで一般的には、現実の方の言い方でいう『世界』って言う意味で良く使っわ。普通は眠った状態で夢想界^{ユエ}に来るの。だから私達は異世界のような場所だと解釈してる」

「普通の夢とどこが違うんだ？」

まだ動揺しているゆえは当然の疑問を月にぶつけた。月は、ちらつと微笑を浮かべ答える。

「毎日まったく同じ不思議な夢を観ていても、普通の夢と言い切れる？自分の同じような人が何人もいても」

聞けば聞くほど常識からは必然的に外れるようだった。まあ、ゆえ自身もそこにいる以上認めないわけにはいかないのだが。

ふと少女の服装にも妙な点がたくさんある事に気が付く。

緋と表現するのが相応しい色合いのズボン。真っ白い長袖のシャツに、変わった——片方の肩紐に碧色の飾石が付いた、ズボンと同じ緋色の短甲を身に付けている。それだけでも十分変わっているのに、腰には銀と白金の中間のような色合いのをした細い剣を下げているのだ。自分の服装も十分『変』だと思うが、少女の服装は『変』という物を通り越して『妙』という感じさえした。それこそ『異世界』や『異邦』と言うのが正しいような——

「ねえ、聞いている？」

「は？」

「ああもう。ちゃんと聞いててよ、唯でさえ知ってる奴に説明してようで変な気分なのに。袖に聞かれたら、大笑いされそうだわ」

「あ、悪い」

どうやら、ゆえが一人で考えている間も説明していてくれたらしい。謝ると一瞬きよんとして、次の瞬間声を立てて笑った。

「あ、あいつらがその言葉を聞いたら。あの『鉄面皮のゆえ』がこんな奴になってるの見たら。どんな顔するのか、見物だわ」

いたずらを仕掛けた子供のように笑む月を見ながら、ゆえはさつきから、聞き忘れていた事に気づく。

「“あいつら”って事は、ほかに誰かいるのか？」

「あ、うん。二人いるよ。今それも言ってたんだけど。そこから聞いてなかったの？」

薄い瞳をあきれたように瞬かせた。

「柚と翔。あ、翔はわかるよね今日も話してたんだから。二人とも

仲間よ」

今日話した“翔”と言えば一人しかいない。

「……………もしかして……………それって……………武蔵翔の、事？」

「うん。」

「俺と同じ学校の？」

「うん。」

「俺と同じクラスなの？」

「うん。」

「本当……………？」

「うん。私も今日から同じクラスになったんだけど、ね」

ゆえはおもむろに自分の頬に手をかざし、軽く叩く。夢か現実かを確かめる、まったく古典的なほど使い古された物である。

答、痛いイコール少なくとも、普通の夢じゃない。

迷信だと言うことすら気づかず、当分 “常識” という言葉と、分かれる決心をした、ゆえだった。

「あ、着いたよ」

今、目の前にある建物はどう見ても明治の建築物だった。煉瓦建ての三階あまりある建物に理解不明の文字の看板が掛けてある

「……………ここ、あんたの家？」

民家にはまるで見えない建築物を見上げながら、恐る恐るゆえが尋ねる。

「そんなわけないでしょうが？ここは宿屋。泊まっているだけよ」

この世界の常識はまったくわからない。驚いた事には木造建築風だった。一階を通り抜け、ぎしぎし軋む階段を登る。古風なホテ

ルのような廊下に出たところで、遠くから罵声が聞こえた。

今日何度目かのいぶかしむ表情のゆえをよそに、声を聞いた月はうんざりした様子に廊下を進む。そして罵声の発現地である部屋のドアを無造作に開けた。

中には二人の人間がいた。一人はゆえの予想したとおり――

――武蔵 翔。もう一人は、見知らぬ明るい金の髪をした少女。

「だ、か、ら！私は知らない、って言ってるでしょう！」

「そんなこと言っただってこの部屋に朝から居たの、お前一人だろ？月は、明け方出かけてるし」

「だから私のこと疑うの？！」

少女は足を踏み鳴らし、怒りに藍の瞳を煌めかせていた。

「誰もそんな事、一言も言っていないだろ！“誰がやったか見てないか”って聞いているだけで誰もお前がやった何て――」

言っていない、とても翔は言いたかったのだろが、続きは進み出た月によって遮られる。

「はいはい。ストップ、ストップ。今度は何？」

日常茶飯事なのかはわからないが、慣れた様子で割って入り事情を聞き始める。どうやら、少女の部屋に置いてあった翔の鞆が勝手に開けられ、中に入った物――主に食べ物、が荒らされていたらしい。

そこまで聞くと月が思い出したように言った。

「そういえばここのおかみさん、言っただけだった？『この辺り野良猫多いから、へたに部屋に食べ物置いたまま窓開けておくと、中に入ってきて荒らされるよ』って」

「え？」

少年と少女は同時に呆けたような声を出した。

「昨日暑かったから夜から窓開けっ放しだったし」

月は鞆の中を探る。微笑んでつかみ出した手には赤茶の短い毛が握られていた。

「犯人は猫に決定ね」

月が満足げに言った。翔はすぐに我に帰ると、まだぼかんとしている少女に謝っていた。

「あの……」

ゆえは思わず声をかけた。忘れられているような気がしたからだ。今まで部屋についたは良いが、それから部屋のなかに入るに入らず、入り口で立ち往生して口喧嘩の行方を聞いていたわけだ。

効果はあった。数秒間の沈黙の後、掠れるような小さな声がもれる。

「ゆえ、か？」

「そう、ゆえよ。それに私達と同じ学校のゆえでもあるわ。それに付いては、ちよつと複雑だし驚く事もあるだろうけど、最後までちゃんと聞いてね」

眼を見開いたまま、沈黙している二人に言い訳するように月が言った。

「という訳だったらしいの。わかった？」

月の説明は丘陵荘でのゆえの話と、時計塔からこの宿までの月の話を混ぜ合わせて一つにしたような話だった。時折、ゆえには理解不能な単語を挟みながら、話はどんどん進んでいき語り終えた時には結構な時間が過ぎていた。

「あの、さあ。全部本当の話だよな？」

明らかに疑いを含んだ声で、翔が訊く。

「間違いなく、全部本当の話」

きつぱりと自信を持った声で、月が答える。翔は少し考え込んでから、眉と眉を寄せ合わせ、机にへたり込んだ。嘘だろ、という声を発しながら。

「さっきまで、現実で普通にいた奴に、行き成り夢想界のゆえだつて言われてもなあ。正直実感わかないんだよ」

ゆえも全く同じ事を考えていた。行き成り謎の転校生が現われて自分の事を仲間だと言い、変な異世界にまで来てしまい、揚句の果てに自分の友達まで出てきた。

もう、小説、御伽話、ファンタジー、夢の世界である。

「そんなこと言っただって本当の事だもの。だいたい、翔。あんなに近くにいたのに何であんたが気づかなかったの？」

月は小馬鹿にしたように言い放つと、むっとしたよの翔が眉を寄せた。

「それでも始めは疑ってたんだよ。でも、あいつとゆえじゃ三百六十度見た目も性格も違うだろ。だいたい何で俺だけに言っんだよ。柚も同じ条件だろうが」

何とか言った翔の反撃は、月のひと言ではね返される。

「柚はクラスが違うでしょうが。それにあんた達、友達でしょ？」

「……話の途中で悪いんだけど、『柚』って誰？」

突然、ゆえが口を挟んだ。そういえば、学校の図書館でも聞いた名前のような気がする

「あ、私の事。佐保 柚さほ ゆうっていうのと同じ学校よ、隣のクラスだけどくるくると波打つ明るい金髪に藍色の瞳を持つ少女――

柚は、初めまして？で、いいのかな、とつけくわえ微笑んだ。

「外国人……？」

「ううん。クウォーターなの、おばあちゃんが英国人。四分の三は日本人よ」

「信じられないでしょ、見た目ほとんど西洋人なのに血は四分の一だなんて。この前だって同国人だと思われて、外国の人に話し掛けられてあたふたしてたんだから」

「そんな事言っただって、しょうがないじゃない。英語苦手なんだから」

柚は可愛らしくぷう、と頬を膨らませ怒って月に喚いてるが、相手は適当にあしらってお茶の準備をし始めた。それを眺めていたゆえは、ふと思ひあたった。

「そういえば、ここが“宿”なら、“家”はどこにあるんだ？」

「無いよ家なんて。私も、月も、翔も、ゆえもこの世界では孤児だもの。まあそれだけの訳で旅してないけどね」

何やら含みのある言い方である。ゆえがどういう意味かと、尋ねようと口を開きかける。

「翔、呼んでもいないのにお客さんみたいよ。それもすつごく招かざる客」

窓を覗いた月が今までとは全く違った、鋭い声で言い放つのが聞えた。

ゆえはさっぱり意味がわからなかったが、翔と柚の顔色を変えた様子を見て唯らぬ物を感じる。

「嘘でしょ？一昨日に来たばかりじゃない！」

「本当か？あれだけの数叩きのめしたのに」

「流石に数は少ないけどね。見てみなよ。玄関の辺りでうろうろしてるから」

月の言葉で三人とも通りに面している窓を覗く。さっきの露天の女性のように黒の布と頭から被っていた。

「あいつら、今日学校にいた……」

顔が見える訳ではない、ただ雰囲気似ていた。あのぞっとする異質な物の雰囲気。

「ああ、そっぴやいたな。今日学校に」

「どうするの、月。また窓か裏口から逃げるの？」

柚が心配そうな声で問う。僅かな沈黙の後、月はきっぱり言い放つ。

「ここで逃げても、たぶん直に次が来るだろうし、階段で下りればその分あいつらに近づいてしまう。ここ三階だから飛び降りた衝撃で怪我をする可能性も低くない。だからいつその事振り返ちにしてやるわ。幸い向こうも少人数だし」

「わかった」

「じゃ、一応念のために荷物まとめておいて」

「ちょっと、待て。これから何が起こるんだ」

何があだか訳がわからず、硬直していたゆえは月に言う。

「ちよつと、これから喧嘩するの」

“散歩にでも行くの”、というような口調だ。

その時、階段を登って来る音がした。しかも一人の人間がだしたような音ではない。少しずつ廊下を通る足音が大きくなってゆく。

「もう、来た」

顔を顰め舌打ちをしながら柚が言うのが耳に届く。

月は三人に無言で後ろに下がっているように合図し、自分は歩前に出て、白銀の鞘に収まった腰の剣を抜く————拵えは洋刀だが、現われた刀身は間違いなく日本刀。

そして素人のゆえにもわかる、手なれた無駄のない滑らかな手つきで構える。

そして————すべて一瞬の出来事だった。

ドアを突き破るように開けた黒服の一人目が月に斬られ倒れ込むのも、

刃渡りの長い見ただけで痛そうな刃物を振りあげて来た二人目が胴を斬られるのも、

不意を衝こうとした攻撃があっさりかわされ三人目が肩から切り裂かれるのも、

そして、三人ともの体が霧のような白い気体を出し、黒い布のような服だけを残して消滅してしまうのも————すべて一瞬の出来事だった

「ご苦労さま、意外と簡単にかたづいたわね」

柚は拍子抜けしたようにねぎらうと、月は剣を鞘に納めて言った。

「まあね、弱かったし」

「前は、『私だから倒せたんだ』って鼻高々に言ってたのに」

「いつの話よ」

軽口を叩きながら息一つ乱していない。

度肝を抜かれたゆえは、今日すでに何度目かになる硬直状態を体験していた。しかし眼だけは、お願いだから、わかるように説明してくれ！！、と語っている。視線に気がついたように月が口を開いた。

「私、昔から剣道習っていてね。まあ教室何かできちんと習った訳じゃないから型なんて滅茶苦茶だし、正式な資格も持ってないけどそれなりに剣は使えるの。」

こいつらは傀儡かいらいって呼んでる敵さんがこつちを倒すために送り込んで来る刺客。人間じゃない事はひと目でわかるんだけど、それ以上は良くわかんない」

「敵って………あんた達何やってるんだ？」

「『宝珠』っていうのを探してる。まだ色々よくわからないけど、私も、翔も、柚も、ゆえ——あんたも宝珠探しの同士なのよ」

夢の少女。淡路 月は歌うような声で言つと綺麗に微笑んだ。

こうしてゆえ達四人の不思議な異世界——夢想界での前途多難であての無い“宝珠”探しの旅はここから、初まる。

否、このツツキからハジマリを迎える。

第一章 ツツキノハジマリ 完

第一章 初三（後書き）

とりあえず一章、完です。

かれこれ10年前からこつこつ書き溜めている小説で…久々に見ると登場人物が初々しいですね（苦笑） 加筆もほとんどしてないですのでお見苦しい点多々あると思いますが、感想いただけたらありがたいです。

第二章 想 一

二章 想 過去の残影

一

んじゃあ、と教壇の上の黒髪の少年は、チョークを持った手の小指で頭をかきつつ口を開いた。

「今日こそは体文祭のクラス出し物決めるぞ。日程的にもそろそろ取り掛からないとやばいしな。じゃあ、挙手つっても意見で無いだろうから適当に当ててくぞー？」

一人で自己解決し学校祭実行委員の武蔵 翔は目線を窓際の席へと向けた。

「月、何か無いかな？」

「そうね。ちよつと待って」

呼びかけられた少女に自然とクラスの視線が集まる。細い眉を寄せて考え込む少女は、転校してから一週間が経った今でも周りからくつきりと浮き上がった空気を持っている。

クラス全員分の視線にも疎む事無く、薄墨色の眼をまたたかせ少女は口を開いた。

「定番だけど模擬店はどうか？焼きそばとか、パフェとか」

「却下」

あまりに素早い翔の否定に、月は怒るよりも先に困惑した。

「どうして？」

「この学校じゃみんな部活の方に力入れてるからな、クラスの出し物はそんなに時間かかるやつはやれないんだよ。まあどのクラスもそんな感じだし」

だから、と起きつぱなしになっていた誰かの団扇を片手に翔は続けた。

「それなりに見栄えがして、そんなに手間かかんなくて、そこそこに労力がある展示系の案。そんなの無いかな？」

「また難しい事を」

真面目な生徒や教師に聞かれたら、露骨に睨まれそうな言葉をはつきり言うのに月は苦笑したが、クラスのどこからも非難の声は上らず、担任さえも穏やかに微笑んだだけだった。

「こんなんで良いのかしらねー、それならバルーンアート。風船で動物なんかを作って飾ったらどう？」

「ん、じゃあ意見一だな。次、後ろの柏木。何か無いか？」

「ああー、別に何も」

「それ無し。とつと決めねーと部活の方行けなくなるぞ？」

「んな事言われても思いつかねーし。無いもんはだせねーだろ」

だらしなく机にもたれかかったままそう言ったクラスメイトに、翔はにやりと笑った。

「じゃあお前一発芸な」

「は？いやちよつと待て武蔵！どうしたらそう言う話になるんツ」

「うっさい言わないお前が悪い。ほらとつとと言えよ。六十、五十九、五十八……」

「カウント制かよっ」

二人のやりとりに教室中から忍び笑いが聞えてきた。そんな周囲を睨みつけつつ少年は悩んだ末叫んだ。

「モザイクアート！ほらあれ、色紙切って張っていくやつ！ー」

「それ去年の三年がやってただろ」

「いいだろうが一年経ったんだし。ともかく言ったからな」

肩をすくめて翔は黒板にモザイクアート、と追加した。

「次は、と。ゆえか」

「え？」

ゆえは、固まった。

そもそもこれまでのやりとりもぼんやり聞き流していたのだ。早く言わないと一発芸だぞー、と告げる翔の声さえ恨めしく思いながら必死に考える。

もともと学校祭なんて興味も関心も皆無で、いつそのことさばろ

うかと考えていたくらいだ。一般的にどんな物があるかなど知るはずも無い。

（かといって一発芸の方がもっと厳しい……）

恥しい云々の前に、ネタとなるような事柄すら見当もつかない。

顔は無表情だが内心だらだらと冷や汗をかいているだろうゆえを見て、月と翔は顔を見合わせた。

「ゆえ」

翔に名前を呼ばれて顔を上げれば、なぜか薄墨色の視線とぶつかった。黒板脇の掲示板を指差して月はにっこりと微笑む。

つられるようにそこを見れば、そこには『晝商店街、秋の陣』という黄色い文字が踊るイベントのチラシが張られている。つらつらと目で追い、ゆえは二人の意図を理解した。

「募金」

チラシの中にはイベント会場には募金箱が置かれているため協力してほしい、という旨が書かれていたのだ。感謝の気持を込めて目礼すれば、二人から同時に気にするな、という意味合いの仕草が返ってくる。

「じゃあ次は健二、何かあるか？」

「無いから一発芸！！今日の校長の真似！！」

階段を踏み外して、二、三段ずり落ち必死になって手摺につかまる、という様子をパントマイムさながらにやってのけると、周りから爆笑とアンコールがかかった。

受けたり受けなかったりする一発芸がいくつか入った結果、出された案は十数個だった。それをすべてノートに書き写し終え、翔はぐるりとクラスを見回した。

「この案の中から籤で決めるから、明日朝決定な。今日は解散、お疲れ！」

語尾が途切れるのと同時に机や椅子を動かす騒々しい音が響きだす。我先に後ろのロッカーへと鞆を取りに行く流れに逆行しながら、ゆえは壇上で黒板を消す翔の元へと向かった。

「さつきは助かった、ありがとう」

「それは月に言ってやってくれ。実はあれ、俺が考えたんじゃないんだ」

「……そうなのか？」

「そーだよ。“ゆえに一発芸はきついだろう”ってな」

なにやら無表情のまま考え込んだゆえの様子を横目に見て翔は軽く笑った。

「ほら、さつきと行かないと月に追いつけないぞ？あいつ歩くのも速いからな」

慌てて首をめぐらせるがすでに教室内は閑散としており、少女の姿は消えていた。

急いで教室を後にする友人を見送り、翔はそつと呟いた。

「わかりやすくなったよな、あいつ」

昇降口は、下校しようとする生徒で溢れていた。苦勞して進みながら目を凝らせていると、程なくして長い三つ編みの少女の姿を捉えた。ゆえが声をかけようとするより早く、かかとをそろえ靴を履き終えた月が顔を上げる。

「どうしたの、ゆえ」

鞆も持たずに、と首を傾げられ初めて手ぶらで昇降口まで来たことに気づく。再び四階分の階段を上るかとうんざりしつつ、まあいいかと思ひ直す。

「さっきのあれ……あんたが考えてくれたって翔に聞いたんだ。ありがとう」

月の顔が奇妙にかたまった。途惑ったようでもあり、苦笑したよ

うでもある、何ともさまざま要素が入り混じった表情だった。

「・・・・・・・・・・どうかしたのか？」

「ううん。何でも無いの。それからどういたしまして」

表情を素早く笑顔に切り替え、月は言った。

「じゃあ、また後でね」

「ああ」

歩く動作につられて、生き物のように三つ編みが跳ねる後姿を、ゆえは長い間見送っていた。

（“後で”、か）

第二章 想 一（後書き）

最初は一章『初』↓二章『祭』だったのだが、その後の展開で夢
界があまりに出てこず後からねじ込んだ新二章の『想』。
ちよつと地味めな話です。

第二章 想 二

二

横になり、瞳を閉ざす。そうすればしばらくすると体の中心が沈み込むように、意識が闇へと飲み込まれていく——だが、ゆらゆらと水をたゆたうような意識は、そのまま沈みきってしまわず決まっていつの間にか浮かび上がっていくのだ。

薄目を空けて、ゆえはぼんやりと瞬きを繰り返した。

視界に広がるのは電灯を消した闇ではなく、やわらかな朝陽に照らされた素朴な壁。

光に眼をしばたたかせ、ゆえは起き上がった。

体が軽い。それどころかしっかり眠った後のような気さえする。

それが不思議だった。ここが“夢の中”だとするならば、わずかも眠らずに新しい一日を始めたような気がするのではないだろうか。

試しに衣服整える手を止め、手の甲を抓んでみれば、それなりに痛かった。

混乱しかかった意識を停止させ、部屋を出る。向かったのは居間として用いている部屋だ。

三部屋で一室になっっている宿はそれぞれ、居間、男子部屋、女子部屋というようにいつも使っているらしい。お金ないと一部屋ずつ消えてくけどね、と金髪の少女は肩をすくめて教えてくれた。

「ああ、ゆえ。おはよう」

無人だと思っていた居間には黒髪の少女いた。胡坐をかいて窓際に座り込み、剣を鞘から抜き何やら眼を凝らしている。

「……………何やってるんだ？」

「点検。切れ味が落ちてきた気がしてね、やっぱり砥屋に出さなきゃ駄目かしら」

慣れた仕草で鞘に収めるとすっと立ち上がった。

「ゆえもつご飯食べた？」

無言で首を振ると、少女の顔が輝いた。

「ねえたまには外に食べに行かない？連日部屋にこもりっぱなしじや退屈でしょう」

月の言ったとおり、ゆえはあれからほとんど宿から出ずに過している。特に理由はない。しいて言えば性格といえるのだろうか。

未知に遭遇すると大抵の人間は動揺すると同時に好奇心も覚える。この年頃の人間の中で特に。だがゆえは例外だった。初めのうちはかなり迷惑っていたが、慣れてしまえば何もしなくなった。

別にそれに不都合はない。今は特に用事も無く、みな思い思いに生活している。だがその様子はあまりにも物憂げで気だるそうで、傍から見ていると妙な不安を覚えるのだ。

「部屋で硬いパンをかじるよりもずっと楽しいわよ」

有無を言わず月はゆえの腕を引つ張り、外へと連れだした。

昇った日を背に、西へと二人は歩いて行つた。並びはせず、少女の数歩後を少年が気乗りしない様子で歩いている。

だがそれも市へと着くまでだった。

市場の有り様に自然とゆえの眼は驚きに見張はられる。初日以上の賑わいを見せる市場は、処々に花や房飾が飾られ華やかさに一層磨きがかかり、露店から食欲をそそる匂いさえ特別な気がしてくる。

「今日は祭の日みたいね」

耳元にささやかれた言葉にぎよつとすれば、いたずらっぽい薄墨の眼とぶつかった。

「そうだな」

答えた自分の声色があまりに嬉しそうで、思わず口元を抑えていた。いつのまにか浮き立っていた心にゆえは動揺する。始めは決して来たいとは思わなかったはずなのに、なぜなのだろうと考え込ん

でいた。

(・・・・・・あいつのせいかな?)

視線を受けた少女はそんなゆえの様子にかまわず、次々と露店をひやかしながら進んでいく。店番の少年と話しこむ姿をゆえは目で追っていた。

自分は打ち解け易い性格ではないはずだ。どちらかといえば警戒心の強い方だという自覚がある。にもかかわらず、月という少女に抱いていた警戒心は今ではほとんど薄れてしまった。

それはやはり、覚えていなくても長年一緒にいたからなのだろうか。

伏せた顔の前にぬつと白い手がかざされた。そのままひらひらと扇ぐように動く。

「暗い顔してどうしたのよ」

「・・・・・・別に」

不愛想な対応だったにもかかわらず、月は小さな笑い声を響かせた。

「そう。ならこれあげるわ、おいしいわよ？」

目の前に差し出されたのは木の皮包まれた揚げ物だった。肉や野菜を小麦でからめ香辛料がかけられている。礼を言っ受けて取ると、再び月の表情が微妙な物へと変化した。

――昼間に現実で見た、途惑ったようでもあり、苦笑したようでもあり、何とも色々なものが込められた表情。

「あんたこそどうしたんだ？」

ゆえの困惑顔を目にしてごまかすことを諦めた月は、苦笑しながら告げた。

「まさかゆえからお礼が聞けるなんて新鮮だな、って思っただけ」呼吸が止った気がした。間接的には言え、月が昔のゆえの様子を語ったのはこれが初めてだった。

自分の記憶にまつわる類いの事は、ゆえにはどうしても聞く気になれない。それを敏感に悟ったのか三人ともそう言った話を振るこ

とは無かった。

例え訊かれても、“どうして憶えていないのか”などと訊かれても、答えられるはずが無い。

「あんたには、俺はどう見えてるんだ」

「どういう、意味かしら？」

さまざまな事柄が渦巻き、ゆえは口を嚙んだ。

――姿を消した自分

――記憶が無い自分

――以前と変わった自分

それをどう思っているか聞きたいはずなのに、言葉にはならない不安が口を閉じさせる。

「ゆえは、ゆえよ」

やわらかな声に、ゆるゆると視線を上げれば月が微笑を浮かべていた。桜色の唇がゆつくりと動き笑みを形作り、薄墨の眼には慰めるような暖かな光がやどる。

「その他は、私にはどうでもいいの。あの日ゆえが消えてから色々な事を考えたわ。最悪の事態も覚悟してた。けど、ゆえはもう一度私の前に現われてくれた。どんなに変わっても、私は“ゆえ”に会えて嬉しいの」

そんなに簡単に思い切れることでは無いだろうとゆえは思うが、薄墨色の眼は偽りの蔭は見当たらなかった。

ゆえの心境の変化を読み取ったように、月は明るく言い放った。

「さ、行こうよゆえ。これだけじゃ朝ご飯足りないでし、何か美味しそうな物を探しましょうよ！」

ゆえは視線を感じて身を起こした。

手はこれまでに買った軽食や飲み物で溢れている。なんせ今覗いている屋台は実に十番目なのだ。口に運ぶ間も無く次々と少女は買い求め、それをゆえに渡していく。

少女にとつてはゆえのあまりの交渉の下手さを見かねて変わりに買っている、という感覚なのを知らずゆえは溜息をつく。

（よく金あるよな・・・）

そういえばこの資金はどこからきているのだろうかと今さらながらの疑問を浮かべる。保護者もないこの世界で生活する資金をな、他の誰かに与えられたわけでもなく――何らかの方法できつと稼いでいるのだろうか。そのあたりのことはまったく聞いていない。

機会があれば訊いてみようかと微妙にずれた結論を出し、ゆえは目を彷徨はせ視線の主を探す。おそらく柚か翔のどちらかだろうというゆえの予想は裏切られた。

無意識の内にあとずされば、迷惑そうに押し返された。その拍子に壁に腕を擦られゆえは我に返る。

――ゆえの視線の先にいたのは、滑るように歩く黒い影のような存在。

自分ではどう対応して良いのかわからず、必死に少女の姿を探すが見当たらない。その間にも黒服は着々と距離を縮めてくる。

生理的な嫌悪に駆られ、逃げだそうと結論付けると強く腕を引かれた。弾みで落とした荷を拾う暇をさえ与えられず、気づけばゆえは駆け出していた。

「馬鹿ね」

耳にたしなめる口調で言葉を落とされた。人込みから外れた頃になつてやっと月は手を離れたが、歩調は緩めようとせず依然としてかなりの速度で進んでいく。

「傀儡に出くわしたらとりあえず逃げなさい。ぼけつと眺めていたら見つけてくれて言うてるようなものよ」

言われた内容には憤慨したが、少女の気迫に圧されそれを述べる事は出来ない。腰の銀剣に手を当てて走る少女の姿は軽口など赦さない緊迫感に満ちていた。

闇雲に路地をすり抜け、ひた走る。空気に潮の匂いが混じり始める頃、月は唐突に足を止めた。息を整えつついぶかしみながら少女の顔を窺えば、口の端を曲げた笑みを浮かべていた。

「囲まれたわ」

驚いて四方を見回せば、後方には二人、前方には三人の黒服達が滑るように近づいてくる。

朝日を浴びた波止場は金色に染まり、そこをひたひたと進んでくる黒衣の傀儡達には不気味な威圧感がある。思わずゆえはたじろいだように後ずさった。その怖れが色濃く現れた顔を眼にした月は、軽く息を呑み、そのまま吐き出した。

（完全に頭を切り替えなきゃね）

——自分の傍らにいる少年は、かつての彼では無いと。自分に言い聞かせながら、右足を踏み出し腰を捻りながら白刃を抜く。

——戦いなど知らない、普通の少年なのだと。

しっかりと柄を握りしめ、正眼にかまえる。

——ゆえは本当に忘れてしまったのだと。

見た目はかつての同胞とまったく同じ少年へと視線だけに向け、慎重に口を開く。

「ゆえ。そのまま壁まで下がって、そのまま壁で背中を守ったまま待機してて。いいわね？」

——自分が、守るしかないのだと。

「傀儡は全部私が倒すから」

その言葉が言い終わるらないうちに、月は動いていた。眼前の黒服に薙ぐように切り捨て、後の者へと踊りかかる。間髪いれずにそれを倒し、斬りつけられた所を剣で受け止め、それを引く事で体制を崩させ、隙を突く。

輝きを色にしたような金色で染め抜いたよう暁の波止場、対照的に差し込んだ影のような傀儡。その間を緋色の少女が走り抜けるさまは、闇を払う燈のようだった。

「終わったよ」

ゆえがその言葉をきいた時には、すでに黒衣の化生はすべて消滅し、ただの布の塊となっていた。重なり合ったそれらを見ていると、先ほどの情景が嘘ではないかとも思えてくる。だが少女の手にある真剣の鋭い輝きが、現実である事を告げていた。

助けを求めるような視線を向けるゆえに、月は鮮やかな笑みで答え、言った。

「ゆえ、握手しよう」

「は？」

冗談かと思ったが、どうやら違らしい。笑って入るが少女は真剣な目でこちらを見ている。困惑顔のまま動かないゆえの手を取り、引っ張るように握って月は言った。

「これから、よろしく」

二章 想 過去の残影 完

第二章 想 二（後書き）

地味めな話ですが、二人の心境の変化が現われていてわりと気に入っています。

後から書いた話なので、後日のネタがちらほら仕込まれている、という。

次回は打って変わってドタバタ話です！

第三章 祭 一

第三章 祭 疾風怒濤の文化祭 一

すぐそこに冬の気配を感じさせる冷たい澄んだ風が吹き、空を眺めればあたりの風景が不自然に、浮いて観えるほど綺麗すぎる青い空が広がっている。

只今、ゆえ達の通う遠江付属中学校内では、一週間後にひかえた“文体祭”という文化祭と体育祭の合同祭——— 実際にはある一つの事柄を除きほとんど文化祭だが——— の準備のため陽気な雰囲気につつまれている。

授業も短縮され放課後がやたらに長く、その放課後はほとんど準備に使われるので、雰囲気からも陽気な活気が感じられる午後。ゆえは廊下を走っていた。

この学校では何故が変わった規則が多い。その一つに『文体祭開催時には全生徒何等かの形で一人二つ以上の行事に参加する事』というものがある。大体の生徒は自分のクラスの主催する物と部活動で主催する物で事足りるのだが、何らかの形で部活の入り損ねた者や、面倒がつて帰宅部を自称する者などはどこかの部活の手伝いとして借り出される事となる。

ゆえは部活に入っていない。前者に入るため、つまり遅れて入学してきて入りそこねたので、柚の『うちの部、人数少ないから手伝って』という言葉で月ともども手伝いに借り出される事となった。

「すみません———」

『手芸部』と書かれた可愛らしい札の掛かる木扉をあやぶみなが

ら開ける。次にゆえが見たものは、緋色の生地で仕立てられた振袖を着た長い黒髪の少女。それと、演劇で使われるような山吹色のドレスを着た金髪の少女だった。

「あ、ゆえ。ごめんね、手伝わせて」

山吹色のドレスを両手で絡げながら袖が近づいてくる。

「・・・・・・手芸部の出し物って、なに、やるんだ・・・・・・？」

「見てわかんない？お化け屋敷よ」

わかる訳が無いだろう、とゆえは心の中だけで呟いた。

「・・・・・・この衣装は？」

「西洋人形と日本人形、だって」

流石に、と月も呆れを隠さず言った。

「私も初めて袖に『お化け屋敷やるの！』って言われた時は想像付かなかったけど。それでも驚いたわ」

「驚いたというより呆れている」

「なんか言った？」

「・・・・・・別に」

「じゃあ、部長に紹介するから」

さりげなく二人の会話を無視し袖は、恐ろしく早く正確な手つきでミシンをかけている三年生の前へとゆえを連れて行った。

「ゆえ。こちらが、我が手芸部の部長の霜割しもわれ睦先輩よ。むつで先輩こっちが助っ人の若狭ゆえです」

文芸部長はそこでやつと手を止め、視線を上へと上げた。作業のほうに夢中になりすぎたらしく、眼鏡の奥から見える目は焦点が合っていない。

「ああ、あなたが、若狭君ね。袖から聞いてます。これから数日間おもに雑用だろうけど、助っ人よろしくお願いします」

ぺこりと頭を下げると返答の暇さえ与えず作業に戻ってしまった。「何かね最近、かなり煮詰まってるらしいわ。私の紹介の時もこうだったわよ」

隣から月が小声で話し掛けてきた。

「柚の話では、普段は明るくて優しくてお喋りな人らしいけど」

「しょうがないわよ。うちの部活人数少ないんだもの」

自嘲ぎみに柚が笑う。

「部員獲得のためにも何とか上位に入らないといけないからがんばらないと。と、いうわけでゆえ早速だけどお仕事。場所取りの抽選の結果聞いてきてくれる？」

「え？あ、ああ、わかった。どこに行けばいいんだ？」

「職員室」

あっさりと言われた。

が、しかしここは旧校舎を利用して使っている部室棟の三階。職員室は新校舎の二階にあるのだ。しかもそれだけでもかなりの距離になるのに旧校舎と新校舎は、一度一階に行かないと互いに行き来できない作りになっている。

「がんばってー」

月の言葉を背に、またゆえは嫌々ながら走り出した。

「流石に………疲れた………」

誰に言うでもなく呟いた言葉とともに職員室を通り校長室に入る、手芸部の代表だと伝えたと

茶封筒をくれた。

「その中に入っているからね、判定基準と結果用紙。まあ、第一希望が通らなくても、良くあることだから」

少々引つかかる言葉を言い校長は笑った。この校長はあまり生徒の受けがよくない。はつきり言えば嫌われている傾向にある。理由は笑いが噓くさい、話がつまらない、存在感が薄い、出沒率が学校一低い、顔覚えていない、など多々あるのだが。反対に明るくさっぱりとした理事長先生は好かれているが、姉妹校の理事も勤めてい

るため、あまりこの学校にはいない。

「失礼しました」

いぶかしみながらも校長室を出た。目指すはまた、あの遠い遠い手芸部部室だ。

がらり、と音を響かせ扉を開ける。

「あ、足が重い……………」

「大丈夫？」

緋色の着物が目に入る。視線を上げれば薄墨色の瞳に行き当たった。

「まあ、なんとか」

しかし、たぶん明日は筋肉痛だろう。唯でさえ今日は体育の授業が長距離走だったのだから。

「これ、封筒の中に入ってるらしい」

「開けてないの？」

「ああ」

「開けちゃえば？折角あんたが取りに行っただから」

そう言うものか。と、ゆえは思いながら中の紙を取り出し、皆に聞こえるように声を張りあげた。

「手芸部指定場所は個人の部室と中庭の通路！」

部屋の中の全員の動きが一瞬、奇妙な形で止まった。

「え……………」

「問題は場所よね」

手芸部部長の霜割先輩は、眉と眉の間に皺を寄せながらさつきくらうっている。余談ながら後に月は、殺気立っていたと、表現し

ていた。

どうやらこの場所は手芸部の希望と激しく違っらしい。

「よりにもよってこんな場所になったんだろ……」

柚も同じようなしかめっ面でうなる。

「体育館横よりまだましじゃないんですか？あそこ寒いし、人も通らないし。此処なら人通りだけは抜群ですよ」

対照的に満更でも無さそうな月。

「だけど、こんな狭いところでできるのか？お化け屋敷」

一様意見を言った方が良さだろうと思いつたゆえの意見は、柚と先輩による。そんな事言ったつてしょうがないでしょ、という、元も子も無い言葉で切り捨てられた。

「本当は何処を希望していたんですか？」

「理科室」

霜割先輩は即答した。機嫌がかなり悪いようであたしげに続けてはき捨てる。

「しかも科学部に取られた。最近何かうちの部の邪魔してくるのよ、あそこの部」

「そんなに場所が問題なんですか？」

たかが学園祭なのに。場所ぐらいどおって事ないのではないかと、ゆえは思う。

「大ありよ。」

先輩は又もや即答した。

「折角の部費をかせぐチャンスなのよ！それに入賞が出来れば多くの新入部員も期待できるし」

「入賞ってなんですか？」

「え？」

柚は今、気が付いたように口を開く。

「ああ、そつか。月とゆえは知らないんだね。去年いなかったからあのね、この学校文化祭の事を体文祭って言うのは知ってるよね？それには、昔体育祭と文化祭を合同でやろう！って事にしなつて

から付いた名前らしいんだけど……今じゃ、ほとんど文化祭になってしまっているの。一部を除いては」

「一部？」

ゆえと月の声が重なる。

「そう、出し物が面白かったりした部に賞が贈られるの！文化祭が終った後で発表されるんだけどね」

「不思議とその上位に入った部は次の年にたくさん部員が入るの。まあ、他校生も見に来るんだから当然といえば当然だけど」

部長が後を引き継いだ。

「だから皆力が入っているのよ。……しかたない！この衣装無駄にしないような代案が考えるしかないわ」

嫌な沈黙が部屋の中に漂う。そんなに簡単には代案なんて考えつかない！、と文芸部十一人プラス助っ人一人が思っていた。

「あの」

しかし、沈黙に押されつつも月は小さく挙手をしていた

「『人間宝捜し』ってどうですか？そのままだと真似になっちゃいますけど」

「何それ、淡路さん」

教壇に立つ教師のように霜割先輩は訊く声にすらすらと月は告げた。

「何年か前にどこかの遊園地で開催したゲームです。確か遊園地内のどこかにいるコスプレした人を探すゲームだったと思うんですけど」

「それがどうしたの？」

「いや、それが応用できないかな、って思ったんです。みんなで衣装を着て校内を自由に歩き回って、この衣装を着た人、例えば着物を着た人に会えたら、十点と言う風に得点をつけて合計点数を競うゲームとか」

部員全員、なかなかの案だと思ったらしい。頷きあったり、小声で話したりしている。しかし最終決定を下すのは部長だ。誰もが心

配そつな不安そつな視線を部長の方に向けた。

数十秒間、思案し霜割は笑みを浮かべた。

「衣装も活かせるし、場所が中庭通路でもゲームの受付だけなら場所も取らない。これでいきましよう!!」

さつきまでの暗い雰囲気とは打って変わって明るい声が続くも上がった。

「時間が無いわ、お化け屋敷用に衣装全体が暗い感じにまとめてあるから、できるだけ明るい感じになるように取り替えれるところは交換して。しかもできるだけ早く!!やることはほかにたくさんあるよ!!」

活気が満ちた部室を見ながら部長が叫んだ。そしてくりと後ろ

月の方を向くと満面の笑みで言った

「代案をありがとう淡路さん!!」

そして、作業をするべくどこかに走っていった。

「よかったな」

ゆえが言った。実は一人だけの男子でやる事がなかったりする。

「うん、こんなに賛成してもらえと思わなかった。適当に言った事だし」

目が点になった。

「テキトウ・・・・・・?」

「遊園地の出し物の事も本当だけど。本当は、漫画の文化祭から思い付いたの」

「マンガ・・・・・・?」

「うん」

自信を持って頷かれた。ゆえが何とも表現し難いような表情に気付かず、柚が勢い良く月の首に抱きついた。

「月、本当に良かった、ありがとう!!」

喋っている三人に部長の、手を動かさない!手をっ!!、というお叱りの言葉が飛んだ。

第三章 祭 一（後書き）

最初は外伝のつもりで書いていたのにあまりにも長くなったため、めでたく章へと繰り上げになった『祭』。学園祭のドタバタ劇をお楽しみください。

当時「現実もこんな学園祭だったら楽しいのに！」という思いを詰め込んだ話となっています。

やたらとキャラの衣装が変わるのは作者の趣味です。

何度衣装変えるか数えてみても面白いかもしれません！（やけ）

長いので、少しずつ更新していきます。

第三章 祭 二

二

私立遠江ととお付属つづみ中学校は丘の上にあり、眼下には暁町あかつきが広がっている。

本州の真ん中より少しだけ北よりに位置するこの地域は、江戸時代は脇街道の支道が通る旅籠町として栄えていた。だが明治になり、新道開通により街道そのものの様子が減ると、それに伴いその賑わいはじわじわと減っていくことになる。

そうやって潰れていった旅籠町など五萬とある。そう危機感を強めた当時の住人が一計を案じて試みたのは『異人向けの避暑地』を作るという事だった。

冷涼な気候だけでなく地理的にも港へと続く川がある事も、成功の一端だったのだろう。

異国の客人達が別荘を次々と建てる町として暁は賑わっていき、戦前には居住者すらいたと伝えられている。

夏季と冬季では人口が激しく変わり、現在でも永住者のほとんどが観光関係の仕事をしているこの町では街の雰囲気も何処と無く不思議な感じが漂っている。

セピア色に時が止まったような古びた空気。

江戸に敷かれた石畳と、明治に敷かれた煉瓦畳が、無秩序に混在するのに調和が取れている不思議さ。

今も明治の名残を感じさせる建物が残り、時期はずれには閑散とした別荘地街。

西洋と東洋が調和しあい、どこか異国を想わせる懐古の趣を残す町——それが暁という町だった。

そんな観光を主とする町だけあつて通りにも一風変わった名がつけられている。

ブロンズの像と共に通りの入り口に並んでいるのは『女王の道』^{クイーン}
『小人の道』^{ドワーフ} 『一角獣の道』^{ユニコーン} といった妙に童話めいた名前達だ。

観光に力を注ぐ町としては賞賛されるべきかも知れないが、通りによつて売っている物まで違つ——女王は高級ブティック街、小人は宝石専門街など——となると、徹底ぶりに呆れれば良いのか、感心すれば良いのか反応に迷惑うだろう。

その冗談のような名前をした通りの一つ『妖精の道』^{フェアリー}で、ゆえは顔に何とも表現しにくい面持ちを浮かべ『ハベトロット・服の事なら何でもお尋ねください』と描かれた看板の掛かった店にいる。

「どうしたの、ゆえ？」

「いや、此処つて……」

「柚の家よ。前に話さなかつたつけ？最近決まつた私のバイト先でもある、服屋さん」

「いや、それは聞いたけど」

何とも言いにくそうに、妙な声になった。

「何ていうか……此処つて本当に普通の服の店か？」

自分の面錯覚でなければ、目の前にはウエディング・ドレスがある。それだけならまだ良い。その奥に、何だかわからない着ぐるみが置いてあり、さらに奥には制服が明治風の礼服と共に整然と掛けられている。

「誰が普通の服の店つて言った？」

につこり笑われたが、どこか凄みのある微笑みに見えるのは気のせいではあるまい。

「それはさすがにひどいんじゃない？」

苦笑する柚に、月は肩をすくめて見せただけだった。

「じゃあ、他に何て言うのよ。コスプレ作り専門店？貸衣装店？映画衣装店？オーダーメイド服の店？ブライダル店？特殊美容室？」

わざわざ御丁寧^{ごていねい}に指を折りながらスラスラと答えていく。

「まあ、要するに服の万屋^{まんや}ってことよ」

要するになってない、ゆえは思ったが口には出さなかった。言ってもしょうがないような気がしたからだ。困惑しているゆえの心情を悟って、助け舟代わりに月が言った。

「そんなことより、柚。さつさと決めようよ、ゆえの衣装」

「そうね、それが目的でゆえにもわざわざ来てもらったんだし。しかし出し物の趣旨が変わったからと言って、ゆえまで仮装するとは思はなかったわね」

口では意外そんなことを言っているが、実はゆえを仮装させる事は柚としては本当はやりたくてたまらなかった事なのだ。美少年とまでは行かないとしても、容姿がそれなりに整っている者を着飾らせるのは楽しい、と柚は思う。

けれど、多分そんなことを言えば月もゆえも嫌がるだろうし、もしかしたら逃げてしまいかもしれない。だから、努めてはしゃぎ過ぎないように言う。

「武士とか、きぐるみとかあるけど・・・何がいいかしら？」

「いつそインパクト狙うなら、女装何かの方がいいんじゃない？」

「ちよつと、それは・・・」

すっかり蚊帳の外に置かれたゆえもそれはいくらなんでも嫌だと声を上げる

「大丈夫よ。ゆえ、演劇部なんて男女逆転劇やるんだから」

「は？」

「だからあんたが思ってるほど目立ちはしないって」

大丈夫じゃない上に論点がずれている。この暴走は止められないと思いながらも、心底そう言う問題ではないと思うゆえだった。

「女装でも良かったのに」

歩きながら月が言った。

「絶対、着ない」

流石に、恥ずかしすぎる、と言うゆえの必死の抵抗でなんとか『女装』の案は消え、変わりに羽織袴の着物に決定した。柚が言うには新撰組の衣装だそうだ。

「それにしても“秋の日は釣瓶落とし”とはよく言ったものだわ、本当にすぐに日が暮れる」

午後六時を指す時計の針を軽く睨むように月は見る。

柚の家と丘陵荘は位置的にはわりと近くに建っている。しかし通りが違い結果として距離があるため、辺りはほとんど真っ暗になってしまい、規則的に一定間隔で立っている古風な街路灯の灯だけがぼんやりと道を照らしていた。

そしてどこか古風な雰囲気を持つこの町は、夕闇時更に神秘的に映る。

もし目の前を妖精がふわふわと飛んでいても気付かないのでは、などという世迷言まで頭に浮かぶ。

そんな道を月とゆえは時折思い出したように会話しながら黙々と歩いて行く。ゴミバケツのある角を曲がると、少し先に曲がり角が見える、此処からなら二人の住む丘陵荘^{きやうりやう}まで五十メートルも無い。

だが――

「このまま進んで」

突然、緊張した月の小さな声が耳に届いた。

「は？」

「いいから」

行き成りそんなことを言われても……などゆえが考えていると、なおも目で進むよう合図してくる。そして、自分は家と家の僅かな隙間の部分に身を隠す。

訳のわからなかったゆえも、ここでやっと理解した。

月は感じたのだ、気配を。

こういつ時の月の行動には必ず何か意味があるのだ。少しとはいえ夢想界ですごした経験上、何回かこういう事があった。とりあえず、できるだけ普通に先に進み、もう一つの角をゆっくり曲がる。

『誰かに尾行されている時には、絶対に走ってはいけないの。バシたとわかって攻撃してくる場合もあるし、逃げられる可能性もあるからね』

以前、月が冗談交じりに言った言葉が耳元にこだまする。

『もし捕まえたいのなら—— magari 角まで待つ。そして

反撃』

予想は当たった。何かをぶちまげたような音と、鈍い、重い打撃音。

はじかれたように、振り返り、走り出した。今、曲がった角の壁に張り付き、月の方を伺う。そこで見たのは——

「もう出て来て大丈夫だよ、ゆえ」

普段は長い三つ編みにしている黒髪を、少しだけ乱した月だった。

「何だったんだ、いったい……」

「さあ良くわからない、最初は傀儡かと思ったけれど、叫び声出したから違うと思うし」

「叫び声って……何やったんだ？」

「しょうがないじゃない、正当防衛よ。行き成り鉢突き出して人の髪切る、妖しげな黒い布かぶった奴がいたら、私じゃなくても攻撃

するわよ」

「……………普通は叫ぶとか逃げるとかすると思う」「まあ、良いじゃないいたした怪我も無かったんだから。」

本当に、怪我一つしていない。おそらく、反撃するときに使ったと見える鞆と傘を持ち上げ、周りをうかがっている。ここまで、無傷だとかえって攻撃した方が可哀想に思えてくるのはなぜだろう。「ねえ、ゆえ、ちょっと見て！」

考えに夢中になっていたゆえは月の大声によって呼び戻された。珍しく慌てたように上ずっている声を不思議に感じながら振り返る。「何だよ？」

「良いから、ちょっとこれ見てよ」

目の前に色々な切り抜きが貼ってある紙が突きつけられた。

体文 祭ノ出し物ヲ中シセよ、お前達の部は必ず失敗スル

「……………なんだよ、これ」

「さっきの奴が落としていったみたい。まあ、一つだけ言えるのは今回の事は、完全に夢想界は関係無いってことね」

第三章 祭 二（後書き）

月は傘の買い換えSpanが短そうだな、と思います。武器利用するから。

第三章 祭 三

三

翌日。

ゆえは手芸部の助っ人唯一人の男子として依頼された手芸部宣伝用の看板を作っていた。

「じゃあ何、霜割先輩も襲われたの？」

背後から月が柚に訊いているらしい声が届く。しかし声を落としているためか、雑音に混じって聞き取りにくい。知らず知らずのうちに、ゆえは聞き耳を立てるように少女達の話し声に耳を傾けていた。

「うん、他の部にも襲われた人がいたみたい」

カタカタというミシンの音に混じって柚の声も響いてくる。

「怪我は？先輩、大丈夫だったの」

「掠り傷ぐらいだって。転ばされて腹がったから、鞆投げつけてやっただけ言うくらいだから大丈夫でしょ」

「何て言った？今」

「デザイン描いたファイルと辞書とか数冊入ってたらしいし」

数秒の沈黙の後、月がボソツと言った。

「何か………すごい人ね、霜割先輩」

すごいどころの騒ぎじゃない気がする、耳をすませながらゆえは思う。

「でも、もし私と先輩の攻撃受けたのなら、いつそ襲撃者のほうが哀れな気もするわ」

「本当に馬鹿な襲撃者よねいくら夕方外出している部員が少ないからって月と先輩を襲うんだから」

「ねえ、柚。他の部も狙われたって言ったわよね」

月が確認するように訊く。

「ええ、そうよ。文科系の部活ばかり。詳しい事は今、部長会が開かれてるから先輩に聞けばわかるだろうけどまだ帰って来てな・・・」

「変なところで止めないでよ。『な』の続きは？」

「『い』よ。別にそんな細かいところは気にしなくてもいいじゃない！だけど丁度いいタイミングに。ほら」

ゆえは首だけで振り返って袖の指の指す方向を見た。

「ごめん、みんな。少し作業中断して集まってくれる？」

そこには昨日よりさらに眉間の皺が増えた霜割先輩がいた。しかもっ面のまま先輩が口を開く。

「昨日の襲撃事件は皆知っているわよね？」

疑問と言うより確認の言葉だったらしい。部長会の資料と思しき学校印刷の朱印の入った印刷物を見ながら、そのまま続けて言った。「今、部活会で発表されたんだけど、被害者は全部で十八人。演劇部、文芸部、科学部、占い同好会、手芸部、書道部、美術部、合唱部からそれぞれ二人から四人ずつ被害者が出ているわ。まあ、被害って言うっても軽い怪我程度だけど」

ため息とともに吐き出すように言った。

「一番軽いのが擦り傷。一番重いのが足首の捻挫と眼鏡の破損。こんなので襲撃って呼べるのかわからないけどね」

「じゃあ、襲撃事件って名前をつけたの誰なんですか？」

「遊衣。文芸部部长の海山遊衣よ。」

思い当たる節があったのか、下級生の誰かの声があがる。

「推理小説好きで有名な海山先輩ですか？」

「そうだけど。でも、好きなんてもんじゃないわ。あれは唯のオタクよ。とりあえず、夜遅くの外出は控えるようにって通達が着てるのだけ伝えておくわね。ところで話は変わるけど作業ちゃんと出来てる？まず、一年生から」

「はい、一般公開用のコサージュやサッシュなどの小物は殆ど出来ています。後は包装するだけでOKです」

髪を耳の上辺りで縛った下級生らしい少女がはきはきと答える。

「二年もほとんど終わっています。占い同好会の依頼と演劇部の依頼の衣装は完成しました。あ、でも演劇の一般公開の衣装はまだです」
柚がレポート用紙に書いた計画表を見ながら言う。

「柚、劇部一般の衣装って手芸部（うちの部）の自由に使うやつ？」
「はい、そうです」

「そうか。若狭くん、頼んでおいた看板どのくらい出来た？」

「……形になっているのは、言われた分全部の五個です。
三個はやすりも終わりました」

「そう、じゃあ一年生手が空いた人から看板のツールペイントやって、二年生も短い時間で大変だけどがんばって仕上げてね。じゃあ、作業開始——」

「はい——」

鶴の一声状態で皆作業に入った。

「そういえば、さっき先輩の言ってた一般公開って何の事だ？」
柚はああ、そういえばそれも知らないんだっけ、と言いながらゆえと月に向かって言った。

「日曜日の開催日の事よ。ほとんどの保護者の人がその日に見に来るから、その日は大体何処の部活も真面目な出し物に切り替えるの。自由日と違う物にね。反対に自由日は平日の公開日と非公開の最終日の事よ」

「じゃあ、演劇部の依頼って言うのは？」

「うちの部活に衣装作って欲しいって言う依頼よ。外部より安価の超格安で受けるから結構人気よ？」

「商売までやってるの？」

「だってこの学校、部活数多いでしょう？四月に部費は支給されるけどそれじゃたりなくて。だからうちは、依頼を貰って部費を稼ぐの。材料費は出してもらって衣装を作って、こっちの展示会やコンクール時には返して貰ったりしてね。一挙量得よ！」

柚が力を込めて断言すると同時に遠くから声がかかった。

「あー、ごめん。淡路さんと若狭君どちらかちよつと手空いてる？」
霜割先輩だった。大きなダンボール箱を指差す。

「依頼品の占い同好会と演劇部の衣装届けて欲しいんだけど。頼めないかな？」

「じゃあ、私演劇部の方行きます。ゆえ、占い同好会の方行ってくれる？」

「ああ」

「じゃあ、お願いね。代金の方は全額先払いだから置いてくるだけで良いから！」

そこまで言っていると、また他の生徒に指示を出しに行った。

「何と言うか、パワフルな人ね。ここ二、三日ろくに寝てないらしいのに。あ、占い同好会はこの右隣だから」

「わかった」

そう言つと、月もあつという間に衣装の入った複数のダンボールを持って行った。

（自分もパワフルなの、わかってるのか・・・？）

たぶん、わかっていなさそうに思える。自分も衣装入りのダンボールを抱えながら、考えた。

（演劇部なら校舎外の体育館まで届けないといけないのに・・・）

その時、急にある事を思いついた。

（もしかすると、わかっていて引き受けた・・・？）

ゆえが昨日疲れていると言っていたから、わざと遠いほうを自分が引き受けて・・・？そんな事を考えていたら占い同好会と書かれた看板に激突しそうになった。気を取り直し、木戸を開ける。
「すみません、手芸部ですが・・・」

思わずそこで絶句した。

「おー、ゆえ。手伝いか？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・翔」

やっとの事で出した声は、ひどく疑わしそうに出てしまったが眼

の前の少年、武蔵翔は気にする様子もない。

「……………おまえ、野球部に入ってなかったか？」

ダンボールを手渡しながらゆえが呟く。

「夏の大会に出たのは唯の数合わせ。本当に入ってるのはこっちだぞ？」

「数合わせが満塁ホームラン打つなよ」

「打たないより、打ったほうが良いだろうが。それよりお前なんで手芸部の手伝いしてるんだ？」

「……………成り行き、か。そういえば占い同好会って何の出し物するんだ？」

「占いに決まってるんだろ。この衣装着て」

ダンボール箱から出した物は唯の黒い布に見えた。しかし良く見る所々に金系銀系で刺繍がしてあり、硝子玉が縫いこんである。

「……………占いなんて出来たのか」

「俺のじいさん本職の占い師だったって、前に話しただろ？」

そう言えば聞いた気がする、などとぼんやり考えていると友人は口の端を引き上げ、自慢げに笑った。

「そのじいさんの直伝で、結構当たるんだぞ。何なら占ってやろうか」

「あれ、ゆえまだいたの？」

カラカラと軽い音をたてて扉が開く。音につられてそちらを見れば先ほど分かれた少女の姿があった。

「なんか早くないか、あんた」

「途中で演劇部の人にあってね。渡してきた。それより占いしてるの？」

「いや、ゆえが俺の占い見た事が無いって言うから。やろうかと思ってた所」

「へえ、何占うの？」

「今、決めてた所。ゆえなににする？」

「別に……………何でも良いんだけど……………」

そもそも、占い何ていう物に興味を抱いた事さえなかった

「じゃあ試しに、この体文祭が上手くいくかどうか占ってみたらどう？ゆえ」

良いとも悪いとも考えないうちに、反射的に頷く。それを見て、翔が話し始めた。

「じゃあ、まず最初に断つとくと、俺の占いは決定的なことなんて言い当てられない。例えば、次のテストでどこが出る？何て聞かれても答えられない。俺のほうを知りたいよ」

そう言いながら、どこからか大きめの財布ぐらいの包みを出してきた。その和柄の古びた布包みから出したのは、何枚もの紙の束。

「ただ、大きな流れとか、これから近々起こりそうなことならわかる。抽象的だけだな。おみくじみたいな物だと思った方がいい。出た札を見てイメージするんだ、札からのメッセージを読み取るって言った方が良いかな。要するに勘みたいなものだよ、そのへんは了解してくれ・・・それから、この札で占う」

紙の束を束ねていた紐を解きつつそういった。少年の手のひらにある札は包まれていた布地に負けぬぐらい古びており、独特の風格さえ感じさせる。

「やり方は色々あるけど。まあ、一番簡単なやつで良いよな」

そう言いつつすと手を動かし始める。カードゲームのたぐいをきるのに似ているが、もつと形式のある動き。タロットカードのシヤッフルに近いかもしれない。

「そんな謙遜を良いながら本当に当たるのよ、翔の占い。あんたと再会した場所に行ったのもこれのおかげだし」

そういいながら月は差し出された札の山の中から、一枚の札を引いた。そのまま自分で見ずに翔に渡す。

「・・・ちよつと、嫌な奴が出た」

翔の見せた札には唐草模様のような柄の中に『災』の文字が一つ。『タロットで言うなら』The Tower『みたいな奴だな』

The Tower ———— それは危険、災い、試練を表

すカード。

「こんなのが出るなら原因探つといた方が良いな。ちょっと詳しくやるぞ」

そして、また器用に札をきり今度は何枚かの札を下向きにして置く。

「月、お前の方がこういう時の勘がいい。この中からが気になるの三枚選んでくれ」

「ん、わかった」

そう言つて月が真剣に数十枚の札から選び出す。それも自分では見ずに翔に渡した。表を返し現れたのは『妬』『憧』『嫉』の三つ。
「たぶん、誰かがこの部活を妬んで妨害しようとしてる」

顔をしかめ、翔が舌打ちをもらす。

「今回は、別にどの部活つて限定してやった訳では無いから、何とも言えないが……俺達が関係している部つて言つたらここ（占い部）か手芸部だろうな。『嫉』^{そねみ}『妬』^{ねたみ}はそのままの意味でもわかるとおり、“嫉妬”って意味だろう。『憧』^{あこがれ}はこの中で一番良い感じの札だけど……この二つと一緒に出るとなると、憧れから転じて嫉妬に変わったつて見るべきだろうな」

「もしかしくなくても、あの襲撃事件の事も関係している？」

「今の段階では何とも言えないけれど、可能性はあるかも。占いの内容が気に入らない、つて言う奴なら手芸部関係のお前達まで被害が行くことは無いだろし」

「……そんな事言ってくる奴もいるのか？」

「居るんだよ、たまに。こっちの言う事を自分の良いように解釈して行動したくせに、失敗すると恨んでくる奴が。最初に断つとくにな『どう行動するのかはあなたしだいだ』つて」

「予防とかしてないの？占いの内容が、個人のプライバシーに関わる事だつたら苦情も増すんじゃない？」

そこまで個人的な事を占いに頼つて解決するような奴はいないだろうとゆえは思うが、何と無く、翔が真剣になつていているものを貶す

ような言葉の気がして、口には出さなかった。

「んー、一応だな。こっち（占い師）はさっき届いた衣装着て顔隠して声になるべく変えるようにしてるし、客にはコレ被ってもらって、コレで声変えてもらうけど」

翔の言うコレは、良くテレビ番組に出てくるような、ゴム製の頭から被る仮面――馬顔とかスクリームの死神などの――

とパーティー用品売り場に必ずあるスプレイ式のヘリウムガスだった。

「この二つさえあればかなり誰かはわかり難くなる。まあ、希望者だけだけだな」

「・・・・・・」

ゆえは真剣に、そこまでやるか普通？ 体文祭当日、この部屋は妙な奴だらけになるのかと思ひ。月は確実に誰かの趣味が反映されているんだろ、と思つたが、口に出さずに沈黙に止めた。

「それより、さっさと占いの続き、やるぞ」

「・・・・・・そうよね、何の為に来たか忘れるとこだったわ」

「初めは、衣装届に來ただけだったんだがな」

「中途半端に『原因』と『予想』だけで辞めても気分悪いだろーが。じゃあ今度は『救い』と見てみるか」

そう言つて又札を、きつた。

「今度は、ゆえが引いてみてくれ」

「俺が？・・・・・・悪いけど、あんまりこーいうの信じてないんだ」

信じてない奴が占いにかかわつたら、結果が悪くなるんじゃないだろうかとゆえは思ひそう言つたが、翔は首を振つて否定した。

「別に良いぞ。ただ単に、関係している奴が出来るだけ関つたほうが情報が増えるっただけだし。信じてようが、逆だろーが結果が変わるわけじゃないしな。むしろ頭から信じられたほうが困る」

「私だつて初めから信用してた訳じゃないよ。何度もこの占いに助けられてやつと信じたんだし。いまだに、翔の以外は信じてないし

ね」

「……わかった。どうすれば良い」

「この中から好きなだけ札を選んで見せてくれ。別に札の数で希望の大きさが決まる訳じゃないから、数はお前が決めてくれ」

そう言われても、何をどうすれば良いのか良くわからない。仕方なしに、札をざっと見つめてみる。どこれもまったく同じような柄だ、当たり前だが。

(色が……?)

よくよく見てみると微妙に色が異なるようだ。年月の所為か全体的には孔雀緑だが、青みが強い物がいくつかある。特に青みが強そうなのが四枚。すべて選んで、翔に渡した。

「『探^{たぐ}」

『集^{あつまり}』『偵^{うかがう}』『助^{たすけ}』か」

出た札を睨めながら言う。何のことだかさっぱりわからない、と言った顔で。

「探ると偵うは同じような意味だな。集まりは、集団の事か。つまり集団が助けるって事か? いや、違つか。それより集団を助けると自分にも幸福が舞い込むのか……二人ともなんか心当たりないか」

「そんな事言われても……部活なんて今まで興味無かったしな」

「私も。あ、ちょっと待って。ねえ、札をこうやって並べると何て言う言葉になる?」

『探^{たぐ}』ると『偵^{うかがう}』をの二つの札と隣に並べた。

「あ、“探偵”か?」

「そう、それが関係してるんじゃない? 例えば、探偵ファンの――

――
月がそこまで言った時、突然戸がスパーンツ、と凄まじい迫力を有した扉の開閉音を鳴り響かせながら開けられた。

「失礼します!! 探偵団の者ですが、今回被害にあった、淡路月さ

んと若狭月君がここに居ると聞いたのですが!!」

扉の音に似つかわしいやけに元気のいい、上級生がズカズカと入ってる。

「はい？」

「知らないのなら良いですけど！自分で探しますからっ」

「あの、淡路月は私の事ですが」

行き成り入ってきた謎の上級生に月がおずおずと言う。翔とゆえは雰囲気には圧倒されて何も言えない。

「そう！そうなの？！あなたが黒服の怪人を倒したって言う淡路月さん！！もつと大柄で、いかにも強そうって感じの子かと思ったけど、あなた、華奢だし、美人ねー、髪長いし」

機関銃のような言葉の発し方とはこういう事なのか？とゆえは頭の端で思う。しかもまだ止まらない。

「剣道出来るって本当！？それで相手を応戦したって聞いたけど。

すごいわあ、私なんて運動音痴だから、尊敬しちゃう。で、その時髪斬られちゃたんだって？可哀想………凄く綺麗な髪なのに、絶対許せないわね、その犯人！！」

「ちよつと、まつ………」

「その犯人なんだけど、睦にも攻撃して来たんですってね！睦って今は辞めたけど空手やってって、地区大会なんかで優勝もしてるのに。調べ甘いと言うか、なんというか………」

「ちよつと待つてください！！」

月の一括。そのかなり真剣な大声で、マシンガン機関銃の（・）トーク声はやつと止まった。

「ゆっくり、一つ一つ、順を追って、話してください。お願いですから。それと、まず私にも質問させてください」

大きなため息とも、一呼吸ともいい難い間をおき、月はゆっくりかみ締めるように問う

「あなた、誰ですか？」

「ごめんね。興奮しちゃって。ついつい、私がこんなミステリーみたいな怪事件に出くわしたかと思うと、興奮しちゃって……」

「海山遊衣と名乗ったその三年生はその後興奮したことを詫びながらそう言った。」

「私こういう者です。」

「いくらか、ふざけたように差し出した名刺——ゲームセンターか、パソコンで作ったかと思われるような物——には『遠江中学校襲撃事件私立探偵部長』の文字が躍る。」

「探偵部長として、二人には事情を覗きたいの、良いかしら？」

「良いかしらと言われても……あからさまに妖しい団体名を出されて、固まっているゆえをよそに、月が口を開く。」

「少し、相談させて貰っても良いですか？」

「どうぞ、どうぞ」

「気軽に答えた先輩に背を向ける形に姿勢をとり、月が小声で言いだした。」

「ねえ、翔どう思う？」

「どう思う……ってもなあ。占い師として言うのなら、その人が希望の存在の可能性が高い事になるから、話ぐらいしても良いんじゃないかって気はするけどな。ゆえはどう思う？」

「別に……どっちでも良いと思うぐらいけど……」

「

「少しぐらいなら、協力してみる？」

「ああ」

「じゃあ、私、先輩にそう言ってくるから」

「席を立ち、返事を伝えに行く月を見ながら、ゆえはかなり真剣に厄介ごとに足をつっ込んでいる予感がした。」

「（流されているんだろうか、周りに……）」

「今回狙われたのが、三十ある部活の内の七つの部。

犯人は、共通する点としては、黒いマント状の布をかぶり、鍔か長い棒のような物を持って犯行に及んだ様子、そして犯行現場には共通してこの紙が残されていました。」

この紙、事あの新聞紙を張り集めた古典的な脅迫文を片手に力説している、海山先輩。

「被害状況は、科学部四名、眼鏡破損と打撲、捻挫。演劇部二名、擦り傷。文芸部二名、無傷と軽い捻挫。占い同好会二名、二人とも無傷。手芸部二名、ほぼ無傷。美術部二名、髪を少々切られる。書道部二名、無傷と右手にあざが出来た程度。そんなかんじね！」

二階の一番角、角部屋の文芸部部室である。海山先輩は実のこの部長だったのだ。

「この紙は、新聞を集めて張ったものを、さらにA四サイズにコピーし、四つに切ったらしいわ、それにしては、少々縦の長さが足りないけど……原因は不明。こんなところかしらね。何か意見は？」

『遠江中等部襲撃事件捜査本部』と銘打たれた、大弾幕のような紙を背にしていた海山先輩は話し終えた。因みに、その紙は書道部にわざわざ依頼して作ったらしい。

この部屋には現在、事情徴収——使い方はあっているのか間違っているのかは不明——と称して連れて来られた生徒が数名いる。真剣に聞いている者、無関心を隠そうともしない者、隠している者。

隠している者——事、ゆえは別に意見も何もなかったが、目が合ってしまった、仕方なく口を開く。

「縦の長さが足りないのって何でわかったんですか？」
良くぞ聞いてくれたといわんばかりの顔で答える先輩。

「この紙、一枚一枚をジグソーパズルみたいに集めてね！四枚ずつの組にしていくと、丁度三センチぐらい長さが足りないの。良かったらみて見る？」

そう言いながら指紋が着かないようにという配慮からかビニールをかけられた紙を渡された。四つに切り離されたのを、切り口と切り口を合わせて集めてある。なるほど根気のいる作業だ。礼を言つて返そうとした時だった。

「あ………？」

「どうしたの？」

人も雰囲気を読むのに敏い月が、隣からのぞきこんできた。

「いや、この紙の上になんか赤いものがついてるんだけど」

縁の部分にすつと細い朱が滲んでいる。

「指でも切ったのか………？」

「違ふと思うわ。血だったら一日経つたらもつと黒ずんでいるはずだし、それにしては———これは色が鮮やかすぎるわね」

妙に生々しい事を言う月の言葉に顔をしかめるゆえ。紙を縦にして上から見ると、朱色が濃くなった。

「どうやらこれ、紙を縦にして着けたみたいだな」

「どうしたの？月さん」

「別に、どうって事ないんですが、紙に赤い線が入っているのをゆえが見つけて」

「線？」

「はい、そうです。紙を縦にしてつけたみたいな、って。ねえ？そういうえば、こんな紙よく見かけたことなかったっけ………どこかで」

記憶を探り出すように月が呟いくのを横目で見、ゆえはぽつりと返した。

「紙なんてどこにでもあるだろ、学校なら」

「それだわ！！そうよ、そうよ何で気づかなかったんだろう！！これで容疑者が大分絞れるはずだわ！！」

海山先輩が再び突然叫びだした。

「はい？」

「学校関係者だって事は判明した。それなら、印刷リストを何とかして手に入れば……！！！」

大きな独り言を呟きながら、今度は皆に聞こえるような大声で言った。

「ごめんなさい、みなさん。急用を思い立ったので！各自解散してくださいっ！！」

そう叫ぶと、部室を飛び出していく。残された月とゆえを含む生徒たちは呆気にとられた様子にもまったくかまわずけたたましい足音が徐々に小さくなっていく。

「なん、だったんだ？」

「さあ、何て言ってたっけ、学校関係者だとかどうとか――

――あ！そうか！だから下の部分が切ってあったのも説明できるし」

「何が？」

「あの紙よ。下の部分が切り取ってあって、上に朱色がついてたでしょ？」

「そうだけど……それが？」

「その朱色が、朱肉の色だとしたら？」

「あ？……ああ、そうか」

納得した二人は深く頷きあった。

「そう。この学校の生徒が使えるコピー紙って使いすぎ防止と学校行事以外に使うのを止めさせる為に、朱肉で学校の印鑑が押してあるじゃない。紙を束ねた上の縁にあたる部分と、下の所には一枚一枚。たぶん、襲撃者は身元がばれないように、目立つ下の部分は切り取ったものの上は切り取り忘れたようね。だから、コピー機の仕様名簿を見れば一目瞭然、すぐに容疑者が絞れるってわけ」

「……でもそんな事に使ったのなら、名簿に名前を書かない場合だってあるんじゃないか？」

「でも、あそこには入るのには専用の鍵がある。だから、何か適当

な理由をでっち上げたとしても記録は残っているわ」

「そうか、これで犯人見つかるといいけど」

「ええ、それに当たったわね、翔の占い」

それにはゆえも素直に同意した。

第三章 祭 三（後書き）

花火先輩登場の回。やたらテンション高い人です。登場すると主人公どころか月のキャラまで食ってしまう。

あと翔の意外な趣味発覚。占いは和製タロットのイメージです。

第三章 祭 四

四

「もう、八時か」

学校から短縮授業の代償かのように出された大量の課題を片っ端からかたづけ、やっと八割方終らせた時。ゆえは初めて長針が、記憶にあるより二周以上も進んでいることに気がついた。

その途端に思い出したように沸いてきたのは、空腹感。

今にも音に出して空腹を訴えそうな腹に苦笑しながら机の上を片付け、1Kの狭い台所にむかう。背丈の半分ほどしかない冷蔵庫の前にかがみ込み、二十秒ほど中を眺め、扉を閉めてさらに十秒ほど考えた後、メニューをミートソーススパゲッティに決定する。

（明日、買い物行かなきゃ飢え死にするかな・・・）
するわけが無い。

しかし、ゆえの心情的にはそんな気がしてしまうのだ。

朝食はいつも食べないし、平日の昼食はほとんど学校の食堂でとる為、必然的に家では夕食しかとらなくなってしまった。そのためか、冷蔵庫の生身がやたら乏しくなる。しかもその事に気づくのが夜の場合が多いのだ。

尚悪いことに、この近所は今時珍しいぐらいにコンビニ戦争に無縁で、深夜まで営業する店が皆無なのである。その結果いつも、若狭宅の冷蔵庫はやたら涼しいのだった。

持っている鍋の中で一番大きな鍋の中を湯で満たし、火にかける。それから上にある戸棚から、大量に買いだめしてあるスパゲッティソース缶詰を取り出した。

缶切りってどこに置いたっけ？と考えた時、突然携帯電話の着信音が鳴り響く。

どうせ悪戯電話だろうと思い、放って置いたが鳴り止む気配がな

い。しぶしぶ部屋に戻り、充電器から携帯を取り上げる。ちらりと見た液晶画面に映ったのは見慣れぬ携帯の番号。

無言電話だったら嫌だなと、思いながら決定を押す。

「もしも……」

『夜遅くにごめん！私、月だけど。今空いてる？時間ある？できたら、時間無くても出て来て欲しいんだけど』

「はあ？」

『あーごめん。主語話してないね私。ええっと、実は私も良くわかってないんだけど。さつき柚と翔に電話もらってね『出来るだけ人数集めて学校に来て』って言われて。どうやら、又学校でトラブルがあったみたいなの。もし、暇ならゆえも出てきてくれないかな？』

「別に、用って程の事は何も無いけど……」

『出て来れそう？』

「まあ、少しぐらいなら。あんたはどこにいるんだ？」

『悪いね。私は今妖精フェアリーの通りの交差点で信号待ちよ、もう少しで学校が見えてくると思う』

「わかった。十分ぐらいしたら追いつく」

言いながら片手で鍋の火を消しガスの元栓も締める。携帯の通話を切ると、薄手の上着と自転車と家の鍵を掴み、慌しく玄関を閉め階段を駆け下り、自転車に乗った。

（やっぱり乗せられやすいんだろうか……）

そんな疑問が頭をよぎったのは、言うまでも無い。

「ゆえ、こっちこっち！」

月に追いついたのは、学校が目前に迫った曲がり角だった。

「流石。十分ぴったりね。やっぱりあんた、A型？」

「ABだ」

「あ、それっぽいかも」

「どういう意味だよ。それより、あんた徒歩なのか？」

すらりとしたジーンズと臍脂色のＴシャツ姿で息を整えている月を見ながらそう訊く。

「急いでたからね。焦っちゃって、バスもあるかどうかわからなかったし、待ち時間が勿体無い気がしたから。まあ自転車は持ってないしさ」

「え？」

「前の家から移すのが面倒だったから人にあげたの。学校だってそんなに遠くないから早めに家を出れば十分だと思ってただけど……」

「そもそも、何でこんな事になったんだ？……しかも、そういうえば、何であんたが俺の携帯の番号知っているんだ？」

担任や、ごく一部の友人——具体的に言えば翔一人——

にしか教えてないのだ。

「翔に聞いた。緊急事態だから教えてもらったの。前の質問は私で無く翔達に聞いて、私もわからないから。ただ電話だと、部活荒らしが入ってとか、また黒い変人が出たとか言っていたけど。興奮すると早口になるから聞き取りづらいのよね」

「また、あの妙な奴が出たのか」

「そうみたいよ。よほど暇人なのか、よっぽど部活自体に恨みがあるのか。それとも全く別の目的があるのか。どれかしら？」

「さあな、どこに行けばいいんだ？」

「わかるような所にいるって、行けばわかるって言ってたけど」

軽く薄墨色の瞳を細め、闇を見透かすように目を凝らしながら、独り言のように呟く。次に月が口を開いたのは校門をくぐった時だった。

「いた。部活棟の前。霜割先輩と、あとたぶん海山先輩もいるよ」
「……………あんたの眼は猫の目か？」

そこいらにいる猫よりも色素の薄い、薄墨の瞳をおもしろそうに

丸めながら、月は振り向いた。

「私はただ夜目が利く体質なだけよ」

「ただの体質だけで、暗闇で二百メートル以上離れたところまで見えるか？」

「さあね、見えるものは見えるんだから良いじゃない。眼の色素が薄いのも関係あるのかもしれないけれど」

「特技、か？」

「んー、そう言いきるのは難しいわね。極端に光に弱いから眩しいと大変でさ。それより、早く行こう。先輩達もこっちに気づいたみたいだし」

そう言い終えると、チカチカと光るペンライトに向けて走る、ゆえも慌てて自転車を押していく。

集まっていたのは、全員で十数人ほどだった。知らない顔の生徒もいることからおそらく他の部活の生徒も集まっているようだ。

「あー、月さん、若狭君ごめんなさいね。こんな夜遅くに呼び出して。ご両親とか大丈夫？」

「いえ、別に良いんです。私の家も、ゆえの家もわりと放任主義で好きにやらせてくれるんで、このくらいの時間なら何でも無いんです。ねえ、ゆえ」

「へ？あ、ええ。別に、どうって事ありません」

「本当？そう言ってもらえると気が楽だわ。でもあなた達に電話した後うちの部員にも、声かけてみたんだけど、全然集まらなくて……当たり前よね、時間が時間だし余計に申し訳なくてね」

先輩が何度も謝るので逆にこちらの方が、何だか気恥ずかしくなつて来た。顔を見合わせた後、月が困ったように笑う。

「いえ、本当に私達暇だったから出てきただけなので、全然気にしないで下さい。それに、ほら、悪いのはその黒服達でしょ？月並みな表現になりますけど、先輩たちだって被害者じゃないですか」

「……月並みって言うより、どっちかって言うとかくさいな」

「……うつさいわね。わかって言ってるんだから。あんたも何か言いなさいよ」

僅かに頬が朱に染まった月は小声で言い返してきた。そんなやりとりを見ていた先輩がため息と共に呟く。

「今回は、もしかしたら加害者は私と遊衣かもしれないわね……」

「は？」

「あー、つまりね。最初から話すと長くなるんだけど……」

*

普段は気にもとめない時計の音がコチコチと響く。

当たり前かもしれない、いつものこの部室はざわざわとして活気があるが、今は自分一人なのだから。放課後残っていた部員も一人、又一人と帰っていった。

古風なぼおん、っという独特の振り子時計の音が木霊する。

はっと顔を上げた霜割睦は外が真っ暗である事に気が付いた。他の部員はもう一人もいない。上の空であいさつに答え、見送ったのは何時だったろうかと記憶を巡らせた。

（えーと、確か最後に袖で………帰ったのが、六時過ぎだったから………?）

ゆづに二時間は経っている。今日のノルマは達成しているしそろそろ帰り仕度をした方が良さそうだ。

（それにしても、良かった）

家に持って帰る生地を手に取りながら、顔から自然に笑みを浮かべてくる。

（助っ人引き受けてくれただけでも、ありがたいのにアイデア出してくれるし、月さんと若狭君。何かお礼考えた方が良さわよね）

帰宅が遅くなることが多いため常備してあるペンライトをつけ、部屋の明りを消した。

部活棟として使われている旧校舎の玄関はとくに鍵が閉められている。だがこの階の部屋にはテラスのようなベランダ付いていて、そこから非常階段が繋がっているため玄関以外からでも出入りが可能なのだ。教師陣も黙認している。

流石に夜八時すぎまで残っている生徒はいないらしく、静寂とした空気に自分の立てる足音だけが響く。

しかし校庭の中ほどまで歩いた時だった。遠くの方からパリンツという硝子のわれるような音が聞こえた気がした。

「っえ！？」

音につられて何気なく見上げた校舎に、薄ぼんやりした光が灯っている。蛍光灯ほど明るい光ではなく、せいぜい懐中電灯ほどの光そこに映し出されているのは、いつか見たあの黒い布を被った妖しげな存在。そこまで見た時点で無意識のうちに携帯を取り出し、一瞬ためらった後、ある携帯の番号を押した。

*

「で、どうしてこういう事態になったことの説明に繋がるんですか？」

「あ、つまりね……何を血迷ったか私、あの時こんなやつに電話しちゃったのよ」

こんなやつ事、海山先輩は興奮が抑えられないような様子だった。「夜の学校、不可思議な怪人、集まる生徒……」最つつつ高！！新作はこれに決定ね！！さあ、行くわよ！怪人を倒しに！！」

「こら！遊衣、何言ってるのよ！こんなに人集めておいて」

「やっぱり、あの時に睦が電話してくれたのはこういうことを期待してたのよ！無意識に」

「……なんでこんなやつの子馴染なんだろう、私」

「こういう場面に必ず呼んでくれる、睦の事私は大好きよ」

「はいはい」

「此処に来るまでに作戦考えておいたのよ！まず、睦に確認するけどあいつを見たのは科学部室の前あたりだったのよね？」

「ええ、たぶんね」

「だったら、一階の角部屋だから………地図でいくとこのあたりか、文芸部の真下になるわね」

「ちよつとまって。今どこから地図出した？なんでそんな物常備してるのよ」

「七つ道具は普段から持っているから七つ道具って言うんじゃない！！」

「いつもの事だけど、説明になってないから。まあ良いわ。そんなことより、早く作戦とやらの説明してよ」

「そうね。名付けて『眼には眼を、闇討ちには闇討ちを作戦！！』っていうんだけど」

まず、今現在一階の階段付近に敵がいると思ってね。一階の端から電気をつけていくの、もちろん目標から一番遠い教室から。そうしたら忍びこんで部室荒らしを働こうとしている連中なんて奴は、心理的に光から遠くに行こうと階段を上がるわけ、二階のときも同じように電気を付けて行くの。そして三階に上がって油断したところ一気に叩く！！それでね………」

「あの、すいません。一つ質問しても良いですか？」

ここまで誰も両部長のやりとりに入れなかった、もしくは突っ込みが入れられなかったが、月が丁寧にも右手を挙げて発言をした。

「とりあえず作戦はわかりました。でも、それよりこうなった場合自分達だけで解決しようとする方が無理なんじゃないですか？警察か先生方を呼ぶなりして、おおよけにしまった方が良いのでは」「そうしたいのは山々なんだけど、そうも出来ないわけがあるのよ」「はい？」

異口同音で皆が尋ねる。霜割先輩はこめかみに軽く指を当てて言いよどむ、頭が痛いらしい。

「あのね、本当は学校の校則でいくと午後六時ぐらいまでに部活動

は終らなきゃいけないの。まあ、文化祭期間中だし多少は見逃してくれるだろうけど、二時間も過ぎていれば……いうまでもないわね。必ず問題になるのよ。だからね、もし仮に私が『部活荒らしを目撃しました』って言うても、『何故早く家に帰らなかったのか?』って逆に責められちゃうのよ、しかもあの校長――

――
「校長先生が?」

数日前見た校長を頭に描きながらゆえが言った。どちらかというと、無知無害な感じだ。

「言い方は悪いですけど、わざわざ揉め事起こすようなタイプには思えませんよ?」

「でもね、校則には人一倍厳しいの。それが悪いわけじゃないけど、あのセンセイはどうしてもね……この学校の卒業生じゃないからか、部活に対する理解力が乏しいのよね。まあ多少、熱が入りすぎているといっても、否定は出来ないけど」

(……多少?)

いくらかの生徒は心の中で呟いた。

「まあ、少しぐらい不安でも自分達で解決するしかないってわけ! じゃあ、役割分担と行きましようか!」

満面の笑みで海山先輩が締めくくった。

「いま、学校にいる生徒は十三人。で、柚さんと翔くんとうちの後輩の安部と岡田と榊に入り口見張ってもらっているから残り八人。私と睦が指令統として外から指示出すから、引いて六人。だからひとつの階につき二人ずつで割るから――あ、ちょうど部活ごとで割れるわね」

「部活ごと、ですか? 私もゆえも所属してる部活なんてありませんよ」

「うん! だから、文芸部で一組、手芸部で一組、助っ人で一組、どう完璧でしょ! ?」

「……はあ」

「見張り役から、私の携帯に連絡がきたら作戦開始だから！あ、月さんの携帯の番号教えてもらえる？それで連絡とるからね！」

「・・・・・・わかりました」

「じゃあ、皆。ここが正念場よ！がんばっていきましょう！！」

第三章 祭 四（後書き）

花火先輩は本当にキャラを食うのでこまり m

第三章 祭 五

五

「『三階の人は非常口から入ってね！あいつらが動いたって連絡がきたら月さんの携帯にワンギリするから。見つけたら心いくまでとつちめてくれて良いから！』なんて言われたけどさ、どう思う？」
「俺に訊くな」

「しかも、何でか知らないけど私達が三階担当になってるし」
犯人捕獲というある意味一番危険そうな役目である。

「何でこんなことになるんだか」
「あ、そんな事言うならあんたが海山先輩に断ってくれば良いじゃない。できるなら」

「……できるなら、か」
「まあ、今さら言っても仕方ないわよね」

螺旋階段を登り終え、手芸部のベランダの扉に手をかけながら月が言う。

「じゃあ、連絡が着たら行動開始ね。二手に分かれて挟み撃ちにするから—— ゆえは右行ってくれる？そのままいくと突き当たりになるから、誰もいなかったらそこで待機。五分以上何も無かったら引き帰してきて。私は曲がり角の方に行くから、誰かいたら大声出して相手に知らせる事いい？」

「わかった」

「こんな事だったら何か武器になるものでも持ってくれば良かったわね、何か部屋にあるかな？」

「……看板の材料は、まだ材料が残ってたと思うけど？」

「そっか、じゃあそれを借りよう」

文句を言いながらも実に手馴れている二人だった。

「そっいえばあんた、灯になるもの持ってるのか」

「持っていないけど。でも、もともと闇討ちに灯を持つわけにいかないでしょうが」

「そうか……」

暫し沈黙が流れる。外をへ目を向け空を眺めると月明かりが無い
ためか、星が一段と輝く綺麗な夜空が広がっていた。青い星はシリ
ウス、並んだ三ツ星はオリオン座、赤い星は蠍座の――

「来た」

月の手の中の携帯電話が淡い光を放ち、着信があった事を知らせる。

「じゃあね」

月はゆえに笑いながら呼びかけると、少し様子を見てすぐに暗い廊下に出る。ゆえも軽く頷いて見送り、軽く深呼吸をしてから部室を出る。少女の姿はすでに見えない。

進行方向つまり部室の右手の方に目を凝らしたが何も光源が無い
ため、はっきりとは見えない。歩いて行って確かめるしか無さそう
だ。足音を消しながら歩いていく。注意深く階段を覗き込んだが気
配が無い。

（まだ来ていないのか？それとももうこの先に進んでるのか……
・・・）

どんどん歩いていき、一番突き当たりの軽音部室まで着てしまっ
た。周辺も見回したが異常は無く荒された形跡も見当たらない。部
屋に収まりきらなかった、機材が廊下に立て掛けてあるだけだ。

（……じゃあ、五分待機か）

とりあえず、その機材らしき板の陰に身を隠し、ちらりと時計を
見やった。

8：27

液晶の画面を見ながら、ふと思った。

（やばい。そろそろ本気で腹減ってきた）

薄く光る、液晶を睨みつける。

何もおこらない。

多少拍子抜けしたぐらいだった。それ自体は結構だ、もともと好きで参加したわけじゃない。ただ心配なのは同じく暗闇に向かった少女の事だった。どれだけ耳を澄ましても何も聞こえなかったから、戦闘は恐らく無かったものと思われる。

（まあ、心配するほど弱くは無いけど）

そんな事を考えながら、道を引き返そうとした。その時、思わず体が強張る。

何かいる。

突き当りまで視界を何も遮る物はないが右手には階段があったはずだ。そのあたりから僅かに足音のような音が聞こえた気がしたのだ。

ゆっくりと持っていた棒を両手に持ちなおす。

徐々に緊張が高まっていく、心臓の鼓動大きすぎて自分の齒の裏に響くように聞こえる。

「――ッ」

考えて動いた動作ではなかった。人影が見えた途端、足を踏み出し薙ぎ払う、が。木製の棒同士がたてるこもった音が響く中、見た相手は考えてもいなかった相手。

「ゆ、ゆえ？うわ、あんたちよつと気配消すの上手すぎよ。本気で打ちかかったじゃない」

月だった。

緊張しただけ脱力も多い。まだ打ち合った時の衝撃で痺れが残る手を振りながら、問い掛ける。

「じゃあ、さっきの足音もあんたのか？」

「そうよ、気配を感じたから。相手から仕掛けさせて捕まえてやるうと思っただの」

「……揚句の果てに同士討ち？」

「ものすごく間抜けね、私達」

「そうだな、——あんた、携帯に着信着てるぞ？」

「え？本当。……あ、霜割先輩みたい。はい」

『月さん。黒いのが見つかったって！今、一階の窓硝子が割れるのと明りが見えたから皆集まって貰ってるのッ』

「ええ！？」

『そう言うわけだから、一階に急いで来て！じゃあ』

「わかりました。ゆえ！」

「全部聞こえた」

二人とも並んで階段を駆け下り始めた。二人とも意識はしてないが喧嘩口調になってしまっている。

「三階に追い詰めるんじゃないのか！？」

「知らないわよ！失敗したんでしょ」

「じゃあ何であんたに『三階に行った』って連絡が入るんだよ！！」

月が急停止した。苛立たしげにゆえも止まる。

「どうした？急いだ方が良いんじゃないのかよ」

「何か、おかしくない」

「は？」

「あんたが言ったとおり、確かに二階までは黒服はいたのよ。じゃなきゃ連絡が来るはずがない。でも、そう考えると一階に居たって事に説明がつかないわ。どちらかが嘘でなきゃ」

「じゃあ、あんたは一階で硝子が割れたって方が嘘だっと思ってるのが？」

「そう仮定すると、あいつらはこの踊り場から消えたって事にならない？」

二人とも視線を巡らせ、在る事に気がついた。

「もしかして、窓か？」

月はそれには答えず、無言で窓に手をかけた。少し動かすと簡単に開き、夜風が吹き込む。

「鍵かかってないわ、ここから出たってわけね」

何の気無しに窓を覗き込んだ後、表情が一転した。

「ゆえ！霜割先輩に旧校舎西に集まるよう連絡して、黒服がいた」

「は！？」

「頼んだわよ」

言い残すと、窓からベランダに身を躍らせた。ゆえは携帯電話を取り出し、番号を呼び出そうとして、止まった。

（…………俺、電話番号知らないよな…………）

凍結すること数秒。窓を覗き込んだが既に黒服どころか、月さえ見当たらない。

「————クソ」

滅多につかない悪態をつき、窓枠に手を掛けた。

月は目前で黒服をはためかせながら走る人物を睨みつけながら走っていた。差は縮めたが、足場が悪いのも手伝ってなかなか追いつけない。

（持久戦になったらおしまいね）

短距離ならそこそ自信もあるが、持久力はいまいちなのだ。黒服はベランダの階段を駆け降りた後向かったのは、西。先輩達が待つ校門とは反対の校庭側。その事について月は少々疑問を感じていた。

（フェンスがあって袋小路になるんじゃないの？）

もし登るんだったら捕まえ易くて楽だけど、などと考えながら器具倉庫を曲る。

が、思わず目を疑った。

誰も居なかったのである。器具倉庫の裏には人が通れるくらいの隙間しかない、あとはコンクリートとフェンスにだけだ。そこにいるはずの人陰を探そうとした時。

近くでバスの発車する音が響く。

自然と目で追う形となる。やはりこんな時間にバスに乗る者は少ないようで、座席はがらがらに空いている。今乗ったとおぼしき、立っている人物も一人しかない。しかしその立っている少年がこちらを凝視しながら、おかしそくに口元を歪めて笑っているのだ、なんとなく不快に思いながら月は少年を見つめ返した。

頭には野球帽を目深に被り顔は見えない、緑色のパーカーのような物を羽織っている。そして小脇には黒い布のような物を抱えている。

（――黒い、布？）

事実気づいたときは、すでにバスは走り出していた。思わず月は叫んだ。

「逃げられた――！！」

第三章 祭 五（後書き）

月は瞬発力がありますが、持久力はありません。
戦闘は常に短期決戦。体力も四人で一番低いので、まっさきに風邪を引くのは月です。

第三章 祭 六

六

「ぬかったわ」

それが霜割先輩の第一声だった。

「二階まで来た時点でたぶん、こっちの狙いに気づかれたようね。まあ、気づいていなくても下の階はこうこうと明りがついているのに、三階だけ真つ暗という事実には作威的な物を感じた。だから懐中電灯を窓から投げて硝子を割り、それを囿に踊り場の窓から逃走し、校庭側のフェンスの切れ目から脱出後バスで逃亡。まあ、初めから完全な作戦じゃなかったから仕方が無いといえば仕方ないけど悔しいわね」

すっかり落ち込んでいる幼馴染を見て、慰めるように付け加えた。

「まあ、部室荒らしを妨害できたのは収穫だけど」

「・・・・・・・・」

反応は無い。

「被害はどれ位だったんですか？」

翔が訊いた。

「んー、きちんと確認したわけじゃないけど一階はおそらくほぼ全滅、二階も少し。窓硝子が割られて、中も少し荒らされた上にこんな紙が散乱していた」

透明のビニール袋に入られている紙——海山先輩が入れたと思われる——紙とヒラヒラと振りながら答える。

「文面は前と同じ。大きさだけが違うから、芸が無いと言えば芸が無いけど数があるから気持ち悪いわね」

「そんなにあるんですか」

「少なくとも、一部屋に百枚以上は優にあるんじゃないかしら」

「げ・・・・・・・・」

全員顔を顰めた。青ざめている女子生徒を安心させるような笑みを向け、手芸部部长は明るく言った。

「まあ、そんなわけで。明日また集まって貰えると思うけど、今日のところは解散。今日は皆ごめんね、ありがと」

その言葉で締めくくられ、解散となった。

「……流石に腹減ったな」

ぼそりとゆえは呟く。もう、九時近くなっている。

「え、ゆえもまだ夕飯食べてないの？」

隣から声がした、伸びをしていた姿勢のまま月が立ち止まる。

「まあ、準備仕掛けでできたから」

「悪かったわね。無理に呼び出して」

「別に。あんただって呼び出されたんだろう？」

「まあそうだけど。でも——あ、じゃあこれから夕飯食べにこない？」

「え？」

「うちに食べにきてよ、夕飯。付き合わせたお礼にごちそうするわ」

「……良いのか？そうして貰えるとかなりうれしいけど」

「良かった。私も実はまだなんだ」

月は小さな銀の鈴のついた鍵を取り出し“白詰”のドアノブを回す、ゆえも続いた。開いた扉から見えた部屋は一度だけ見た時よりも格段に雰囲気良くなっていた。

淡い藍のカーテンと同色のベットカバーが目を惹き、小さな白い花をつけた鉢植えがベットの横の机にランプ型のスタンドと共に置かれていた。依然見た時には空だった食器棚にはシンプルな食器が整然と並び、同じく空だった本棚には本と一緒に凝った小物達が並んでいる。

部屋全体清潔に保たれており、居心地も格段に良くなっている

しかし、大量のぬいぐるみや芸能人や運動選手のポスター、納まりきらないほどの大量の服や鞆などといった一般の女子中高生らしいものはほとんど無い。だからこそ居心地がいいともいえるのだろうが。

そのかわりに、民族工芸のような凝った小物が並び、壁には大量の写真が飾られている。ただひとつのぬいぐるみのティ・ベアはなぜかチャイナ服を着ていたりする。

「後は焼くだけだから。まあ、テレビでも見ててよ」

興味深々と言った様子のゆえをみて月は軽く笑い、そう言うときの台所に歩いていった。生返事とした後、ゆえは言われたとおりにテレビをつけたが視線は部屋に向いてしまっている。

一通り見た後、大量に貼られた写真に目を向けた。風景を撮ったものや、イベントらしい写真、記念撮影などが無造作にピンで貼られている。

ひとつの写真に眼がいった。

季節は秋のようだ。紅葉が錦を織り成し背景を飾っていて、寺院を後ろに少年と少女が並んでいる。一人はこの部屋の主、黒髪に薄墨色の瞳をした少女。隣の無表情で写る明るい髪をした少年は――

「何か珍しいものでもあった」

「うわあ」

真後ろから行き成り声を掛けられ、奇妙な声がでた。

「どしたの？変な声出して。それに、あんまり大きな声を出すと、上や下にまで聞こえるよ」

「わかった……わかってるけど……」

「そう？差し支えなければ、早く食べないと冷めるよご飯」

「早いな」

「下準備はしてたから焼くだけだったし。実をいうと分量間違えて作りすぎたの」

肩をすくめながら言う。

「いつも二人分だったし。じゃあ、運ぶの手伝って」

献立はオムライスと野菜スープ。それに、ポテトサラダ。見た目も申し分ないが、栄養も偏り無く取れるように考えられている。

「すごいな」

暫く食べてから、ぽつりとゆえは言った、本心だった。

「ん？何が？」

「料理作るのが得意だったりするんだ、と思って」

「んー、まあ得意というより慣れかな？ほら、前少し言ったと思うけど私、明日華さんに育ててもらったって。でもあの人仕事柄しかたないけど留守がちでね、夜なんかも帰りが遅いし……しかも以外に凝り性で。料理作るにしても、きちんと本を見て作るのが好きだったから、自然と私が作るようになっていったの」

「そうか」

「ゆえは？やっぱ一人暮らしなんかしていると料理なんて出来るでしょ」

いかにも興味津々と言った風情に戸惑いつつもゆえは口を開いた。
「……一応は。でもレパートリーとか少なくて。缶詰とか冷凍食品とかの方が多い」

綺麗な銀杏切りをされた林檎入りのポテトサラダをつまみながら答える。

「飽きない？缶詰ってどれもみんな同じ味がするし」

「……昼は学校だし、夕飯だけだから。朝は抜いてるし」

「朝抜いてる！？」

驚き半分呆れ半分といった妙な顔をされた。

「あんなね、朝はたとえ牛乳の一杯でもバナナの一本でも胃に入れないや駄目じゃない。いつか体壊すわよ」

「そうか？逆に朝食食べたほうが腹が痛くなるんだけど」

その言葉を聞いた途端、突然月が笑い出した。茫然としているゆえにひらりと手を振って何でも無い事を示したが笑いは中々止まらなかった。

「あー、ごめん。『ゆえ』とこんな普通の会話をしていると思うと、妙に笑えてさ」

この場合の『ゆえ』とは今眼の前で夕飯を食べている相手ではなく、以前の『ゆえ』をさしているのは明らかだった。

「『若狭ゆえ』ってどんな奴だった？」

自分でもかなり素直に聞けたと思う。妙な問いかけを気にする様子も無く月はきっぱり言った。

「不愛想」

「・・・・・・」

「しかも無表情。とにかく無口だったわね、いろんな事に無頓着だったし。口を開いても殆ど用件しか言わないし、だけど自分の意見はちゃんと持っていて、言う時には言うし。愛想は皆無な上無口な奴だったけど、いいやつだったよ」

それだけ“無”がならぶ者を世間一般の“良い人”として捉えるのは難しいが、ゆえの関心は別にあつた。

「・・・・・・もう一つ。変な事を聞くけど、やっぱりあんたの言う『ゆえ』と俺って同じに見えるんだよね」

今までこんな事を口にすれば版で押したように“同一人物だから当たり前だ”と言われたが、月はさらりと言った。

「違うよ」

「え？」

「同じじゃないと思う。似てる所もあるけど違うよ、以前の『ゆえ』と今のゆえじゃ」

優しそうに目を細めながら、月は続ける。

「一番最初は、同一人物だと思ったけどね。勝手な言葉に聞こえたら謝るけど、今は別人に思えるよ。翔なんかは今でも前のあんと今のあんたが頭の中で結びつかないらしい。

なんかね、特に夢境界での『ゆえ』はもつと何か張り詰めて、ギスギスしている感じだったけど、今のあんたにはそれが全く無いから別人——とまではいかなくても、兄弟みたいよ」

「現実でもその、『ゆえ』に会ったことあるのか？」

少女はたつぷりと十秒余り黙った後、ああ、あの写真か、と呟いた。

「会ったよ。私が小六の頃。修学旅行で京都に行った時に初めて会ったの」

どこか遠い目をしながら、とつとつとした口調で話し出す。

「修学旅行の市内観光の日程とゆえの午前授業とが重なってね。自由時間に清水寺で落ち合ったんだ。まあ、ほとんど私が強引に呼び出したんだけど。その時も凄くびっくりしたのを、今での鮮明に憶えているよ。とにかく印象がね、違うの」

「印、象……」

「そう、幼いつていうか、なんていうか。服も当たり前だけど普通の服でさ、髪は短くて。だからかな？全体的に印象が優しかった。

私を含め柚も翔も夢想界と現実ではほとんど人柄も容姿も変わらなけれど、ゆえだけはどこか違うと思った」

過去を懐かしむように、現状を喜ぶように、楽しそうに笑みを浮かべる。

「前と比べて、抱えていた暗いくてどうしようもない何かが、少し薄らいで——いや、吹っ切れたのかしら。とにかく、私は良い方になんて思っていると思うよ。きっかけは何であれ、肩の力が抜けて生まれ変わった気持ちになれたのなら、それで良いんじゃない？」

その後、また少し話した後ゆえは自室に帰っていった。手には月に『朝食だけはなんとしても食べないと』と言われ皿をしっかりと持たされていた。

第三章 祭 七

七

手芸部部长は部屋に入るなり怪しいほど素早く目線を動かし、窓際にかたまっている三人を見つけるとすぐさま駆け寄り小声で話し掛けてきた。不味い事になった、と。

「これ以上ですか？」

「これ以上よ。昨日の夜の目撃者がいたの」

「良かったじゃないですか、黒服見つかる可能性が高まったんじゃないですか？」

「そうじゃ無いのよ、柚」

「え？」

「私達が目撃されてたの」

「えーと何て言いました、今」

柚は妙にさわやかな笑顔で、しかめっ面が張り付いてきた部長を見上げる。

「だから、私達容疑者として疑われてるのよ。まあ私達って言う事はばれてないけど、一部の生徒は探してるって噂。学校側はあまり信じていないみたいなのが救いだけだね」

「一部っていうと、海山先輩達ですか？」

苦笑を浮かべながら部長は首を振った。

「そんなわけないでしょ、文芸部の連中のほとんどが参加してるのよ。乗り気なのは被害にあった一、二階使ってる運動部の連中、それと科学部」

「科学部が、ですか。何で？」

「何でかしらね。部屋は被害にあってないし、唯の興味本位なのか何か裏あるのか」

月が襟のフリルにビーズを取り付ける手を止め、小首をかしげた。

「科学部ってあまり活動してるの聞きませんよね」

何やってるんでしょうか？と呟く月の言葉に部長はあいまいな返答を返した。

「さあね。五、六年前は県の科学作品展に出したり表彰受けたりしていたみたいけど。最近はあんまり活動して無いみたいね。部員も年々減っているみたいだし、いるのも幽霊部員ばかりらしいわよ。まあ、同好会から部活になると大体の部活は人数減るけど」

「どうしてですか？」

珍しいゆえの発言に月以外は不思議そうな顔になる。

「どうしてって。若狭君知らないの？」

「部活やってないとその辺が無頓着になるのかしらね、転校してきたのって去年の体文祭が終わってすぐだったのに」

「そうだけど、何か」

針を持つ手を止め、柚は説明し始めた。

「あのね、この学校の部活動の制度の問題なんだけど。まず基本的な部活の兼部は認められて無いの。でも同好会だといくつでも同時に入会が可能になる。だから、先輩が言っただけみたいな現象が起こるのよ。」

こう言つと同好会の方が有利に聞こえるけど、待遇は部活動のほうが上よ。学校案内のパンフにも載せてもらえるし、金銭的にも優遇してもらえる。無条件で部室ももらえるしねー、同好会は活動が直に部費に反映してくるからみんな必死よ、人数とか、体文祭の順位とかもね影響して来るの。」

だから人気の同好会なんかは部に認知されてもおかしくない部でも、あえて同好会にいる部もあるのよ。占い同好会なんかがいい例ね」

「自分で部になるか同好会になるか決められるのか？」

「うん。具体的には同好会の段階である程度実績を立てて、文化委員に希望届けを提出する。そうすると生徒会とか委員会とか先生とかが話しあって決めるの」

「で、その科学部は後から部になっ たんですか？」

「そうよ、月さん。確か三年前だったと思うけど」

「四年前ですよ、先輩。姉から聞いたことがあります。」

「そう、そうしたら途端にぱったり活動しなくなったの。噂では貰った部費で部室にオーディオとかDVDシアターとか買って遊んでるって話。もちろん違法よ」

「……そんな事ってあるんですか」

「過去には何回かあったらしいわよ」

「どうなっ てんだか……この学校は」

「だから年に一度文化祭の後に文化委員の調査が入るのよ。どれだけ活動しているのかとか、実績はどうなのかとか。場合によっては部から同好会に格下げっていう場合ありえるし。文化祭に力入れている訳がわかったでしょう？ちなみにうちは由緒正しい開校以来からずーと部よ」

一端言葉をきり、睦は乱雑に置いてある椅子の一つを自分のほうに寄せて座った。

「それと月さん若狭君。今日海山遊衣見かけたら、逃げてね」

同時に手を止め一瞬沈黙をする。

「何故？」

二重奏の言葉に、睦は乾いた笑いを上げる。

「昨日沈んでいたと思ったのにね。あいつまた『疑い晴らしてやるー！』とかわめいていたのよ。見つかったら借り出されると思うから、できるだけ部室（こ）にいるときとかも物陰に隠れていて。私が適当に言っ て追っ 払うからさ」

「あの……なんで俺達だけに言うんですか？」

「気に入られているからよ。あいつ顔が綺麗な子好きだしね、二人の事なんか小説に出てくる登場人物みたいな子っ て言っ ていたわよ」

「ゆえはともかく……なんで私が？」

「俺のセリフだ。あんたの方がどうみたって目立っ てるだろう」

「この眼の色だからでしょ？後姿だったらあんたのほうが目立っ て

るわよ」

「どう言う理屈だよそれは」

柚と睦がここで同時にため息をついた。

「あのさ、お二人さん。自分たちが言ってることがどれだけ不毛かわかっている？」

「二人とも世離れと言うか、浮世離れしてるからね」

「柚、どういう意味よ。容姿の要素で言ったらあんたが一番めだつじゃない」

「容姿の話じゃないよ、雰囲気と言うか。印象が周りと違うから妙にめだつの、浮いてるって言うか」

黄を帯びた金髪を持つ少女がそう言った時、部室の木戸が飾りを吹き飛ばす勢いで開いた。

「睦！一時間だけ若狭君と月さん貸してね！じゃー！」

一瞬の出来事だった。叫ぶと同時に二人の手首を同時に捕まえ、つむじ風の如く去っていく。しばらく沈黙してから睦がぼつりと呟いた。

「止める暇、無かったわね……」

「あの海山先輩。いいかげん手首離してくれませんか？逃げませんから」

「……」

ゆえも無言で同意する。

「あら、ごめんね。で、少し手伝ったって欲しい事があったものだから……いいかしら？」

ここまで有無を言わず連れてきてからそれを聞くかつ、と言った感じだが、二人は頷いた。無理やり頷いた。

「それで、何をやればいいんですか？」

「とりあえず、これまでの成果を説明したいから部室で話すわ！」

部室へつくと落ち着いたのか、今までとはかわって大分普通の口調で話し出した。

「今までにあった事を詳しく書き出してみたの」

本格的に茶葉で入れた紅茶を手渡してから、紙を取り出した。

『第一被害 襲撃事件』犯人・一〇七人

科学部四名（市川元、瑞樹尚登、三宅浩志、奥村宏治）…………

眼鏡破損と打撲、足首捻挫。

演劇部二名（三谷原桂子、富士葵）…………擦り傷。

文芸部二名（藤沢亜衣、金平雅巳）…………無傷と軽い捻挫。

占い同好会二名（荒瀬麻美、兼平瑠璃子）…………二人とも無傷。

手芸部二名（霜割睦、淡路月）…………ほぼ無傷。

美術部二名（矢澤友紀、宮原朋絵）…………一名髪を少々切られる。

書道部二名（瀬川絢、三井由良）…………無傷と右手にあざが出来た程度。

合唱部二名（鈴鹿あゆら、高木朝美）…………一名右手に擦り傷

『第二被害 部室荒らし』犯人・おそらく1人

一階 卓球同好会・バスケット部・野球同好会（被害なし 科学部、空部屋）

二階 美術部・書道部・バトン部（ 文芸部 陸上部）

三階 （ 軽音兼プラス部、手芸部、占い同好会、演劇部、合唱部）

「で、何か気がつくことは無い？」

にんまりと微笑む部長に問いかけられ、二人は口々に言い出した。「最初の時はほぼ二人が被害になってますね、科学部だけ四人もだけど」

「片方だけもあるけど、両方の被害に遭っているところあるな」

「そうなの！因みに二重被害にあっているところは文芸、美術、演劇、書道よ」

となると、月は紅茶のカップを持ち上げながら呟く。

「最初は文科系の部活ばかり狙われている事になりますね。体育系の部活をやっている人には襲撃しても返り討ちにされる、とても思ったのかしら」

紅茶を飲みながら、まあ文科系を狙っても返り討ちにされているけど、と付け足す。

「そうになると、犯人はあんまり運動には自信が無いようです。女子ばかり狙ってるのも同じ理由じゃないかしら」

「私もそう思ったの。もう一つ言うと、狙われているのはみんな小規模の部か同好会になるのよ！不本意だけどうちの部もね、毎年部活の存続にかけて気を使う部だし。現に部室棟が違うからかもしれないけど、プラス部なんかは狙われて無いでしょ。それにこれは同じ棟で、陸部」

何と無く頷いた二人だった。たしかにこの学校はプラスバンド部に力を入れていて、毎年県大会では優勝候補になっている。陸上部も唯一盛んな運動部だった。

「で、考えたの。部室荒らしなんか入れれば自分の入部した後にも狙われてら嫌だっと思って考えて入部ためらう新一年が出てくるじゃない。それを狙った、弱小部の犯行だって！！」

二人とも一様納得した。納得はしたが、何か嫌な予感がする。

「そこで、お願いがあるんだけど」

また異様に眼をきらきらさせて、自称探偵部兼文芸部部长は言い出した。

「この表見てわかるとおり、私自身犯人の顔を見たことが無いのよ。第一次件の時も第二事件の時もあわなかったの、だから容疑者の偵察に行ってもわからないのよ！！　ついて来るだけで良いから、一緒に来てくれない？」

自ら罫に飛び込んだ気がした、と月後は後からこの事を柚に話したのだった。

第三章 祭 八

八

妙にテンションの高い部長に連れられ、というか引きずられるように、二人は廊下を歩いていった。

「合唱部と科学部と合唱部行くからね、他は部員にまわって貰うから！先に合唱部行くよ！！」

ここまでくるとまさに『毒を食らわば皿まで』の文字しか抱けぬ二人だったが、その言葉に月は不思議そうに首を傾げた。

「何を聞くんですか？」

「一応アリバイのために昨日の八時ごろは何していたか聞いて見ることにしているの。聞かれた反応を見て何か不信そうなそぶりをしたら、当たりってね。月さんも良く見ててね！」

目指す旧音楽室へ辿り着いた海山先輩は、すぐには引き戸に手をかけようとはせず、静かに深呼吸した。喧しい声がやみ綺麗なピアノの音が耳に届く中、戸を静かに開け覗き込む。

「すみません、部長さんはいますか」

背後から室内を覗き込むと、どうやら休憩中だったらしく十人ほどの部員が思い思いの場所で座って雑談している。ピアノの演奏者と話していた生徒が戸に近付いてきた。

「あの、私が部長です。何かご用ですか？」

不思議そうに見覚えの無いであろう三人組を見つめてくる女生徒は、肩につくほどの黒髪をした大人しそうな雰囲気をもつ少女だった。

整った顔立ちだが美人というより可愛いという風情。それだけなら何処にでもいる少女だが、はっと目を引く不思議な雰囲気を持っている。よくよく見ればと瞳の色が薄く、茶色より黄色味の強い古酒のような琥珀の虹彩をしていた。

「突然呼びつけて、ごめんね。私は三年一組の海山遊衣。こちらは二年の若狭ゆえ君と、淡路月さん。もし違ったら悪いんだけど、あなた二組の鈴鹿あゆらさんだよ」

自称探偵部部長は月とゆえが眼を見張るぐらい普通の調子で話し掛けた。人懐っこそうな笑顔まで浮かべている。その豹変振りから演技だと思うが、そんなことを知るよしもない合唱部部長の少女は笑顔で答えた。

「あつてるよ。よく知ってたね、クラス違うのに」

「知っているわよ。鈴鹿さん、有名だもの」

「そんなこと言ったら海山さんだって有名人だよ、あの探偵部の部長さんなんですよ」

微笑みながら答える声に、妙にうれしそうに海山先輩は続ける。

「うん。それでね、今日はその探偵部として事情を聞きにきたの。鈴鹿さんの部も被害に遭ったでしょ、昨日の部室荒らし」

「ううん、違うよ。なぜかはわからないけど、私達の部室は無事だったの。嬉しい事だけど……なぜかわからないから部員みんなで首を傾げてるの。前の時は被害にあったのに」

一歩ひいたところで二人を眺める月は、三階に来る前に私たちが追っ払いましたとは言えないはね、と内心で呟いた。

「じゃあさ、誰とは言えないんだけど……八時ごろにこのあたりで人影を見たって言った人がいたの、鈴鹿さんも学校にいた？ 誰かの姿見たりしなかった？ もし妙な人を見てたら、特徴を教えてください」

「その時間なら、文化会館にいたわ。部員みんなで。今年は自由日に演劇部と一緒にミュージカルをやる予定だから、最後の稽古をしにいったの。八時ごろならちょうど音楽室から体育館に移動して、演劇の人たちとリハーサルやり始めた所だったと思うし。八時半まで部員みんなでいたから残念だけど役に立てそうに無いね」

「途中で一旦学校に戻ったりはしなかったの？ 一人も？」

「うん、文化会館って学校と離れてるでしょ、家の方向もばらばら

で。一旦学校に戻ると反対方向になってしまふ部員もいたから。その場で解散したの

それに、人数が少ないからみんな舞台に出なくちゃいけない。だれも欠席できないのよ」

苦笑いをしながら答えた。礼をのべ部室を後にししばらく歩いた後、感じのいい人でしたね、と月ほぼつりと言った。

「そうね……・・・嘘を言っているように見えなかったし。これは演劇部に行く必要は無いかな」

「そうですね。唯の直感ですけど、嘘をついたり、人を貶めたり、脅したりするような人には感じられません。ちゃんとした、良い人だと思います。ゆえは？」

「……・・・犯人には見えなかったな」

黒服を頭に思い描いたが、まるで似てない。

「私も賛成。だいいち文化会館って車使っても十五分ぐらいかかるところにあるし。私達が学校にいたのが十分ぐらいだから犯人がいたのは二十分ぐらいと考えられるでしょ。文化会館から十五分かけて来て二十分学校にいて、また十五分かけて帰ったんじゃ、とうてい『八時に文化会館で練習してました』何て言えないわね」

どんなに短くとも五十分以上いる事になる。そんな間に何人もの目をくらすのは不可能だ。

「一様念を入れて、文化会館まで言ってみるつもりだけど。」

「じゃあ、次は科学部ね」

「あの、どうでもいい話ですけど、さつき海山先輩ってあの先輩の事『有名』って言いましたよね、何で有名なんですか？」

「知らないの！？あの子のお父さんリュウ・スズカなのよ」

「あの画家のですか」

「誰だつて？」

驚いたように顔を見合わせる二人を交互に眺め、どうやら自分だけ知らないようだと思い、ゆえは尋ねた。

「鈴鹿竜って言う画家よ。とっても綺麗な幻想的な絵を描く。町に

ブロンズ像あるでしょ？そのデザイン画を描いたのも確かリュウ・スズカのはずよ。絵の方もこの町のいたる所にあるはずだから、必ず何処かで見てるわよ」

「もしかして、駅の壁画とかか？」

「うん、それも確かあの人だったはず」

月の言葉にゆえは納得したように頷いた。

観光に力を入れる町である暁は、町の景観美化にも力を入れていく。洋館など古い建築の保存だけでなく、町全体の雰囲気作りにもそれはおよんでおり、いたるところに、妖精や星座、ギリシャ神話の神々など像が配置され、壁画が画かれている。ちよつとした看板なども真鍮色をしたしやれたデザインに、妖精がとまっている、といった凝りつぷりだ。

特に駅の入り口の壁一面に描かれた『払暁の聖霊（The holy of down）』と銘打たれたフレスコ画は町の観光名所になっていて、地元民がああの辺りにいると、必ずカメラのシャッターを押してくれと頼まれる。

「鈴鹿って聞いてもしかしてって思ったんですけど。ああ、だから瞳が薄い色だったんだ。確か奥さんがフランスの方だって聞いたことがあるし。柚が好きなんです、あの人絵の絵」

そついい薄墨の瞳を細めた少女にどうりで詳しいと思った、と先輩は笑い、そして小首をかしげた。

「でも月さんの方が目の色素薄いわよ。あ、もしかしてご両親が外国の方なの？」

「いいえ、違うんです。両親どころか祖父母も純日本人のはずですけどね。なぜか私だけこの色なんです」

薄墨とも銀とも灰色ともいえる不思議な瞳を指さしながら冗談めかして笑う。

「へえ！変わってるわね……若狭君も地毛だよ」

「そうですよ」

明るい茶の髪を見つめ、先輩はちよつと気の毒そうに肩をすくめ

た。

「でも若狭君の髪だと、染めても似たような色になるから服装検査の時大変そうね」

「はあ、まあいろいろ言われますけど」

もう諦めに近いため、別に何を言われても気にならない。

そんな話を話すうちに、科学部の前に着いた。暗幕が廊下に面した窓にかかっていて中は何も見えない。その怪しさを後押しするかのよう先輩は声を低めた

「月さん、若狭君。今度は第一容疑者ともいえるから、しっかりとみててね」

「容疑者って先輩――」

何て大袈裟なと思ったが、鋭い声は怪談でもするかのように声をひそめられたままだった。

「噂ですべて決め付けるわけにはいかないけど。あんまり評判良くない部活じゃない。聞いたこと無い？」

「まあ、ありますけど……」

「何か、用ですか？」

突然横から声がした、振り向けば不機嫌そうに目を細めている男子生徒がいる。背は標準より僅かに高くくらいで、髪は短く刈つてある、何処と無く秀才的な雰囲気を与える顔立ちだ。

「あ、あの私、文芸部部長の海山です。こちらは淡路月さんと若狭ゆえくん。昨日の部室荒らしの事で部長にお聞きしたいんですが」

「部長は俺だけど……」

胡散臭そうにこちらを見ていた眼が、止まった。視線をたどった先にいたのは薄墨の瞳を持つ少女。睨みつけるようにじっと凝視された月は、小さく首をかしげた。

「何か私の顔についてますか」

「いや、別に……」

はっと気がついたように慌てて目線を逸らす。その様子をちらりと横目にし、海山は視線を戻した。

「そこですね、目撃情報から八時ごろに校舎に入ったと思われるんですが、あなたは八時頃に学校にいましたか？もしいたなら何か見てませんか？」

「何も見てませんよ、八時ごろは校門近くの文房具屋にいつてましたから。それでは忙しいんで、じゃ」

逃げるように――部室の中に入っていったと、ゆえは感じた。

「あらら」

先輩は呟く。

「何か怪しいわねえ、じゃあ、その文房具屋まで行きますか！証拠探しに！」

それも付き合わなければいけないのかと、ゆえはげんなりした気分で考えた。

「はい？昨日はやってなかった？」

「ああ、そうだよ。毎週水曜日は定休日だからね。本当は遠江が文化祭だからやろうと思ったんだけどねえ、急に用事が入っちゃったもんでさ、いつもどおり休みにしたんだよ」

雑貨屋兼文房具屋のおばさんは朗らかにそう答えた。

「ここの学校の文化祭は盛大で良いね。がんばりなよ、あんたたちも」

「はい、ありがとうございます。がんばります、もし良かったら是非見にきてください」

店を出た後、月はおもむろに呟いた。

「どういうことですか」

「どうも、こうもないわ。嘘ついてるのよ、市川元が」

「市川ってというのがあの」

「そう。さっきの科学部部长よ。となると益々あやしいわね」

「犯人、つて事ですか？」

月がおもしろそうに微笑んだ。その目の輝きは、おもちゃを見つけた猫科の動物を思わせる。

「わたしも気がついたんですよ、あの人の不審な点」

「本当！？聞かせて！でも此処じゃ場所が悪いわね。お茶でも飲みながら話しましょ」

「いいんですか。まだ学校途中なのに抜け出したのに……この上喫茶店なんかに入って」

「いーのいーの知り合いのお店だから、今日つき合わせちゃったお礼に私が奢るよ！」

つき合わせたという自覚はあったんだと、月もゆえも思ったが口には出さなかった。

海山が二人を連れて向かったのは文房具屋から二件隣の『葉月』という喫茶店だった。学校が近いせいかわれ外にも丸テーブルがいくつもならび、明るくポップな雰囲気の内とあいまって学生でも入りやすい様子だった。

カラリと木鈴が素朴な音を立てて扉が開くと、痩せ気味の男性がカウンターから出迎えた。

「いらつしゃい、おや、遊衣ちゃん。学校もう終ったのかね」

「おわってないけど、抜け出てきちゃったの。授業じゃないからさぼりじゃないわ、見のがしてー。で、マスター今日のおススメは？」

その言い草に店主は目じりのしわを深め、笑って答えた。

「檸檬草レモングラスのハーブティーかな。今日は寒いからよくでてるよ」

「じゃあ、私はそれで。二人とも好きな頼んでね」

月は同く檸檬草レモングラスハーブティーを頼み、ゆえは珈琲を頼んだ。

「それで、月さん何に気づいたの？」

「腕のあざです。さっきの人の右肘のあたりに大きな青あざがあったでしょう？それが私が殴ったところとほとんど同じなんです」

「殴ったって……あ、第一事件の時！？」

「そうです。はさみを持ってましたからね、思いっきり傘で叩いてやりました。それにあの人がけにじっと私のこと見たでしょう？想像でしかないけど、私たちに仕掛けてきたのはあの人がじゃないかな」

「そういえば、今気づいた事けど……第一の時、科学部だけ四人だったよな。あれって被害に遭ったんじゃないって、返り討ちにされたんじゃないか？」

「ありえない話じゃないわね。私もコピー機の利用者数と使用枚数調べただけけど、科学部の名前があつたわ。しかも用紙が明らかに五百枚ぐらい足りないのよ」

「五百……も？」

「あそこの上って、五百でひとまとめになってるじゃない。半端になくなるより、目立たないと言えば目立たないわね。となるとまずあの部が犯人に近くなるか……一様合唱部のアリバイ確認のために文化会館へ――」

「何が文化会館なんですか、部長」

地獄から響くと言うか、怨念の込められたとしか言いようの無い声が、入り口から響いた。

そちらに眼をやると、女子生徒が立っていた。顔は知らないが胸元のリボンは赤なので、おそらく同学年の二年。

「唯でさえ忙しいこの時期に部室からは抜け出すは締め切りは守らないわ、揚句の果てに校外にまで出て何でお茶飲んでるんですかあ！」

「あーあ、見つかったか」

「“ちゃったか”じゃありませんよ！今日は印刷屋さんに頼んでおいた冊子が届くから絶対に手伝うって言ったじゃないですか！それなのに目を離した隙にいらなくなつて」

「ちゃんと、亜衣がやっておいでくれると思ったから出てきたのよ。それなのに向け出してきて大丈夫？」

「人のせいにししないで下さい、あなたが抜け出すから私が追いかけ

る目に遭うんじゃないですか！もう部室は猫の手も借りたい状態ですよ！！即つつ効で帰ってください」

「はいはい。じゃあ若狭君に月さん今日はありがとうね」

そう言つと足早に立ち去つていく。その後ろ姿を見送つた女子生徒はこちらを振り向き言つた。

「騒がしくして、ごめんなさい。私は文芸部副部長の藤沢亜衣です。まあ、副部长つて言つても仕事の半分はあの人捕獲係ですけど」

「私は二組の淡路月です。あの、捕獲係つて？」

「あの人すぐに糸の着れた凧みたいに飛んでくでしょう？飛んでくならまだしも、所構わず人を巻き込むんだから、まったく」

あながち大袈裟ともいえないため息を漏らし、続けた。

「淡路さんも若狭さんもあの人に巻き込まれたんですね？睦さんにあの人部室に出たつて聞いて追いかけてきたんです」

「あの、何で俺の名前……」

「知つてますよ、若狭君達有名だから。転校生ですつこい美形の二人組みだつて」

そろつて思わず脱力した。

「目立ちたいわけでも……無いんだけどな……」
「同感よ」

第三章 祭 八（後書き）

サイト版からやや書き換えが多い回になりました。といつても間違
い探しレベルですが。

作中でてきた合唱部部长は別の話で主人公予定ですが、またそれは
違う話ということ。 （まだ書いていない話です）

第三章 祭 九

九

教師すらもやる気の無い午前授業をこなし、ゆえはいつのまにか習慣のようになってしまった手芸部の手伝いに向かった。

可愛らしい小物で飾られた引き戸を開けると、柚が『後二日！！がんばろう』と書かれた紙を外し『準備最後の一日、もう間に合わせる事だけ考えろ・・・・』と書かれた紙を、本来の目的で滅多に使われる事が無くなった黒板に貼り付けていた。部室内はなぜかいつも一番始めにいる霜割先輩と柚以外はまだ誰の姿も無く、妙にがらんとした様子をみせている。

「珍しいな」

誰に言うとも無しに呟く。

昨日までのこの部屋は、どこかのバーゲン会場かそれとも祭の餅投げ開催中の神社、もしくは火事でも起きた建物のようなありさまだったのだ。ひっきりなしに声があがり、阿鼻叫喚に近いかもしれない。鬼気迫る表情で針を動かすさまは、手の中で次々と仕上げられていく品々が可愛らしい物ばかりであったため、いっそう異様だった。

しかもそれは、この部室内だけではないのだ。今では学校中が熱に浮かされたような空気に満ちている。

机に突っ伏していた手芸部部长がむくりと起き上がった。

「若狭くん・・・・・・？クラス展示の手伝いはどうしたの」

「展示がバルーンアートなんで飾り付けは明日の朝に決まって、今日は解散になったんです。それで人数が少ないんですか？」

「そうよ。みんな、クラス展示や発表の追い討ちよ。これまで手を抜いていた分のう・め・あ・わ・せ」

しびれた腕をほぐすようにひらひらと動かしながら睦は言った。

「だから、今日はうちの手伝いも良いわ。もともと最後の追い込みに助っ人の子に手伝わせる方が非常識だしね、仕事もないし。若狭君今までありがとう、まだ文化祭当日があるけど」

「だからゆえ、月にも部員はクラスが終ったら残るけど、先輩が二人はいいって言っていた、て伝えてくれる？」

「それぐらいなら、別に」

「ありがと」

疲労困憊と言った風情の二人を残しゆえは部室を後にした。

肩透かしをくらったようでもあり、ほっとしたようでもある。中途半端な気持ちを抱え、来た道である廊下を戻り階段を降りかける。二階から一階に差し掛かる階段で、黒髪の少女と行き会った。

「あれ？どうしたのゆえ。手伝いは」

「準備最終日だからもう良いらしい。あんたにも伝えてくれ頼まれた」

月は先程のゆえと同じく、気の抜けたように何だと呟いた。

「じゃあ午後が丸々開いちゃったわ。それに柚の家に行って絹枝さんに会おうと思ったのに」

「誰だつて？」

「柚のお姉さんよ。今年美容師の専門学校出て今は一人暮らししてるんだけど、ほら明日仮装する時に髪結ったり着付けしなきゃいけないじゃない。頼んで帰って来て貰ったんだって」

「それで？」

「ついでに髪切ってもらおうかと思ってたの。最初に黒服に遭った時、髪切られてそのままだから」

気づかなかったが言われてみれば、少し短くなっているかもしれない。最初に見た時、少女の髪は毛先近くまできっちり編まれていたが、今は三つ編みの部分が短くなっている。それを伝えると、うなずいて月は答えた。

「三つ編みって所々短いと横から髪の毛がはみ出てきて綺麗にできないのよ。ずいぶん伸びたし少しそろえようと思ったんだけど。柚

はすぐに帰るって言ってた？」

「いや、残るような事言っていたぞ」

「なら私も一旦帰ろうかな。柚が家に帰ってから出直せば良いし。ゆえは？どうするの」

「まあ、此処に居てもやることはないし………帰るか」

「じゃあ一緒に帰らない？」

「と言っても方向どこるか家までは同じだけど、と付け足す。わざわざことわらなくても同じ道を行くのだ。ゆえは軽く頷いて同意した。」

「やっぱり、ここの文化祭ってやたらと大掛かりだな」

しばらく歩いた後、ゆえはため息をつくように言い出した。

目線の先では大きな看板を設置しようと二十人あまりの生徒が忙しく動いている。美術部の展示らしく綺麗な模様と字体で『遠江第二中学校 体文祭』と描かれていた。

目を向けた月は同意するように微笑んだ。

「そうね、中学で文化祭があるのもこの辺りじゃ珍しいみたいだし。だから親だけじゃなくて、兄弟姉妹まで見に来るのかしら」

本当のところは兄弟どころか、知り合い総出で来るというのも珍しく無い。知っているかはわからないがゆえは頷いた。

「たしか翔も兄弟が来るって言ってたな」

「ゆえは誰か招待する人いないの？親戚とか」

「無理だろうな………長崎だし。第一明日が文化祭だってこ」とすら言っていない」

「ナガ、サキ？」

月の眼が丸くする。ゆえは、気がついたように口を抑え決まりの悪そうに言い出した。

「俺が九月に転校して来たっていうのは言ったよな」

「うん。柚たちと話してる時に」

「九月の初めまで、父方の叔父の家にやっかいになっていたんだ。そこの中学から転校してきた」

一つ聞いていい、と月は静かに尋ねた。

「変わっているわね、この学校って基本的に他校からの転校生受け入れてないでしょ。高校ならまだしも中学なら公立に通うことも出来るし」

「まあいろいろあつてな」

「言いたくないの」

「いや……別にどうでもいいけど。聞きたいのか？」

「教えてくれるなら。言いたくないなら聞かないわ」

薄墨色の瞳がまっすぐゆえに向けられた。

「誰にでも言いたくない事の一つや二つあるわよ。ただ私は以前のゆえも今のあんたも知ってるから気になるだけ。好奇心に限り無く近い感情でね。だから言いたくないなら言わないで」

ゆえは気づかいに感謝すると同時に、申し訳ないような気がしてきた。

「別にたいした話じゃない。そこまで気を使ってもらう必要ないぞ。春に事故に遭ったのは言ったよな。それで記憶と家族をみんな無くした。三ヶ月入院した後に退院して、それで長崎にいる父方の叔父夫婦に引き取られる事になったんだ。両親とも祖父母はもう亡くなつてたし、母方は中国人だし」

「ちよつとまつて」

突然立ち止つた月に、不思議そうな視線を向けるゆえ。

「どうした」

「いま中国つて言つた、よね？」

「それが……？」

「ということはあんたつてまさか、日中ハーフ!？」

「まさかつて……知らないかつたのか？」

これにはゆえの方も驚いた。

「知り合いだつたんだろ、聞かなかつたのか？」

「知らないわよそんな事!あいつ全然現実の事なんて話さなかつたし、つかその他もろもろ聞いてないことの方が遥かに多いわよ。」

ああ、だから名前が『ゆえ』なの？」

『ゆえ』とは中国語で月の事。

「聞いた話だとそうらしい。……………話し戻すぞ。それで、二ヶ月近く世話になったけど……………何と無くその家にいないほうがいい気がしたんだよ」

「煩わしかった、とか」

「そこまでいうつもりは無い。世話になったのは事実だし、大半が保険金とはいえ仕送りだって毎月貰っているしな。ただ、息苦しかったんだ」

凍りつく会話、ぎこちない気遣い、張り付いた笑み――

「いつも気を使ってたし、使われてたと思う。」

もともと住む場所が離れてたせいもあって、疎遠になってたんだ。俺も十数回しか会ったことが無いらしい、けどなんとか記憶を取り戻させようと、たいして無い思い出話を持ち出したり、学校の事なんかも話したり……………。変な話だけど前の自分と同じに扱われるのがものすごく苦痛だった。

向こうに俺よりひとつ上と下の女の子がいたのも気お使わせた原因だろうな」

「従姉妹、いたのね。それは気を使うわ」

「だろ。それで叔父夫婦説得して、どうしても取りに帰りたいものがあるから夏休みの間だけ帰りたい、って言って京都の家に戻ったんだよ。結局、前いた土地のほうが思い出すきっかけも多いだろうって許してもらえた。」

そこで、始めて遠江の入試受けてたのと、引越しの予定が在ったのがわかった」

「ちょい待ち。何、今引越していった？」

「ああ」

「あいつって……………この町に越してくる予定だったの？」

「正確には隣町の東雲市（あづまぐみ）だけど……………本当に何にも聞いてないんだな」

「今更ながら何考えてるのかわかんない奴だったからね。それで？」

「まあそれで、引越し先の家には住まないとしても、学校の方はどうするかという事になって。学校側に事情説明したら『本校の期末テストでこちらの掲示する点数が取れば、入学を認める』っていわれて。駄目元で受けてみたら、受かって。まあ渡に船って奴だな、もともと家は出たかったからそれを理由に一人暮らしを始めたんだよ」

「そう、なんだ。ひとつ聞いていい」

「何だ？」

「人から以前の『ゆえ』の事聞くの、嫌なの？私もさんざん今まで話してたけど、聞いているのが苦痛だったなら、これからはやめるけど」

「そうじゃない。聞くのは別にいいんだ、ただ何て言うのか・・・・一緒にされるのが嫌だった。記憶が無い以上、俺にとっては他人も同然なんだ」

「そう。何か色々聞いて悪かったね」

「だから別にいいって言うてんだろ。あんたはいないのか？招待する奴、あの・・・」

「ああ、明日華さんの事？たぶん来ないでしょ、言つてないし。三日前メール貰ったけどでベトナムにいるって言うてたから。どうせなら私もしょうか、昔話」

帰り道の暇つぶしに、そういつて月は軽く笑い話し出した。

「私はね、遠江の姉妹校の第一女子から転校してきたの。明日華さんが海外転勤で——って話はしたわよね。じよあもつと前つていうと、明日華さんに引き取られる前かしら？」

家族三人暮らしでね。父さんと母さんと近くにおじいさんが住んで、たまに明日華さんが遊びに来てた。私がちょうど八歳の時だったわ、火事が起きたのは」

「・・・火事」

「そう、火事。マンションでね。いまだに放火なのか不審火なのか

わからないらしいわよ、ただ私は旅行に行つてて助かったの」

「旅行？」

「ほらよくあるじゃない。子どもだけ集めて夏ならキャンプ、冬ならスキーとかに連れてつてくれるツアー旅行。それに参加してたのよ」

それで難を逃れたの、渴いた笑いをもらし続ける。その顔はどこか虚ろで、瞳のよぎる色は暗い。

「実をいうと私は両親の死をまじかで見たわけじゃないの、ただ思ひ出すのは――黒」

部屋に壁に箆笥に机に椅子に階段に絨毯に服におもちゃに。

慣れ親しんでいた物達に染み付いていた、焼け焦げた黒色。

「それだけだった。ただ、両親はすぐに部屋から逃げだしたらしく遺体は綺麗だったわ、煙に巻かれてしまったらしいけど。かろうじて形見の品もあったし」

詳細はまた今度にするけど、と言ひ月は叔母に引き取られた後から話し出した。

ゆえは話をわざと飛ばしたような気がしたが、黙って聞いていた。「おじいちゃんと明日華さんと住むようになったから初めて剣道やったのよ、明日華さんにしてみれば私に他のことに対する興味を持つて欲しかったんだろうけど。引越してから近頃の道場に間借りさせて貰つて。また、手合わせしたいな」

最後は独り言だった。

『はい終わり』という言葉で月が締めくくり、ちょうど丘陵荘の近くに来てたためその日はそのまま分かれた。

同日。

宵闇につつまれた廊下の窓の外は、すでに夜となっていることを知らせている。暗さのため鏡のようになったその窓に妙にはしゃい

「それより本当にやるのそんな事。第一月さんの相手ができるような人この学校にいないでしょうが」

「いえ、います。というより明日来るんです。うってつけの人が」

「柚？」

「柚さん？」

同時に響く先輩達の疑問の声。柚は楽しそうにある事を告げた。

「しかも、それを月は知らないんですよ。今から言ったら断わられるでしょうから、黙っておいて驚かせましょう」

とっておきのおもちやを見つけた猫ように、藍の瞳を煌めかせ笑う。

「私も月の勇姿が見たいですしね」

第三章 祭 九（後書き）

これにて学園祭準備編、完。
次回からは学園祭本番です。

しかし『餅投げ会場』という比喻は都会の方々に通じるのか…
持ち投げは戦場です。人がなぎ倒され、子どもは泣き、眼鏡は飛び
ます。

第三章 祭 十

十

「あ、良かった。ゆえ、こっちこっち」

クラス展示を終え部室棟の階段を登り終えると、ゆえは金髪の少女に呼び止められた。

「今この部屋男子立ち入り禁止なの。だから悪いけどこれ男子更衣室で着替えてきてくれる？」

そう言つと、紙袋を手渡される。どうやら手芸部部室内は女子更衣室と化しているらしい。きゃあきゃあという煩いほどの歓声も聞こえている。

「いいけど……着方がわからない」

「大丈夫、大丈夫。一回うちの店に来た時に着たでしょ？それにこれ袴のところにゴム入ってる『なんちゃって袴』だから。もしどうしてもわからなかったら月の携帯に電話してね、じゃ」

そそくさと戸の中に入ってしまう袖を見送り、顔をしかめながらも更衣室に向かった。

更衣室のドアを開けた途端ゆえは硬直し、次いで眩暈に襲われた。ついでに頭痛もした。

どうやら男子が少数の部員はみんな此处に追いやられてきたらしい。けっして広くない部屋に妙な格好をした男子生徒がごろごろしている。

パンダのきぐるみを着ている者。ピエロの扮装をしている者。なぜか女子の、しかも他校の制服を着ている奴。ドアの所ですれ違った奴は、胸にナイフが刺さったゾンビの姿をしていた。

ひっきりなしに眩暈がするのをこらえ開いているロッカーを探す。窓際の端に空きを見つけ、きしむ扉を開けた。

「ゆえ？どうしたお前」

隣から声を掛けられ何気なくそちらを見れば、飛び上がるほど驚いた。視線の先には、頭から足の先まで覆い隠す黒いローブに身を包んだ――

「俺だ、俺。武蔵 翔だ！」

苛立たしげに、フードを外すと、現われたのは、黒髪につり目の見知った顔だった。

「どいつもこいつも。人をバケモノみたいに見るんだからな」

「……紛らわしい格好するんじゃないよ」

「紛らわしい、って何と」

自覚は無かつたらしい。着替えを手にとりながら煩わしげに教える。

「似てるんだよ、あの黒服に」

「ああ、それでか。妙に驚いた顔でじろじろ見られると思った」

納得した顔で頷いている。この時になって、ゆえも所々にビーズの刺繍が入っている事に気がつき、ため息まじりに呟いた。

「よりによつて、この時期にそんな格好する事無いのに」

「そう言ってもなあ。この衣装案ができたの七月だぞ？八月に手芸部に依頼したし。途中で依頼の中止なんてできないしな。だからこつちが真似したんじゃないくて、あの黒服のほうが真似したんだよ。

絶対に後に考えたんだから―― ゆえ、それ袷あわせが違ってるぞ」

「え？」

「それじゃあ、左前になつてゐるだろうが、死装束だろ。右前、つまり右手が入るようになるんだよ」

慌てて直したゆえが不思議そうにたずねた。

「くわしいんだな、着物」

「まあな、来た事は数えるほどしかないけど、来た姿を見るのは多かったからな。今日も着るだろ月」

「らしい。そんなに着てたのか？」

「そ、明日華さんが正月とお盆になるとこつちに帰って来たからな。その時には必ず着てた、つーか着せられてた」

「へえ」

「ところでこれからどうするお前。あそこも今は男子立ち入り禁止だろう？でもうちの部のほうが長いだろうな」

なんせ人数多いからと呟く翔に、ゆえは提案した。

「じゃあ、こつち来るか？禁止が終ってたらの話だけど」

「いいのか？じゃあ月の振袖姿でも見に行きますか」

「似合ってるわね、月ちゃん。着慣れてるし、今は自分で着れる子少ないわよ」

「でも流石に振袖の帯は締めませんが、和服は好きですからね。髪と着付けありがとうございます、絹枝さん」

中から少女の声が響いてくる。先程まで貼られていた『只今、男子立ち入り禁止中。のぞくべからず。のぞいたら……わか
るわね？』と書かれた紙は剥されていた。翔が念のために戸を叩く。

「おい、男子立ち入り禁止終了か？」

「翔？いいよー、みんなもう着替えすんだから」

カチャカチャと鍵の開ける音が鳴り、ドアが開いた。立っていた少女の姿を見、少年二人は目を見張る。

袖が身につけていたのは古風な型の豪華なドレスだったのだ。

山吹色の生地をたつぷりと用いふんわり広がった裾。胴周りはフリルとビーズの刺繍で華やかに彩られ、のど元の凝った首飾りが少女の細い首を覆っている。耳にも髪にも揃いの真鍮色のアンティーク風のアクセサリーをつけ、髪は一部を垂らし結い上げて毛先をくるくると波打たせていた。

その姿はまるで西洋画から抜け出てきたようで。持前の青い瞳

と金髪の髪がこれ以上ないほど引き立っていた。

「どお？英国人って感じじゃない」

「ああ、マリーアントワネットみたいだな」

「……翔、それあんまり良い例じゃないから」

「そうよ、せめてポンパドール夫人とかじゃない？」

「変わらないわよ、月！」

「あんだだってさっき私のこと生き人形だの市松人形だの何だの言っただじゃない」

そう言う月も見事に仮装していた。

いつもはきつちりと三編みにしている髪を背中に流し、両こめかみから細く編んだ三編みをうなじのあたりで結って椿の造花を飾っている。振袖は緋色の地に金銀の蝶が袖と裾のところで舞い踊り、地模様の緻密な銀の帯が粋だった。

いつも以上に凜とした雰囲気をかもしだしている。どうやら黒のコンタクトまではめているらしく、顔見知り程度の人間なら、気づかないかもしれない。

「ゆえ、紹介するわ。こっちは私の姉さんで佐保絹江。絹姉、こっちが前言った若狭ゆえ」

「噂はかねがね。初めまして、ゆえくん」

「どうも」

唐突な紹介に戸惑いながらもゆえはそう返した。

年の頃は二十歳ぐらい。無造作に高いところで結った髪はなぜか若草色をしているが、生えぎは薄茶をしているので、おそらく染めていると思われる。瞳の色は黒だが、顔立ちや肌の白さは柚にそっくりで一目で姉妹だとわかるだろう。

「ゆえくん。そんなところで突っ立ってないで、こっちに来て」

「はい？」

「早く此処に座る！」

いぶかしみながら絹枝に言われたとおり椅子に座る。

「どうしようかしらね、ウイングつけるほど短くはないし。柚、何

か希望はないの」

「何でもいいよ、和風に見えれば」

「じゃあ、ムースで固めて後ろで一つ結びにするわ」

そう言つと喜々として髪をいじりだした。

「観念した方が良くわよ、ゆえ。今日は一日この人達のおもちゃだから」

「・・・・・・何で俺まで」

少女の赤い艶やかな唇が呆れに歪む。

「一人だけ逃げられるわけ、無いでしょ」

口紅までした月を見て、黙った。返答しようが無い。

「これはまた、明日華さんが泣いて喜ぶような格好だな」

翔が感心したように呟いた。

「だからこの色選んだのよ。明日華さん好きだもんね、月に赤い服着せるの」

「特に和服は、だろ？月」

「私個人の好みでは他にも好きな色はあるのだけど・・・・・・何でかしらね、小さい頃から赤い服着せられてた」

「似合うからでしょ？」

柚が自信たつぷりに言い切った。

「あんたが着てて一番似合う色だからでしょうが、気づいてなかったの。むこう（夢想界）でも良く着てるのに気づいてなかったの？」

「そうかしら？でも今日着たって、明日華さん見られないから無意味じゃない」

写真は送るつもりだけど、と苦笑交じりに呟いた月に、妙に嬉しそうな顔で柚は小声で返した。

「さあ、どうなるかしらね？」

月はどういう意味だと問おうとしたが、がらがらと音をたてて戸が開き会話は中断された。戸の向こうから現れたのは霜割先輩だった。

「じゃあ、俺そろそろ戻るわ」

「あ、翔。たしか出番午後でしょ、後で一緒に観て廻らない？もちろん先約なければだけど」

「別に無いぞ、こいつと行く気だったし」

絹江から解放されたゆえを親指で指しながら翔は笑った。

「じゃあ、集会終ったら廊下で待っててよ。私も月と行くからさ」

「ん、じゃあな」

入れ替わりのように近付いてきた睦も翔と同じく黒服だった。だが趣はかなり違う。

「あらあら、若狭君も月さんも似合ってるわね」

「先輩、開会式終ったんですか？」

「ええ、たった今ね。袖も似合ってるじゃない」

「先輩には負けますよ、もう格好良すぎて誰か分からないんじゃないですか？」

「でもこれ、バンパイアから急いで直した服よ？」

上下黒のスーツに黒に深紅で裏打ちしたマント、黒のリボンをネクタイ代わりに締めた姿は、いかにも颯爽としていて女子生徒とは思えぬほど凛々しさだ。

「ちょうど袖と先輩が並ぶと絵になりますね、西洋の美男美女って感じで」

美女は満面の笑みで、美男は少々複雑そうにしながら、ありがとうと答えた。

「さあ、ゲームのルールの最終確認をするわよ。こっちに注目！」

軽く手を叩いて視線を集め、チョークを片手に話しだした。

「タイトルは『WANTED』参加者には受付でこの用紙を渡す事。この時にちゃんと現在時刻を下に書いてね」

ひらひらと振って見せた紙はB5ほどのサイズで、キャラクターのような人物が描かれている。人物達には部員の着ている衣装を簡略化して描いてあった。

「制限時間は二時間。その間に出来るだけ多くの仮装をした部員を見つけ出し、得点を稼ぐ。稼いだ得点によって一等賞から五等賞ま

でのどれかになる。一等は部への無料依頼券など、二等は食堂の食券一週間分など、三等以下は粗品つてとこね。行動範囲は校内、外には出ないこと。見つかったら各自持つている、スタンプを参加者の用紙に押してね、くれぐれも時間を過ぎてる人には押しちゃだめよ！」

一旦言葉を切り、恐ろしいぐらい真剣な口調で言った。

「ここが注意点。というか切実なお願い。良い？特に高得点の人は良く聞いてね。一等から二等までがあんまり沢山いると自腹覚悟になるから。あんまり捕まり過ぎないように。いざとなったらとつとと逃げなさい。」

時間交代で受付をしていくからね。それ以外の人はゲームに参加中でも他の展示物内意かも見に行っても良いから、ただあんまり同じところにいたり、出入りが制限されるような場所には長時間いないこと。トイレとか、使用してない教室とかね。じゃあ、一斑は十時からだからあと十分ね」

胸元から出した懐中時計を覗きこみ、パチンと音を立てて閉じる。「じゃあ、気合入れていきましょう。今まで準備したぶん、大いに楽しんで成功させましょうね！！じゃあ最初受付の人は用紙を持って渡り廊下に移動。それ以外の人は校舎に散つてて。じゃあ、解散」ばたばたと慌しく移動する極彩色の人の中で、三人はゆっくり歩き出した。

「まず何処行くの？」

「演劇行きたい！」

「はいはい。じゃあ、翔の希望が無かったらそこね。ゆえは？どこか行きたい所ある？」

「別に、あんたは？」

「私は特に——」

「あ、袖ちよつと来て」

戸の敷居に足をかけた時、遠くから声を掛けられた。

「何ですか、先輩。あ、じゃあ月達は先行つてて」

「待とうか」

「いいよ、先に行つてて良い席とっておいて」
「了解」

和服姿の二人を見送つて、柚向き直つた。

「で、何ですか？」

「昨日の放課後に言つてた件だけど。一応剣道部に聞いたら十二時から一時までは昼の休憩で開いてるって」

「良かった、十二時ぐらいには来てくれると思うので、良い時間です。ね。宣伝の方は海山先輩が引き受けてくれたし……何とかなりそうです」

「でも良いの？本当に月さん達に言わなくても。前もって言つておいたほうがやっぱり良いだろうし」

「そんな事したら断られちゃいますよ。突然言つたら断りきれないだろうし、あの人の方にはもう了承を得てますから」

自信満々に頷く柚の顔を見て、睦は苦笑を漏らした。

第三章 祭 十（後書き）

とうとう学園祭開始です！

何やら色々たくらみも進行中…ばればれかな？（笑）

第三章 祭 十一

十一

「柚なんだって？」

「何か打ち合せらしいよ。先行って席とっておいてって」

「はいはい」

会話が途切れた時ちょうど校内放送のスピーカーから陽気な木琴の音が聞え、三人は自然と聞く態勢になった。

『さあて、始めました！！第百十七回遠江第二中学校体育文化祭。今年からは後夜祭も催される事となり更に楽しさGrade Up間違い無しですね。まず主要な出し物の発表です。』

体育館の日程は十時から劇部&合唱部のミュージカル『海と陸のはざま』十一時からはブラス&バトンの演目『千夜一夜物語』一時からは日本舞踊同好会&管楽器同好会による演目『調』となっております。』

陽気なというよりは有頂天というべき声がきゃんきゃんと響く。

『校庭では野球部とサッカー部と陸部と迷路部が使用しています。』

何をやっているかは自分で見て確かめてください！！』

「それじゃ放送の意味ないだろ」

ゆえの冷静なツツコミが聞こえるはずもなく、頭の螺子が緩んだような校内放送は更に続く。

『校内にはクラスが各教室で展示やいろいろなゲームやイベントが開催されるので見逃しませんよう！自転車置き場では屋台が多数出店してますんでお昼時にはご利用ください。部活では部室棟の各部室や道端でゲリラ的に活動していると思いますから見てくださいます。え？はいはいわかってますって。失礼しました。もし放送して欲しい内容がありましたら、放送室前のポストに投函してください、部やクラスの宣伝、呼び出し、告白などなど中傷以外なら何でも』

も受け付けますんで！……は？良いじゃないですか、部長。個人的に使ったって、自由日なんだし。それに愛の告白っていかにも青春な感じがして！……はいはいわかりましたわかりましたよ。もういらぬ事は話しませんよ。たびたび失礼致しました。

それでは、みなさん。午後三時の終幕まで力尽きずにがんばりましょう！！！！」

最後にブチッと言うノイズ音を吐き出し、入れ替わるように底抜けに明るい音楽を流しだした。

月が片耳を抑えていた手を外しながら口をひらいた。

「終った、わね」

「そーだな」

ゆえは改めてこの学校のテンションについて行けるかどうか心配になってきた。

パイプ椅子の並べられた体育館には既に多くの生徒がいた。うるさいほどのざわめきが響きわたる体育館は暗幕が張られ窓も閉められており、人の熱気がこもりひどく蒸し暑く和服姿の月とゆえはうんざりと溜め息をつく。三人は出来るだけ窓に近い空いている椅子に腰掛け袖を待った。

「月！良かった見つかって」

「まだ三分くらいはあるわよ。何の話だったの？」

息を整えているドレス姿の友人に、月が多めに貰っておいた冊子を渡してやる。

「受付係の時間変更だつて。一年の子が私と変わって欲しいって言うてきたから。だから十二時からになったわ」

そんな袖の言葉に月は若干の違和感を覚えた。話の筋も通っているしどこにも不自然さは見受けられない——だが、どこか

が妙な気がした。

考え込む月の変わり翔が口を開く。

「じゃあ、午前で見たいの全部回るのか？二時からクラス展示に行かなきゃいけないだろ」

「うん、出来たらそうしたい」

「じゃあ、これみたら次は校庭のストライクアウトに行こうって話してたんだ。その後はどうする？」

「二年五組の映画が見たいな、あのポスターの」

「じゃあそれだな」

劇は中々の出来だった。へたな運動部より厳しいという定評の部だけあって演技もうまく、演出もこっている。特に乱闘シーンでは宙返りなど派手な演技が目を引き観客は歓声を上げていた。

合唱部の合唱も透き通るような女声のハーモニーで間奏を歌挙げ、鳥肌が立つような半音階下降を披露していた。先日会った鈴鹿先輩の声は特に響きが良く高らかにソロパートを歌い上げる。

閉幕を知らせる音楽が響く中、伸びをしてから立ち上がる。

「おもしろかったけど、男女逆転劇って言うからにはあの敵役ってちよつと卑怯じゃなかった？」

「確かに……」

「まあ男勝りな女海賊を男がやってるんじゃない、多少無理がでるのはしかたないと思うけど」

髪こそ長髪の鬘をかぶり薄く化粧もしていたが、話言葉も仕草も素のままだ。

「でも、主人公の方はちゃんと少年に見えたじゃない！」

柚はこの劇がとことん気に入ったらしく、嬉々としてパンフを買っていた。

「確か部長の人がやってたわよね、かつこよかったな」

「でもあれって、噂じゃ男子部員が少ない所為の苦肉の策らしいわよ」

「そうなのか？」

「そうみたい。年々男子部員が少なくなつて、昨年までは台本の方を工夫していたらしいけど今年は思い切つて発想の転換したつて」

「何度そんなに詳しいのよ、柚」

「だつて此処に書いてあるから」

「翔とゆえは？どうだつた今の劇」

「別に……」

「まあ、ぼちぼち」

「反応薄いわね、あんた達」

呆れたように月が言つたのを見て翔は苦笑した。

「しかたないだろ、かなり女子向けの話じゃなかったか、あれ」

「そう？友情ものだから男子も面白がつてみると思つたけど。アクションシーン多かつたし」

「だとしても俺の趣味じゃないな。どつちかつて言つとSFか時代劇系の話のほうが好きだ」

「けど――」

突然、月は話も忘れてぽかんと前方を見つめた。つられて同じ方を見たゆえも同様に。

体育館から渡り廊下を横切り、校庭へと抜ける中庭の道はまるで縁日のような有様だつたのだ。

目抜き通りとかした中庭には、少なく見積もつても三十ほどの部活が店などを開いている。屋台のような立派な店舗のような物を持つ部とただ地面に商品を並べただけという大差はかなりあるが、そのありさまはゲリラ的に活動――と言つた放送の内容も頷けるようだ。

文芸部が作品集を売る声が響き、超上現象同好会が路上に見るからに怪しげな品物を並べて売りつけている。手品部が空き缶の前でランプを操る横では、英語部が和訳した雑誌をせつせと並べている。

熱に浮かされたような独特の空気が一人一人を伝染していき、文字通りのお祭り騒ぎだ。歩く生徒も奇抜な格好の者が多く、お祭り

騒ぎに拍車を駆けている。

転校生である二人は感嘆と呆れをないまぜにしたような溜息をもらした。

「前の学校の文化祭は、此処まで派手じゃなかったわよ……………」

「

俺の前の学校なんて、文化祭すらなかったぞ……………」

免疫がある二年目の翔と柚は、その様子に苦笑した。

「まあ、私達も最初の年には驚いたわよね。絹姉から話には聞いてたけどいつも行くのは公開日だったし」

「年々どんどん大規模になってくよな、この学校の体文祭」

「でもまあ、楽しいから良いじゃない！それにこれまで一生懸命準備してきたんだから、楽しまなきゃ損よ。行こう！」

初めて『WANTED』参加者に会ったのは、ちょうど月と翔が野球部主宰の『ストライクアウト&人力バッティング』のゲームに参加していた時だった。振袖姿でバットを振るう月に呆れながらも感心して眺めていた時、声を掛けられた。

「すみません、私達『WANTED』の参加者ですけど」

振り返れば背後には少女が二人立っていた。背の高さや顔立ち、そして私服である事から他校の——恐らく小学生だと思われる。襟首につけたフェルトのブローチを見て柚が笑いかける。

「じゃあ用紙を出してもらえます？スタンプ押すからね。ほら、ゆえも」

まだ一つもスタンプの押されていない用紙を見ながら、柚が気さくに話し掛けた。

「違ってたらごめんね。あなた達小学生かな？」

「そうです。今年小六で来年この遠江中学の入試を受けようと思つて」

「見学に来たんです」

「勉強はちよつと大変かもしれないけどとっても楽しい学校よ。来年会えると良いわね。合格して入学したら手芸部に着てみてね！とっても楽しいから。こんな服だつて作れちゃうのよ」

「はい！」

さり気なく宣伝しながら用紙を返す。

「はいどうぞ、ゲームがんばってね」

「あの、お願いがあるんですが……写真撮ってもらえませんか？」

立ち去ろうとしていた柚は立ち止まり、カメラを受け取ろうと手を伸ばした。

「あの、違うんです。出来たら写真と一緒に写って貰いたいんです！！そっちのお兄さんも一緒に！」

きらきらと目を輝かせた未来の後輩かもしれない二人の頼みに、

ゆえと柚は顔を見合わせて目を丸くした。

月と翔はその話を聞いて大いに笑ったが、途中からはそれもできなくなつた。

後から後から『写真撮らせてください』とか『今度絵のモデルになつてください』『被写体になつてもらえませんか？』などといつてくる者が後を絶たなかつたからだ。

本人達こそ別段意識していなかったが、侍のようなたちの少年と和風美人の少女、フランス人形のような少女に魔法使いのような格好をした少年、という組み合わせは学校中に仮装をした者が溢れかえっている中でも、とてつもなく目立っていたのである。

「私らはテーマパークのマスコットか」

げんなりした顔を隠さずに月がぼやく。

最初こそ愛想よく応じていたものの後になるにつれ柚ですら断る

のも疲れたと言い、こまめに移動する事でこれらの人々から逃れていた。現在いるのは新校舎の一階で、どうやらこのあたりは力の抜けた地味なクラス展示などが多いらしく閑散としている。

「あれだけこれば嫌になるわよね……………ん？あああ！！」

「今度は何だ？」

「ちよつとこれ見てよ！！」

素っ頓狂な声をあげた柚は三人の静止の声を待たずにポスターを引き剥がし、目の前へと突き出した。

「……………これって」

「芸の無い。パクリね」

ポスターは科学部の物、そこに躍る文字は――

「『お化け屋敷』か。最初は此处シャボン玉の実験やるって書いてなかったか？」

「そうよ、私達の出し物案を見て変えてに違いないわ！それになによ。科学部が非科学的な出し物するなんてっ」

「でも良いじゃない。私達もちゃんと出し物決まったんだし、これで科学部に負けないようにって思えるでしょ」

「あたりまえよ！！」

金髪の少女は力いっぱい断言した。

第三章 祭 十一（後書き）

文化祭のテンションを落とさないように書くのが大変でした。
あれですよ、準備の方が盛り上がるというか、力が入るとい
うか。遠江の学園祭は学生時代の自分の「こういう風だったら楽しいのに」
という願望が形にされています。

第三章 祭 十二

十二

一人の女性が遠江中学の校門を見上げていた。

ほっそりとした体格に、グレーのスーツをきっちり着こなしている。黒のサングラスをしているため年の頃はよくわからないが、燃え立つような赤褐色の髪が印象的だ。

どこからどう見ても、中学校に似合わないキャリアウーマン――

――はサングラスを外しながら、誰に言うともなしに呟く。

「懐かしいわね」

そして、カツカツと小気味の良いヒールの足音を響かせて、華やかな音楽の流れる門の奥に進んでいった。

「ねえ、そろそろお腹すかない？」

遊戯同好会主宰のゲーム大会で月はダーツ、翔は将棋、柚はチェス、ゆえはポーカーで勝ち、それぞれ景品を貰い受け――

又は巻き上げて、部員の居心地の悪い視線から逃げるように足早に去った後、柚は旧校舎の時計を指さした。

「もう十一時半だよ、私も翔も午後からは部室にいなきゃいけないし、そろそろお昼にしようよ」

「そうね。たしか校舎裏の自転車置き場で模擬店あったわよね。私におにぎり持ってきたからその模擬店でおかずだけ買う？」

「さすが、月。用意が良いな」

「多分こういう事になるだろうと思ってたのよ。あんた達、お弁当もって来てないでしょ」

「……………まあ、買う気だったし」

「ゆえ、あんたね。一人暮らししてるんだったら、ちよつとでも節約しようと考えなさいよ」

「・・・・・・・・」

「まあまあ、それより早く行こうよ。早く行かなきゃ混んでくるし、無くなっちゃうわよ？」

珍しく柚がとりなすように言い、一行は模擬店街を目指して歩き出す。

お好み焼きや、たこ焼き、フランクフルト、みたらし団子、烏賊焼きなどを大量に買い込み、座る場所を探した。

地面に座り込んでいる生徒も多かったので少年達はそれに習おうとしたが、月と柚の衣装が汚れたらどうするの、という意見でビールケースで簡単に作られた椅子と机を陣取った。味付けは素人がやるので大雑把だがこういう時はそれも気にならない。

それぞれ思い思いにぱくついたら後、独り事のようにゆえが呟いた。

「何でこんなに一生懸命になれるんだろうな・・・・・・・・」

「ん？何が」

「いや・・・・・・・・だから、体文祭。こんなに色々準備したって、たった三日で終わりだろう？だったらその日だけ楽しめるように、もつと簡単で良いはずなのに、全員が異様に凝って色々作るだろ。それが何でか理解できなくて」

今回の黒服騒ぎといい、どうしてそんなに力が入られる、とゆえは続けた。

「お前な・・・・・・・・そう言う事は思っても言わないんだよ」

「なぜ？」

「虚しくなるだろうが」

真顔で翔が言うのを納得できない風情でゆえは聞いていた。それを見て、柚が明るく言い放つ。

「変なところで真面目だね、ゆえも。そんなこと考えたって無駄よ。ようはどれだけ本人が楽しむかにかかっているんじゃない？面倒だとおもえば手はいくらでも抜ける。けどそれじゃあ達成観得られない。だから私は一生懸命やった方が楽しいと思うからがんばる。それだけよ」

「そんなもんなのか・・・？」

「そうよ」

「そうよね」

三人分の視線に月は暖かく笑い返す。

「ゆえの言う事も、柚の言う事も、翔の言う事も。みんな真実だと思う。真面目に考えればこんな三日だけの馬鹿騒ぎに時間をかけるのはおかしい、翔の言うように気づけば虚しくなるしね。でもさ、これから何十年も生きていくうちに、こんな無駄で馬鹿馬鹿しい時間が過ごせる時期も、きつともう無いんだよ。気持ち的に出来ないと思う。」

時間をかけて気づいた砂の楼閣を一気に崩しても笑い会えるような気持ちの時期ってさ。一生の宝物になると思うよ、心のね。だから体文祭ってずっと無くならないんじゃない？」

すとなんとか心が心の中に納まったようだ。

文化祭という特別な空気の中で、思っても見なかった本音が出る事がある。普段は意識しないような、微妙なしこり。それが綺麗に片づいた気がした。

四人の顔に微笑が広がる。冷涼とした雰囲気がなんとも心地良かった

「月もね、そんなかつこいい事いう時にみたらし団子持ってっんだから。さまにならないわよ」

「烏賊焼きもってる奴にだけは言われたくないわね」

「どっちもどっち」

「何か言った？ゆえ」

少女二人の声が重なった。翔が腹を抱えて笑っているのを柚が睨

みつける。

「で、話し変わるけど、午後からどうするの？翔は部室で開業ですよ」

「ああ、三時までずつとな。なんせ目玉商品だから」

「……自分で言うか」

「あ、まだうたがってんな。よし、何か占うから言ってみるよ」

懐から札の束を取り出し並べ出す、今日は鮮やかな緋色を宿していた。

「月達は、どこ行くの」

「んー、此処でできるだけ時間潰したいけど。でももう少ししたら人が集まってくるわよね」

「たぶんね。午後で交代になった子とかがお昼食べに来るんじゃない？」

「じゃあ、校舎の一年の出し物見て廻るわ」

他だいたい廻ったし、と言う月にわからぬよう柚はガッツポーズをした。

「じゃあ、三階付近ね」

「たぶんそうなるよ——あんだ達なにやってんの」
いいから何か占うから言ってみるとやる気に満ちた顔の少年と、別に興味ないと迷惑そうな顔をしている少年を月は呆れ気味に見比べた。

「だからいいって」

「遠慮すんな。練習だからさ」

「人を練習台に使うな！」

「いいから適当に言えればいいんだよ、適当で」

「んな事言われても……じゃあ、前と一緒に」

「前って黒服関係か？わかった」

札を円状に並べていく、放射線状に——大輪の花弁のよ
うに。一度並べたものを裏返し、繰り返し位置を変える。

「……ん？」

三人が見ているのを退屈に思い始めた頃、突然翔が首をかしげた。

「何で此処にこんな札が」

「何が出たの？」

「こちら側の救いになるきつかけの場所に、こんなのが出た」

持っていた緋色の札が蝶のように裏返された。

「・・・・・・“戦”って読めるけど」

見間違いかと暗に尋ねる月に、翔は真顔で返した。

「心当たり、あるか？」

“あつてたまるか”と言う意味が込められた蹴りが、笑顔と共に入れられる。

「だよな。なんだってこんな物騒なのが“救い”に出るんだか」

ぶつぶつと呟く翔。四人中で誰とも視線を合わせないようとして
いる人物がいる事に、誰も気づかなかった。

納得はいかないといった顔の翔と妙によそよそしい柚と別れ二人
は階段を登る。

「今思っただけだよ」

「ん？何が」

器用に階段を登っていた振袖の少女が振り返る。着崩れを全くせ
ず、自分と同じ速さで登って行くのに内心で感心しながら続けた。

「このゲームって主催者側にとつてかなり楽しめる企画だよな」

「そう言われてみればそうね。他の部なんか自分達の出し物が忙し
くて、他の部なんか見てまわれない場合が多いって言うし」

軽く腕をくみ、細い眉をしかめる。

「このゲームだったら、ルール状常に動き回らないといけないから
自由に見学できるし。でも、まさか故意じゃないわよね」

「そこが俺も聞きたかったんだけど」

踊り場で立ち止り二人は思う。否定できないかもしれない、と。

「でも、この原案出したの私だし、少なくとも初めから狙ってたわけじゃないと思うよ」

「……………あんたが企んでなきゃな」

「あら、どういう意味？」

すつと薄墨色の瞳を細め、こちらに問いかける月。

しまったと思ったときにはもう遅かった。どうやら怒らせてしまったらしい。返事を待つ月に対し、何か言わなければならないと思うが、頭の中は虚しく空回りする。

冷や汗が背中を伝う。

「まあいいわ」

溜め息混じりに呟く。ゆえの硬直した姿を見て、月があっさりと呪縛のような視線を外したのだ。

「ところで、ゆえって何回捕まった？」

突然の話題転換だったが、この際気にならなかった。

「……………四回。六人が、たぶん」

「そんなに？」

不思議そうに問う少女に、いぶかしむゆえ。

「あんただってそのくらいだろ」

「違うわよ。私まだ誰にも捕まってないもの」

思い返してみれば、ゲーム参加者が近付いてきた時、この少女はその場にいなかった気がする。類い稀なる偶然か、もしくは強運か。はたまた本人の能力か。

「そういえば袖も捕まって言ってたわね」

「となると、一回も捕まって無いの、あんただけかもな」

「このまま最後まで逃げ切って見せようか？」

不敵な笑みを浮かべた和風美人が答えた時だった。

「みーっけーたっ！！」

同時に肩から背にかけて軽い衝撃が走る。

視線を後ろに向けると、満面の笑みを浮かべた赤毛の女性が抱きついていった。不審な表情を浮かべていた月の顔がみるみる驚愕に変

化する。

「明日華さん！？な、なんで？」

ゆえは驚いてその快活そうな女性を見つめた。

歳はおそらく三十代後半、身長は女性としては高い部類に入るだろう。赤褐色の髪は短く刈り上げてあり快活さが増して見えた。しかし日焼けしていてもまだ白さの残る肌や、顔の造形などは月との血縁を感じさせる、ただし目は黒い。

名前を呼ばれた女性——明日華は心外そうに姪にあたる少女を睨む。

「あら、私がいちゃいけないの？せーっかく姪っ子の晴れ姿見ようと、遥々ベトナムから駆けつけたのに」

「そう言う事じゃなくて、なんで今日が体文祭の日だって知ってるのよ！？」

「そんな事も聞かなきゃわからない？教えてもらったのよ」

「明日華さん………柚ね。ちよつと柚、どういう事よ」

背後から現われた部屋に戻ったはずの笑顔の友人を睨みつける。

「悪いわね月。初めから約束してあったの、イベント時や月が病氣した時にか必ず明日華さんに連絡するようにって。海外行く前にね」「うちの薄情な姪っ子はたぶん教えてくれないだろうと思ったからね。ああ、保険掛けておいてよかった」

「言えてる。変なところで律儀と言うか、気を使うし」

「柚、明日華さん！！」

「本当の事でしょうが。じゃあ、早速行こうか。柚、武道場の位置変わってない？」

「あ、待って明日華さん。まだ月には話してないの」

「え、何で？」

「驚かせようと思って」

につこり笑った金髪少女と納得したように頷く赤毛の女性をよそに困惑顔の二人。

「どういう事、何の話よ」

「えーと、あのね月。今から試合をやって欲しいのよ、明日華さんと。もちろん剣道で」

「は………？」

二人分の疑問の声が響くなか、少女は嬉々として続けた。

「だから、剣道の試合をやって欲しいの。武道場で。もう予約してあるから心配しないで」

「ちよつと待つて………」

月は額に手を当てて薄く息を吐いた。

「剣道、ってなんでまたこんな時に？」

「うーん。色々あつて込み入った話しだから話すと長くなるから後じゃダメ？」

「あんだね。頼み事ならあらかじめ言つて、しかも理由を述べるのが礼儀でしょうが。第一、私何の用意もしてないのよ」

「その辺は大丈夫、竹刀も稽古着と袴も二人分持つてきたから」

「明日華さん………」

「お願い月！ちゃんと正当な理由もあるし、人助けだと思つて」
手を合わせている友人を一瞥し、月は溜め息をついた。

「わかつたわよ。だけどこの前の貸はチャラね」

「この前？ああ、チェスで月がボロ負けしたやつ？うん、良いよ」

「じゃあ、さつさと着替えるわよ。この格好」

凜々しい振袖姿の少女は、髪をかき上げながら不機嫌そうに言い放った

第三章 祭 十二（後書き）

やっと出せました明日華さん！！女傑！！男前！！
さすが月の育ての親で、叔母。というお人です。

第三章 祭 十三

十三

紺の袴に白の稽古着。髪はいつものように三つ編みにする時間が無かったため、飾りを外しうなじの辺りでひとつにくくつてある。

そんな凜々しい姿に目を細め、自称探偵部部长は言った。

「良くきてくれたわね、月さん」

言われた少女は心の中で溜め息を漏らした。

（なんでこの人が出てこない時点で不信に思わなかったの、自分）
不信には思っていた。が、確信が持てずにいたため何もしなかったら、こんな事になってしまったのだ。

「剣道部の鹿嶋先生には私から話を通っているから。大丈夫よー」

「そうですか」

そう言われたもののあいさつぐらいいは言おうと武道場を見渡す。
先程まで剣道部がデモンストレーションをしていたためか中二階の観客席には多数の生徒の姿があり、しかもいなくなる気配は無い。

うんざりと視線を一階に戻せば、顧問を発見した。

「鹿嶋先生すみません。急に変な事言い出して――」

そこまで言つて、不審ぎみに先生の顔を覗う。いつもは超然としていて近寄りがたく厳しいと評判の体育教師が、口をぽかんと開け自分の後ろを見つめている。

「明日華、先輩」

「あら、鹿嶋じゃない。元気だった？」

顧問はみるみる顔を高揚させ、嬉しそうに瞳を輝かし興奮気味に話し出した。

「明日華先輩じゃないですか！？いつ日本に帰ってきたんですか？
て言うかなんでここに」

「昨日ベトナムから帰ってきたのよ。此処には月を見にきたの」

「え？じゃあ、淡路って明日華先輩のお子さんですか」

「いいえ、今日華の忘れ形見よ」

「ああ、……すみません」

「気にしないで、もう何年も前の事だし」

一方生徒達は厳しい顧問が少女のように顔を輝かせ、嬉しそうに笑っている光景に驚愕を顔に貼り付けて硬直していた。

「あの先生。この人誰ですか？」

代表して部長が恐る恐るといった風情で尋ねれば、とどこか得意げに顧問は答えた。

「中学と高校の私達の先輩。あの永井姉妹の一人、永井明日華さんよ」

「ええっ!？」

輝きに満ちた顔で明日華に羨望の眼差しを送る部員達。それを見て月と柚は顔を見合わせた。

「そんなに有名だったの、明日華さんって」

「私も聞いた話だけど、高校時代に弱小部だったうちの剣道部で全国まで言ったって剣道部員から聞いたことがあるよ。当時今日華さんと一緒に『遠江の双璧』って言われてたんだって。それで今でも伝説になっているらしいわ」

「何よ、それ」

「だから。全国行って決勝戦で姉妹で戦う事になったとか、そういう逸話が多いのよ。剣道部の伝説って言うか憧れの存在なんだって今でも大会前になると、真剣に二人の写った写真に願かける部員もいるらしい」

「もういいわ」

げんなりした様子の月に心外そうな顔の柚。

「何よ、私の創作じゃないわよ。信じれないなら部員に聞いてみれば良いじゃない」

「そう言うわけじゃないけど。どんどん聞いてるとやる気が抜けてくる気がして」

「無理だと思うよ。明日華さんすつごいのり気じゃない？」
指差した先には育ての親と体育顧問の楽しそうに雑談する姿がある。

「そういうわけで少しだけ場所貸して欲しいのよ、悪いけど」

「いえ、全然気にしないで下さい！むしろうちの部員の目の保養になりますよ。先輩もいつでも遊びに来て下さいね、稽古つけていただきたいぐらいです」

二人を眺め月は大きな溜め息をついた。

そんな姿を見て袖どころかゆえですら月には同情しながらも、好奇心が押さえられない。何と言っても四人の中でも髓一の腕前の人物とその師匠の対戦である。特にゆえは本気になって戦う月を見た事が無かったため、否が応無しに観戦にも力が入る。

防具をつけずに試合をしよう二人に、顧問を含め周りが呆れを通り越し感嘆している中で二人は向き合う。

「いくら抜き打ちだからといって、手加減はしないわよ」

「した事ありますか、私に」

赤毛の女性は確かに、と呟くと凜とした声を響かせた。

「面と突き以外は有効。どれだけ軽くても。これで良い？」

「ええ」

言葉を交わし、二人は立会いの間合いに立った。

提刀の姿勢で立祈、刀を抜くような仕草で竹刀をかざし、踞蹲姿勢の後に構える。月は中段に、明日華は下段に。

同時にざわざわとしていた観客の声が徐々に小さくなっていく。

声を出してはいけないように、ふと口を噤みじつと二人に視線を向ける。

「―――――始め」

最初に動いたのは月だった。

すっと動いたかと思うと、竹刀の先は明日華の籠手を狙って打ち下ろされる。が、明日華はこれを簡単にさばき、月の胴を狙って踏み込む。

床が割れんばかりの踏み込みの音。

竹刀が打ち合う音に、時に鋭い声が混じる。試合は少しづつ、しかし確実に白熱していく。

素人目にはどちらが有利なのか全く判断がつかないが、どちらかが一方的に攻め立てる事はなく激しい攻防が続く。激しく動き回り、時に短くにらみ合っては、破裂音にも似た澄んだ音——竹刀と竹刀を打ち鳴らす音が静かな道場に響きわたる。

「はぁッ」

月の身体が僅かにしずんだように見えた。

片足を踏み出し右胴を狙って竹刀を振り下ろすが、明日華の竹刀に乾いた音が木霊しただけ。隙を与えず、左斜め後ろに身体を引き小手を狙う。

鈍い音がした。

「——まいり、ました」

弾む息の間に月の静かな声が響くと、見物人の間からからは歓声とも悲鳴ともつかない声が上がる。

打たれた右小手を庇いながら足元に転がる竹刀を拾いあげた月は、弾んだ息を整えつつ相手を睨んだ。

「どうして、右胴狙うってわかったの？」

「あんたの癖でしょまだ直ってなかったの。苦しい時にすぐに右胴狙うの止めなさいって言ったのに」

「苦しくなるのが、明日華さん相手の時ぐらいだから成長しないのよ！」

「そんなんじゃないつまでたつてもこれ以上強くないわよ。よかつたら剣道部に入って鹿嶋に鍛えて貰えば」

冗談交じりに言った明日華に、鹿嶋先生はひどく真剣に頷いた。

「是非そうして。淡路なら何時でも大歓迎だから」

ほう、とゆえの口から息が漏れた。夢中になって観ていたため、息を停めていたらしい。

試合を終えた二人のもと行こうとゆえは歩きだした。観客席から階段へ降りよとした所でどん、と衝撃が体に伝わった。肩が触れた程度だが相手がかなりの勢いだったので、よろめく。

「すみませ………」

言い終わる前に立ち去られた。

階段を下る音が響くなか、自分の注意力を叱咤すると共に少々むっとする。ちらりと視界に入った横顔から記憶をめぐる。

(……どこかで見た気がするけど)

「科学部部长？」

名前は出てこないが昨日月達と見た人物。

(何であんなに急いでたんだ?)

この時ゆえは同じ人物を眺め、勝ち誇った顔をした人物が居たことなど知るよしも無かった。

元のスーツ姿に戻った明日華は、思い出したように袖に紙袋を渡した。

「袖、はい。頼まれてたお土産」

「わー、ありがとうございまっす！開けてみても良いですか？」

「ええ、良いわよ。感想聞きたいしね」

袋から出てきたのは木綿地の膝丈チャイナドレスだった。空色の布地には、薄桃色の小花がいくつも刺繍されている。

「本当はサテン地のやつも可愛かったんだけど、それだと普段着れないでしょ？これなら後ろから見たら普通のワンピースと変わらないし、いつでも着れるじゃない」

明日華は満足げに微笑むとくると姪の方へと向き直った。

「あ、もちろんちゃんと月の分もあるから」

「行く前にいいって言ったでしょうが。チャイナドレスなら、もう三着もあるし」

「そう言うと思って今回はアオザイ。サイズあってるといいけど、あんたあれから背伸びた？」

「伸びたよ。どうするの？着られないんじゃない？」

「よかった。袖にサイズ確認しといたのよ」

「いつのまに」

「抜かりはないわよ」

得意げに目を細めて明日華は言う。

「しかし、またあんた腕が落ちたわね。さぼってたでしょ稽古」
妙に子どもっぽく顔を顰め、月は明日華を見上げた。

「仕方ないじゃない。場所無いんだし」

「そりゃあ本格的な稽古は無理だろうけど、基礎的な練習なんかはできるじゃない。持久力も落ちてたし」

見抜かれている——心の中で月は舌打ちを漏らす。

「じゃあこれからランニングでもするわよ」

「そうすることね。娘がこんなに弱くちゃ天国の今日華に会わせる顔が無いわよ。顔はそっくりだっていうのにねえ」

泣き真似をする叔母にうんざりした一瞥を送り、溜め息混じりにこぼす。

「二卵双生児にそっくりといわれても」

「あら、氣づいてなかったの？あんたの面差し、ますます今日華に似てきたじゃない。久ぶりに会ったら、思わずドキッとしたわ」

明日華は軽く月の髪に触れる。

「大きくなって、まあ」

いきなり憂愁の含んだ眼差しをむけられて月は困惑した。いつも元気に飛び回っている叔母がたまにこういう事を言くと、自分はいつも慌ててしまう。

「そついえば明日華さんまだ言ってなかったよね。こいつが前話してた若狭ゆえよ」

「……………はじめまして」

「あら、前居場所がわからなくなっていた、ゆえくん？ペンフレンドの」

(……………?)

疑問の視線を月に向けたが、含みのある一瞥をされただけで反応はない。とりあえず話を合わせる事にする。

「引越したんです。けど、いろいろ家の方でごたごたがあつて、住所伝え忘れていて……………」

「あらそうなの。月が引越す前に大騒ぎしてたのよ、『私まで住所変わっちゃったら、音信不通になる』って」

「そうなんだよね。そうしたら、隣に住んでたんだもの。あの時はびっくりしたわ」

「隣？」

「うん。ゆえも丘陵荘だったの。しかもA―二葵だから横なの」

「へえ」

「ねえ、月」

柚の声が響いた瞬間、月は非情に嫌な予感がした。そのまま全速力で逃げた方がいいと警戒音が鳴る中ちらりと視線を向ければむければ、柚のきらきらと輝く眼上目遣いにぶつかる。

「明日の手芸部の売り子の時って私達着る物無いじゃない。演劇部に衣装は貸し出しちゃうんだし。これ着ようよね!」

柚は空色のチャイナ服を握り締め、一見異性が見たらうつとりするような可愛らしさで力説した。しかし幼馴染の少女には、その瞳が獲物を見つけた猫の目そっくりに映ったという。

第三章 祭 十三（後書き）

剣道シーンは剣道入門書を片手に書きました。本当にやっている人から見たら変かもしれませんが、お目こぼしを！！
明日華さんを相手にすると月が幼くなる、というか年相応になります。

第三章 祭 十四

十四

「で、結局それにしたんだな」

「間違つても着たかつたわけじゃないから」

真つ白なアオザイ姿の月は溜め息を吐いた。

「柚に押しきられたのよ。おまけに明日華さんまで喜んじゃうし」
可愛らしく朱の金魚が泳ぐ裾を持ち上げて眺める。決して趣味の悪い物ではない、むしろ自分好みを熟知している明日華が選んだだけあり好きな柄だ。

しかし生徒の視線を感じるのには閉口した。昨日もそれなりに注目されたが、より多い気がするのだ。まだ部屋に在るといふのに。

試合の時のようにうなじでまとめ、今日はこめかみから少し髪を垂らした頭をいらだちまぎれにがしと掻く。

「そんな風にしたら、髪形崩れるじゃない!!」

直に横から文句が飛んできた。

柚は昨日贈られたチャイナドレスに身を包み、髪を高く二つに結つてまとめて小花の飾りがついたピンといくつも留めている。ふわふわと揺れる花が可愛らしいその姿に、月は殺氣の一步手前ぐらいの視線を投げかけてみた。

「そんな血走つた目しいてたらお客さんが逃げるでしょうが」

「誰のせいよ誰の」

「誰でしょう?」

「わざと言つてる?」

「もちろん、さあ、動かないでよ」

ずれるから、と言いつつパレットのような道具から筆で口紅を掬い取る。月の口元に色をのせ、別の道具を取り出し眼元にも色を挿していく。

「髪は後にすればよかったかもね、やりにくいわ」

「だったらやらなくても良いから」

げんなりとした風情を隠さず呟くがその間にもどんどん顔は整えられていく。仕事で来られなくなつた姉の変わりに今日は柚が化粧係だつた。

「さあ、できあがり」

鏡を手渡し柚は月の顔を覗き込む。

「どう？」

「ちよつと、濃くない？眼元とか」

鏡に映された姿はくつきりと眼元が強調され、いつもより二、三は年上に見える気がする。

「大丈夫大丈夫。お祭なんだし、綺麗よ月」

「どーも」

「ところで明日華さんは、後から来るの？姿が見えないけど」

「帰つたよ」

さらりと言つた。驚きの顔をする少女に苦笑気味の顔を向ける。

「どうやらあの人、同僚の日本への出張奪い取つてきたらしいの。だから日本でも仕事があるから戻らなくちゃいけないんだつて。昨日の内に此処を発つていったわよ」

迷惑かけたくないから知らせなかったのに、と続ける少女を柚は白い目で見ている。

（なんでそこで『無理しても良いぐらい来たかつた』って事に気づかないのかしらね）

普段は無駄に鋭いのにも思いつつ、口には出さないでいた。

「言つても無駄だろうしね。さあ、次の人来て」

化粧の順番待ちをしていた部員のために椅子を立ち、月はゆえと同じように壁に背中を預けた。

「そう言えば昨日聞き忘れていたけど………何で文通してた事になつてゐるんだ？」

一瞬記憶を巡るような目つきになつてから、月は答えた。

「ああ、それね。だって『いつも不思議な夢の中で会ってる仲間』何て紹介できないでしょ。柚と翔は幼馴染だったけど“ゆえ”とは現実では何の接点も無かったし。それに完全に嘘というわけでもないわ。たまにだったけれど手紙をやりとりしてたの。私が送った手紙あったでしょ」

「あんま手紙なんか見てなかったから……」
「どうして」

きょんとした様子の月。ただ疑問に思っているだけだとわかったので、別に大した理由じゃないけど、と言いながら答えた。

「何となく自分が書いたんじゃないのに返事が着ているのが妙な気分がして。あんまり見てて気持ちのいいものじゃなかった」

「そっか」

「興味も無かったしな。叔母さん達は見てほしそうだったけれど」

「悪かったね、変な事訊いて」

「別に……」

いいけど、と続けたゆえの声は手を打ち鳴らす音でかき消された。
「みんなこっち注目ー、一時作業中断して集まって。日程の確認するからー」

今日は何故かサリーを身にまとっている霜割先輩だった。心なしか疲れてぐったりとしているように見える。

「昨日と同じ十時開始。今日は一般日だから『WANTED』は無しね。中庭で作っておいた小物売りをやるわ。完売しだい自由に行動して良いから、始めは全員であたる事！」

部員達から歓声があがる。作業能率と売上もこれで上がるんだろ
うなと、ゆえは頭の端で考えた。

「但しこれから名前を呼ぶ人は別行動。劇部の着付け依頼がきているのでそっちにまわって。柚、菊代、月さんと私ね。あ、ゆえ君も荷物運びとしてこの班と一緒に行って。この班も着付けが終り次第解散予定よ。昨日遊べなかった分、終わりまで自由行動。今までご苦勞様、後少しだからがんばっていきましょう！」

ついでに明日の予定も言つとくわ。午前だけ『WANTED』で正午に一度集合して軽くかたづけしてから解散。知ってると思うけど二時からの後夜祭は自由参加で、手芸部はGブロックが割り当てられてから、特に予定の無い人は是非来て。では行動開始！はりきっていきましょう」

返事の合唱が響き渡り、ばたばたと一斉に移動を開始する。

「じゃあ、劇部へ行く人はこの衣装ケース持っていつてね。一度では運べないと思うから何度か行かなきゃいけないのは申し訳ないけど」

最後の言葉はゆえ一人に向けてだった。目の前に置かれたケースは七個。はおそらく他の者は着付けに行くため、自分一人の仕事になるのだろう。

「大丈夫よ、私も手伝うから」

見透かしたような声がする、月だった。

「袖も着付できるから、帯結ぶ前ぐらいに戻ってこれば大丈夫よ。二人でやれば二回ですむでしょ」

「そうだな」

「本当は一回ですめば言う事無いんだけどね。階段下るのに二個持ちは無理だろうし」

早くも荷物を抱え、歩き出す。慌ててゆえも続いた。だが、戸を開けて部屋をでた所で足をとめてしまう。

「どうかしたのか？」

「あれ、何だと思う」

見ると階段のあたりに人だかりが出来ている。あんなところにかたまっていたら通行の邪魔になるだろうに、とゆえは呆れた。

「ちよつと様子見てくる」

言うが早いか階段の方に足を向け、理由を尋ねに行った。人だかりの中の一人に声を掛けた月の顔は徐々に曇っていく。

「何だつたって？」

「どうやら、踊り場のステンド硝子が割れたらしいわ」

「はあ？」

「また、黒服の所為じゃないかってみんな話してる。とにかく階段は一時封鎖。どうするのかしらね。劇の衣装って早くなきゃいけないんじゃないですか？」

唸ってから、背後にひかえていた霜割先輩はきっぱりと言いつつた。

「しかたないわね。非常階段使いましょ。足場悪いから気をつけないといけないけど」

人だかりは仕方なさそうな表情を浮かべじりじりと散っていった。急がなければ、非常階段の方も混んで来るだろう。部室に戻り先輩がベランダの鍵を開けた。

「念のために鍵閉めていくから先に行つてて」

「はいわかりました！」

ゆえの代わりに月が返す。一行はゆえを先頭にぞろぞろと一列に並び、進んでいく。まだベランダに人影は無かった。

角を曲がり階段を下ろうと足を踏み出す

「ゆえ！」

突然後ろから襟首をつかまれ、後ろに倒れないのが不思議なほどの勢い引き戻された。

文句を言おうと後ろを振り返れば月は前方の一点を凝視している。咳をしながら痛むのどを押さえ視線を向ければ、ちょうど足を踏み出そうとした位置に、キラキラと糸状の物が光を乱反射している物体が見えた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・ピアノ線？」

月が注意深く近付く。覗きこんだ踊り場部分には、糸が下から右の柱を伝い天井にまで伸びて、小さなブリキのバケツに繋がれている。

「なりふり構わなくなっていたわね。古典的と言うか」

ケースを踏み代替わりにして覗いたバケツの中は、油とペンキにまみれた液体が詰まっていた。

「ねえ、そろそろ悔しくない？」

もつどうにかしてくれという表情をありありと浮かべ沈黙する霜割。

「やられっぱなしでさあー」

笑っているのか嘆いているのか珍妙な表情の柚。

「そろそろ打って出ないと女が廃るわよ」

遂に無表情になってしまった月。

「で、反撃開始ね、四人とも」

諦めの表情を二人に向けるゆえ。

演劇部の着付けを終え————きわめて用心しながら——

——逃げ出すように部屋を出た所だった。

最も聞きたくない声が、予想どおりに響いた。

第三章 祭 十四（後書き）

くるー、きつとくるー

物語りも佳境となつてまいりました。『祭』もあと数話です。
よければお付き合ってください。

第三章 祭 十五

十五

姿を見られていないか慎重に後ろを振り返る。人影の無い事を確認し、安堵したようにこそそと歩を進める。

明らかに挙動不審。

そのうえ取り出した黒い布状の物を頭から被り、顔を隠すとなると怪しい人物以外の何ものでもない。

（好き好んでこんな格好してるわけじゃないさ）

不審人物は心の中で呟く、これも部のためだ。暗示のように何度も呟く。

なんとしてもあの部だけは潰さなくては

襲撃返り討ちなどは序の口、次々に第二、三作戦失敗。その原因も全部あの部のせいだ。しかも自身の部とは関係のなんら無い剣道なんてもので目立って、部員を獲得しようとした。

（断じて許せない）

忌々しい事に評判も注目度も上々。やつあたりとも思える理論を次々に展開させていくが、頭の中なので諫める者もない。月が聞いたら鼻先で冷笑しそうな言葉次々に吐いていく。

夢中になりすぎて携帯の着信にも気づかなかったほどの熱中ぶりだった。

「見つかったか？」

『はい、二人です。二年の金髪の子と転校生の茶髪の子』

「は、男子？！女子いなかったのか！！」

『仕方ないですよ！もう後夜祭寸前でほとんどの生徒外に出てるんですから！！』

倍くらいの勢いで言い返され、流石に少し黙る。

「わかった。俺が男子の方に行く。今何処だ？」

『渡り廊下です……新校舎の方に歩いて行つて……』
・本当にやる———」

つまらない事を言い出したので相手に断らず会話を打ち切る。軽く目をつぶり深呼吸を繰り返した後、目を見開いて剣道部から盗んできた竹刀を握り締めた。

「よし」

気合をいれ、新校舎に向けて足を向ける。階段を静かに下り、角を曲がる。

袴姿の少年の後ろ姿。

ゆっくりと歩いていく少年に出来るだけ音を立てずに駆け寄り、竹刀を振りかぶり———

手に痺れを感じた。

何と少年は振り返ると同時に腰の刀を抜き放ち、楽々と竹刀と受け止めてみせたのだ。

にやりとした笑いに寒気を覚え、慌てて引こうとした時にはもう遅い。

次々と襲ってくる剣戟。受けるどころか目ですら追えず、あっという間に竹刀を遠くに飛ばされる。ぺたんと尻餅を着いた時点である事に気づいた。

「あッ」

声が続かない。

「やっと気づきましたか？」

呆れを含んだ声色は、男子として高すぎる音程で。

被り物を脱ぐような仕草で外した茶髪のウイングの下は艶やかな黒髪で。

整った白皙の顔に煌めく眼は薄墨色で。

「私ですよ市川先輩。淡路月です」

剣先で黒衣の覆いを外され、顔を顕わにされる。

横からいつの間にかビデオカメラを片手に現われたのは文芸部部长、海山遊衣。

何故か金髪でチャイナ服を身につけ縛り上げた後輩を転がしながら現われたのは手芸部部长、霜割睦。

後ろから本物の佐保柚と若狭ゆえを含めた他の部員も出てきた。無意識に横に這って逃げようとした所、耳元に響いた鋭い打撃音。すなわち月が手にした刀を無造作に壁へと突き刺した音。

「多分昨日見ていただいたと思いますが、私剣道やっていまして。ついでに居合道もやっているんですよ」

「じゅ、銃刀法違反だ……真剣なはず無いろう……」

途端に綺麗に微笑した眼で見下ろされた。

「だから、遺法じゃないですよ。許可とってありますから。居合道やっているって言ったでしょう？」

上機嫌そうに言い放つ。先程から良いとはいえなかった顔色を紙のように白くし、硬直する市川に向けて宣言する。

「真実を、話していただけますね？」

微笑を消した月の顔は、素人にもはつきりわかるほど殺気がかっていた。

校舎の屋上では生徒会長と副会長による『ドツキ漫才』が繰り広げられている。聞いた話では恒例行事と化しているらしい。先程から同情混じりの失笑を盛んにかつている。

その後方では他の生徒会メンバーと十露盤同好会による有志の団体が、死に物狂いで投票結果を集計し表に書き込んでいた。何でも代々会長と副会長には集計が終るまで全校生徒を盛り上げなくては

ならないとという、体験者達曰く『非常に過酷な使命』があるらしい。

終了を知らせる花火が上がったのを安堵の表情で見送った二人は、改めてマイクを片手に握り締めた。

「それでは、只今より体文祭結果発表をおこないます！！」

悲鳴に似た歓声が上がる。自由参加にもかかわらず、校庭には開会式とは比べ物にならないほど人数が集まっていた。少なくとも他校の生徒もいるため全校生徒より大いに違いはない。

「集計ー、お願いします！！」

声とともに屋上から吊るされ紙がゆつくりと広げられてゆく。

「終ったわね」

「やつとな」

月とゆえはほぼ同時に呟いた。遅れて校庭に出たため、人込みから離れた並木の下に立ったまま喜びの声をあげている友人らの姿を見ている。

遅れた原因は『やられっぱなしは嫌だから反撃作戦！by探偵部部長』こと、変装しての逆奇襲を終らせた所ですでに後夜祭の開始時刻だったので、霜割先輩を含めた他の部員は先に外に出たらどうかと勧め、その後改めて教師を呼んだためだ。

教師達の来る前に自白させた動機は、想像どうり部活を盛り上げようとした事に在ったらしい。まだ正式な処分は決まらないが、当分停学に処せられるとこっそり教えてもらった。

順位の結果は鍛えた月の目で見たところによるとそれぞれ、文芸部は十二位、手芸部は八位、占い同好会は七位という結果。特に手芸部では例年三十番台が続いていたそうなので、喜びは一押しだろう。

続いて行われる個別表彰で再び名前を呼ばれ、手芸部部长が前に

出て行く。

「あー、中身の濃い九日間だったわね」

“暑い” “目立つ” との理由から羽織を脱いだ月がしみじみとも洩らした。

「あらゆる意味でな」

「まさに怒涛の文化祭よね」

「そういえば、昨日の試合をやった意味って結局なんだったんだ？」

「ああ、それね」

懷から出した扇子で風を送りながら溜め息をつく。

「今日犯人を返り討ちにするためだったらしいわよ。私が剣道で強いつてことがわかれば、白状しやすくなると思ったんだって」

「・・・・・・・・」

「何か他にも意味含んでるように思えるんだけどね」

遠くに見える先輩は『凝り過ぎで賞』『目立っていたで賞』という、意味の掴みにくい賞のトロフィーを笑顔で受け取り掲げていた。
「最初から真剣で脅して自白させるのも予定だったのか・・・・・・・・」

「

悪趣味にも程がある、ビデオにまで撮ってと呟くと、月はいつもの口調でさらりと言い放った。

「違うわよ」

「は？」

「だから、あれ真剣じゃないわよ。普通に売ってる唯の模造刀。いくら許可とっていても試合以外で人に刀向けたらその時点で犯罪成立じゃない」

あの心臓に悪い出来事は狂言だったのか、と本格的に脱力した。

「月、ゆえー!!」

柚が人垣を掻き分け、月に飛び掛るように抱きつく。

「霜割先輩が後夜祭の後に夕飯のごおつてくれるって！手伝いのお礼に！！お好み焼き！！部費で！！」

「はいはい。落ち着きなさいよ、柚」

二人ともぐいぐい引つ張られ、人込みへと連れ込まれる。

「ゆえ！確かにいろいろ大変だったし、とんでもない事も多かったけどさ」

耳の近くで笑いを含んだ声で問われる。

「心には残る文化祭だとは思わない？」

「まあな」

ゆえは苦笑気味に答えた。

第三章 『祭』 疾風怒涛の文化祭 終

第三章 祭 十五（後書き）

これにて学園祭編終了です。

本編とはあまり関係のない章ですが楽しんで書けました。

今後は、本編と平行して閑章もアップしていこうと思います。

第四章 旅 一

第四章 旅 宝玉への手がかり

—

「そろそろ、次の町に行かない？」

月がそんな事を言い出したのは、ゆえが夢想界に初めて（もどつて）来てから一回目の満月が訪れ様としている頃だった。

「此処に来てから二月以上経つし、ゆえにも又会えたいし最近天気も良いし。ちょうど旅立ちの頃合いじゃない？」

数日後、すっかり旅支度を整えた四人組が分厚い石造りの城門をくぐっていた。

「やっぱいいねー。旅立ちの日が晴れていうのは」

月は、大荷物を持っているとは思えないほど軽々と動き、笑いながら言う。

「この前は晴れたと思ったら次の日で土砂降りになっただけだね」

柚は、誰よりも衣服の多い自分の鞆を肩に掛けながら、さらりと言う。

「不吉な事言ふなよ……」

ゆえは、記憶的には初めての旅で少々不安な暗い表情みせながら、ぼそりと言う。

「まあ、俺の占いがはずれる事はよっぽどの事じゃない限り無いけどな」

翔は太陽に向けた目を眩しそうに細めながら自信ありげに言いきった。

次の国は翔の占いによって決められた。

翔は占いという少年にしては一風変わった趣味の持ち主だ。一部では有名な占い師であった祖父の影響らしい。昔はこの事をよくからかわれていた時もあつたらしいが、めげずに学校で占い研究部にも所属している。

代々受け継がれているらしい札を用いて行う占いは、これが結構当たる。今回の占いで引いた札には、方角は『東』。鍵となる言葉は『大』『都』『書』と出た。

「東っていうと、今まで進んできた所と逆よね。地図が途中までしかないからわかんないよ?」

柚がばさばさと音をたてて羊皮紙の地図をと広げる。

「此処の前にいたのが、宝石と細工の国スリジットだったから・・・うん。やっぱりこの地図にはオリイコフより東の街は描いてないわ。月、どうする?」

「そうね。翔、今の所持金いくらだっけ?」

「現金は金貨六枚に銀貨三十とちよつと、だけどスリジットで買った装飾品売れば当面の旅費ぐらいにはなると思うぞ」

「今すぐ稼ぐ必要はないって訳ね。じゃあ、これから準備しだして五日後に出発目標。役割分担決めようか。買い出し組みと売り出し組みでいいかしら、二と二で別られるし」

「どうやってわかるの、また翔の札引いて決める?」

「それでも良いけど・・・あ、そう言えば、ゆえって夢境界来た時丸腰だったよね」

「そうだけど?」

そう言った途端、柚と翔が目を見はって叫んだ。

「嘘でしょ!?!」

「本当か!?!」

「どうした?なんか不都合でもあるのか?」

「いや、全然なんだけど・・・よく無事だったね」

「は?」

「此処までの道のりって結構危険で治安が悪くてさ、それに前のゆ

えだつたら武器手放すなんて考えられなかったから驚いただけよ」

「だな。俺らの中で月と一緒に攻撃専門だった奴だからな」

「悪かったわね、攻撃専門で」

月は冷やかな眼を翔と柚に向けながらわざとらしく微笑んだ。

「酔っ払い相手に三対一であっさり勝つ奴と、非戦闘員に見せかけて奇襲する奴のほうがよくばど危険だと私は思いま・す・が・ねえ、お二人さん」

「……さあ、早くしないと日が暮れちゃう。すぐに混んでくるだろうから早く行こつか、翔」

「そ、そうだな。じゃあ俺達で換金行行って来るから、お前らは武器と地図だけは買ってこいよ、じゃあ」

故意に聞かなかつた事にしたらしい。慌しく出て行つた。

「まあ、武器無いと困るのも事実だし。私らも行こつか」

「武器つてさ、もちろん俺が持つんだよな」

「護身用だとも思つとけば良いのよ、重たいお守りぐらいの気持ちで。東の方なら治安も良いって噂だけど、国の外に出たらそれなりに危険だからね」

「持つていても、使いこなせるかどうか自身なんて無いけど」

「まだ五日あるのよ？それまでに憶えれば良いのよ。それにたぶん」

「たぶん？」

「体が覚えていると思うよ？戦い方なんて」

につこりと笑いながら言つた。

「こつちの店にも大体は入つたけど、武器屋は初めてだな」

ゆえは看板を見上げながら呟いた。相変らず幾何学模様には見えない文字——こちらの共通用語でルーク文字と言う——

——は三人に教えてもらったおかげで簡単な単語なら読み書き出来るようになっていた。

「私も此処は初めてよ」

月が店を見上げるように目を細める。

「露天で買うとほとんど博打みたいだからね。良い物もあるけど、悪いものとはことん悪いから。一見ただけじゃ見分けも付けづらいし。多少値は張ってもこういう店のほうが良い物が置いてある事が多いのよ。とりあえず、中に入ろう」

そう言われても何と無く妖しげなこの店に入るのは気が退けた。窓はすべて鎧戸が閉められており、わずかに開いた扉から覗く店内は薄暗く不気味だ。周りの露店が活気にあふれているのでよけいに異質さが際だっていた。

躊躇せずに入って行く少女に続いて、緊張ぎみに足を踏み入れる。

「——いらっしやい」

店の奥から声が響く。現れたのは灰色がかった髪をし、落ち窪んだ眼をした男だった。頬には引き皷れたような傷跡がある。

「店主、研ぎと武器を頼みたいの。武器の方はまだ決めてないから、自由に見ても良いかしら？」

寸分のためらいもなく月は言い放つ。店主と呼びかけられた男は軽く目を見開いた。

「お嬢ちゃんが持つのかね、得物を？」

「私はもう持つているわ、連れの剣が折れたからあつらえに来たのよ」

鞘から小振りの刀を出し台に置く。見るとそれはいつも月が腰に帯びている刀と同じ掬えの物だった。銀の地に蔦を絡めた模様が薄暗い室内ではのかに光を反射する。

「これを先に研いでもらえる？」

店主は黙って鞘から刀を抜いた。現われた白刃の煌めきを放つ刀身を眺め、ちらつと感心したように笑った。

「東極刀とうきょくとうかね、これは」

「そつよ、研げる？」

「さあなあ、なにせ船を下りてから見た事すらなかったもんだから

な。お嬢ちゃんは東の民かい」

「生まれはね。他は転々としていたから」

「ほう、旅人かい。若いのに。つっても俺もそのくらいにはもう船に乗っていたがな。半刻ほど待ちな。一応研いでは見るが、使い物にならなくなったら勘弁してくれよ」

「さあ、どうしようかしら」

薄く笑う月に店主は眼を見張る。瞳におもしろがるような光が走った。

「おお、怖い怖い。最近の若いのはどうも血の気が多くて仕方ねえ。でもあんたはいいな。度胸が据わってる女ってのは見てるだけで楽しいもんだからな」

そう言い残し店の奥に引っ込んで行く。

「勝手に見せてもらうわよ！」

好きにしないと、奥から太い声が響いた。

「じゃあ、ゆえの剣も選びますか」

「なあ、トウキョクトウって何の事だ？」

「日本刀の事よ、ああいう刃の剣の事をこっちでは東極刀と呼ぶの。極東刀きょくとうって呼ぶ人もいる」

「………珍しいのか」

「此処でなら珍しいわね。生産地の東極諸島は文字通り東の端だから、かなりの距離が離れているし。小さな島でしか作れないから稀少品だし、その分値もはるわ」

「島？って言う事は………」

驚き問い掛けるゆえの言葉に月は頷く事で答えた。

「そう、日本と似ているでしょ。どうやら現実と夢想では所々偶然とは思えないほど似かよっているところがあってね。まるで、つながっているみたいに。たまにこうした共通点が見つかるの、おもしろいでしょ」

まあ、おいおい話していくからまずは目的を果たさないと、そう言っただけに陳列されてある武器をぐるりと見渡した少女は小首を

傾げた。

「これだけあると、逆に探しにくいかしら」

月がそう口にするのも無理はなかった。

店内には床にも壁にも、古今東西あらゆる武器が所狭しと並べられていたのだ。盾、斧、鉞、大刀、鎖鎌、曲刀、槍、など名前のわかるもの他に、中にはこれが本当に武器なのかと疑いたくなるような奇天烈なものまであった。

「特殊な武器はやめるとしても……何がいい？」

「そんな事言われてもな……」

「そうよね、困るわよね。じゃあこうしない？ 剣か槍なら私達で教えられるからその辺絞ってみていきましょ」

近くに在った空樽から適当に一本剣を引き抜いて、鞘から抜き出す。細い銀の光が暗い店内にきらりと光る。

「これはレイピアみたいね。現実世界で言えば西洋で十六世紀頃に流行ったものよ。刺突を得意とする剣でフェンシングのもとになったといわれているわ。持ってみる？」

手渡された剣と手にとって眺める。手にかぶさるような装飾があり、持つのに邪魔だった。軽く振るだけで剣先が大きくしなう。

「ちよつとこれは……」

「そう、じゃあ次ね」

月はさしてこたわらず、次の剣を手にとった。二本目に引き抜いたのは刀身が波型をしている剣だった。月は一見するなり眉をひそめた。

「これフランベルジェよ。物騒な剣ね」

「物騒？ どこが」

地を這う蛇を真似たような刀身は、物騒どころか実用性さえあると思えないのだが、月は突きの動作をしながらさりと述べた。

「これで傷をつけると傷口が広がり悲惨になるのよ。しかも切口がめちやくちやになるから縫合もしにくくて、急所を外し刺しても、例えば腕なんかを狙っても確実に使い物にならなくなる。あんまり

お勧め出来ないシロモノ」

ゆえが選ばなかったのは言うまでも無い。

(・・・・・・誰がそんな物騒なもの持つか)

月も領き次の物を選び始める。

「たぶんこれはチンクエディア。あんまり詳しくないけど、確か背に背負う短剣だったと思う」

渡された剣はひどく重かった。

「なあ、もうちょっと応用が利いていて軽い物無いかな」

「大体わかってきたなら自分で選んでみる？その方が確実な気がするわ」

そこで二人で手分けし探し始めることにした。月が見つけた時にはゆえのもとに行き、形状や使い方を説明する。ゆえが見つけた時には月のもとへ行き名前から教えてもらう。

中には月も名前を知らない物もあり、月は袖に来て貰うんだったわね、あの子こういうのも詳しいからと肩をすくめた。

ゆえがそれを見つけたのはちょうど十一本目の剣を樽に戻した所だった。さんざん鉄製の剣を持ち上げたので、右腕が悲鳴を上げそうな有様だ。ふと思った。

(だいたいいつも持ち歩くものなんだから、軽くなきゃいけないじゃないか・・・・・・)

今更それに気がついた自分に舌打ちし、出来るだけ細身の物を探し樽を覗き込んだ。

「ん・・・・・・？」

鮮やかな蒼の房飾りが目を惹く。先には小さな碧の珠玉までついているが、革張りの束に手ずれの跡がある事から実用の品だと知れた。何となく心引かれ、引き抜いて手にとる。

今まで持ったどの剣より軽い。刀身も薄いが軽く振っても最初の

剣のようにしなる事も無かった。

「良いのがあった？」

「ああ、これ。何て名前だろう。持ちやすいんだけど」

近づくにつれ月の眼が点になった。剣とゆえも何度か比べ、笑いを含んだ声で呟く。

「それ、選んだの？」

「・・・・・・なんか問題でもあるのか」

「いいえ、無いわよ何にも——それはね。青竜刀っていうの。いえ、細身だから柳葉刀かしら。普通の中国刀は青竜刀と言っただけ、細身のことを柳葉刀といのよ。それにする？値段によっては無理な時もあるけどね」

「気に入ったものがあつたかね」

振り返ると置くから店主が笑いながら出てきた。

「武器全般に強いようだねお嬢ちゃん。ほら、やってみたよ」

手渡された小さな刀じつと眺め、軽く頷く。

「良い出来だわ、これで安心して愛刀を頼める。最近砥ぎに出せなかったから嬉しい」

「やつぱりな、その腰の物も東極刀かね」

「そう、なかなか上手い砥師に巡り会わなくて・・・・・・気を悪くしたかしら。前に最初からこれを頼んで無茶苦茶にした奴がいたから用心しているのよ」

「いんや、用心は良いことだ。それだけの大物はさすがに一日がかりになるな。明日の昼頃取りに来てくれるかい」

「ええ、わかった。ああ、それとこの柳葉刀は幾ら？」

「いいものを見せてもらったから、銀貨一枚でいいよ」

「本当に!？」

「ああ、べつぴんなお嬢さんだからな」

ありがと、と言いながら月が金を渡しつりを貰った時だった。蹴破るように扉が開き、銅鑼声が響きわたる。顔をしかめて入口を見れば赤ら顔の男が入っくいる。

「おやじ！！頼んどいた、大刀。入ったか」

「雇ぐらい、静かに開けてくれんか、痛むでな。これだろう、金貨三枚だ」

「冗談じゃないぞ！この前あれだけ武器売ってやっтарうが！！得意先にそれだけふっかけるか」

「あんな血糊まみれの中古品何てはした金だ。金一枚で良いからもうこんでくれ」

「店主！！」

「なんだい」

暫くにらみ合いが続く。先に口を開いたのは店主の方だった。

「もう帰ってくれんか。他に客もおるのでな」

ここで初めてゆえ達に気づいたらしい。じろじろと二人を眺め回し、妙な笑を浮かべて言い放つ。

「これが客か、ここは武器商から違うのに商売変えたらしいな。こんな客の寄り付く店なら、オリイコフーの武器商が聞いてあきれる」
「どう思っと思っても構わんよ。こちらのお嬢さんはお前より数段上等な客だ。ほれ、とっとと帰れ」

男達は毒つきながら引手くるように荷物を持っていき、投げ捨てるように金を置いて去っていった。

「すまんね、妙な客で」

「別に気にしていませんよ、都だからこんなものでしょ。それより剣ありがとうございます」

「いいや、じゃあ。明日の昼来てくれ」

「前金は？」

「いらんよ。たぶん払って貰う金よりこれのほうが高いだろう」

「良い人だったわねー、ご店主」

「なあ、これって。本当は幾らぐらいするんだ？」

「私の見立ててでいくと、金貨一枚以上」

この世界存在している貨幣は硬貨のみ。国ごとでそれぞれ鑄造されているが、大国の物であれば近隣国で使用が可能だ。

主な硬貨は金貨、銀貨、銅貨。多少上下はあるものの金貨が一万、銀貨が一千、銅貨が小銭に換算できるらしい。多額の金額を使う時は為替を使用するけど、まず私達みたいな旅人なら使わないと金髪の少女が教えてくれた。

「……………じゃあ、半額で譲ってくれたのか……………」

「だから言っただしよ、親切だって。手入れが綺麗にされているから、本当はもつとしたかもしれない」

「……………明日よくお礼言っところ」

「そうね、じゃあ次は地図だから——本屋ね」

「本屋に売っているのか」

「屋台みたいなのも見てみるつもりだけど、何処にあるかわからないし、正確じゃないから本屋で買ったほうが手っ取り早いのもまあ、道の屋台も見ていく予定だけどね。他にたりないものあったっけ？衣服と食料と石鹸と……………こうなったら表でも作ってもって来るべきだったわ」

月が残念そうに呟いたその時、声をかけてきた者がいた。いぶかしみながら振り返ると、先程店にいた男達が並んでいる。

「どっかで見た顔だと思ったら、さっきのお嬢ちゃんじゃないか」

気味の悪い笑みを浮かべて男達は近付いてきた。

「さっき剣を売ってただろう」

「ゆえ、行こう」

男達の勘違いを訂正しようと口を開きかけたゆえだったが、腕をつかまれつんのめるように歩き始める。無視して歩みを速め人込みに紛れてしまおうというつもりらしいが、周り込まれいつしか男達は囲うように立ちふさがっていた。赤ら顔を更にだらしく緩めた男は一步踏み出しにたにた笑う。

なまりの混じった声で聞き取りづらいが、“ちよっと付き合っ

くれたら綺麗な服を買ってやる”だの“船に乗せてやる”などと喚く男に月是不機嫌な冷たい声で答えた。

「結構です。いいかげんどいてもらえませんか？」

「そういうなよ、そんな細っこい男なんかよりいい男が沢山いるぞ、ん？」

含み笑いを浮かべながら少女の肩に腕をまわそうと腕を伸ばす。

薄墨の眼がずっと細められた。

ゆえが加勢しようとしたが、既に勝負が着いていた。

詳しく言えば肩に腕をのせてきた男の腕を背にひねり上げ蹴り飛ばし、もう一人の男の眉間にどこから出したものか幅広の懐剣を突きつけた。軽く肌に触れたのか、額から一筋の血が伝う。

「別に金に困っているわけでもないし剣を売った訳でもないわ。ついでに言うとこの顔と身体を使って商売してるわけでもないから他あたってくれない？」

すべてにつこり笑顔で言われた言葉である。しかし青筋立てて言われるより遥かに恐い。

ようやく眼の前にいる少女が自分達より遥かに腕の立つ事に気が付いたらしい。真っ青になって後退りし、逃げていく。辺りから少女に向けての歓声と、男達に向けての失笑の聲があがる。

月はこうなったら顔隠した方が良いかしら、と逃げていく男を睨みつけぶつぶつと文句を吐いた。

「服だつて男物着ても意味無いし。何だつてこんな昼間から声かけてくるんだか」

「いつもの事なのか」

あまりにも手馴れた対応だった。懐剣を鞘に戻しながらまあね、と答える。

「あんな奴何処にでもいるのよ。さ、行こう」

颯爽と歩き出す月の姿を見ながらゆえは思う。

涼しげに整った顔立ちにほっそりとした体格。白い顔に零れる艶やかな黒髪は見るものに清冽な印象を与える。多少若すぎる気もす

るがああいうのに目をつけられるも無理は無いだろっな、など考えていると月が訝しげに覗きこんできた。

「どうしたの？ ゆえ」

「いや、別に」

「じゃあさっさと行こうよ。下手に止まると人が寄ってくるよ」

ふと、周りを見渡すと視線が集まっている。話し掛けられそうになり慌てて逃げるように後を追う。

「置いてくよ……地理まだ良くわかってないのに」

「ぼやく暇があつたら通りの名前の一つでも覚えた方がいいんじゃない？」

人並みをすり抜けながらいたずらっぽく笑われる。

「ああ、ここね。柚の言つてた本屋」

立ち止り、見上げた。

「ああ、それなら三軒隣の地図屋に行きな。その方が良いもんそろつてるよ」

恐ろしく本が乱雑に積み上げられた――何しろ軒下まで

も本が天井近くまで積み上げられ、看板が隠れている――

本屋の中に入り、腰を曲げて本の埃を拭っていた恰幅の良い女性に『地図がほしい』と言った返答の言葉だった。

「あたしの妹が嫁いだ店でね、たまには客回してやらなきゃ潰れちまうぐらいの貧相な店だが、信用できる地図が多いね」

「地図つて本屋に売っているんじゃないのか？」

ゆえは困惑気味に月の方に向き直る。

「私も今までは全部本屋が露天で見ていたの、でも流石“港と商”の国ね」

「そう、ここは“港と商の国オリイコフ”。夢想界の市場の源つてね。だから本で用事があれば今度こそうちで頼むよ！」

「親切にどうも、じゃあ」

「いいよ、あんたあのごろつき水夫どもを叩きのめしたんだろう？ あいつらと来たら昼間から酒ばかりくらって、誰彼かまわず声をかける。良い薬になったろうよ」

二人は互いにきょとんした表情で顔を見合わせた。そんな様子に女主人はからからと声をたてて笑う。

「何で知っているんです？今さっきの事なのに」

「あれだけ大きな騒ぎだ。此処の通りのもんは対外知ってるさ！商人つてのはたいがい噂話が好きだからね」

あんたが行けば対外の店は融通利かせてくれるよ、と含み笑いを向けられ月は手で顔を被った。

「目立ちたくなかったのに。失敗したかしら」

「そんな顔しなさんな、せっかくの別嬪がだいなしだ。皆氣のいい奴らだから赦しておやり、ちよつとばかし口は軽いがね。大丈夫さ、地図屋の主人は変わりもんだからまだ噂のうの字も知らないだろうよ」

「その方がかえってありがたいかも」

月はうめくようにそう言い苦笑した。

第四章 旅 一（後書き）

新章連載開始です。長らくご無沙汰だった夢想界編。
やたらとトラブルに巻き込まれる四人の旅立ちをお楽しみください。

第四章 旅 二

二

話のとおり最低限しか話さない無愛想な店主の店から出てくると、影はかなり短くなっていた。

「今は正午ぐらいかしらね」

眼を細め太陽で時を量っていた月が、くるりと振り返る。

「お昼ご飯にしようか。何食べたい？」

「あつさりしたものなら、何でも」

「んー、じゃあ宿の食堂にするか」

近いし、と言いつつもと来た道を歩きだす。

宿の一階に造られた食堂兼酒場は、昼食時だけあつてなかなか繁盛している様子だった。夜とはまた違った種類のざわめきに溢れている店内を進み空席を見つけると、すぐさま店員が寄って来る。海鮮パスタに似た麺類を注文した後、そういえばとゆえが言い出した。「地図買う時、何で前の地図と見比べていたんだ？」

「ああ、それね」

温かな湯気を起てる深皿を受け取りながら答える。

「どれが一番正確に描かれているか見てたの。でたために描かれた地図だと困るでしょ、だから前の地図と同じ場所がどれだけ正しく描かれているかを見てたのよ。ほら」

机に買ったばかりの羊皮紙を広げ、少女は食器の先で一ヶ所を突付けてみせた。

「此処に一つ前に寄った国『スリジット』が載っているでしょ。この地図はスリジットからオリイコフまでの、川や道なんかが一番正しく載っていた。実際に歩いて確かめんだからこれ以上確かな事はないわ。だからこれにしたの」

ゆえは感心しながらも何かが引つ掛かった。

このような知識一つ取つても三人は旅慣れしているのがわかる――

――少々異常なほどに。

「何年ぐらい旅しているんだ？」

唐突な問いかけに月は海老をつつく手を止め考え込んだ。

「今年で四年目、だったかしら。四人で旅しだしたのは」

「で、ずっとあの『宝珠』とかいうのを探している。何でだ？」

不審そうに問うゆえに月は不思議そうな顔で首をかしげた。

「言つてなかったっけ、命の恩人に頼まれたの」

「は………？」

「まあ、詳しくは長くなるからまた今度にするけど、理由はそれよ」

「それだけ………って言つて良いかわからないけど。手掛りも無いのに」

「手掛り、が無いわけじゃないけどね」

ゆえは目線だけで続きを促す。

「宝珠、別名は宝玉とか珠玉とか言われてるわ。天^{てん}球^{きゅう}の――

――こつちで信仰されている神様の持ち物よ」

「は………？つまり」

「そ、実際にあるかどうかさっぱりなの。でも何か理由があつて頼んだと思うし、恩人なわけだし」

それに、と少女はいたずらっぽく微笑んだ。

「私達つて現実では定住してるじゃない、だから夢想界では旅し続けるのもおもしろそうだと思つてね」

旅を住処とし、じゃないけどと謳うように続ける少女に、ゆえは呆れた目線を投げかけた。

「定住していたほうが、安全だろうか」

しばし考えこんでから、月はゆっくりかいぶりをふつた。

「私はそうは思わないわ。定住していたとしても傀儡は来るだろうし、対して危険度は変わらないと思うけど。確かに国の中にいれば傀儡以外の危険は少なくなるだろうけど、人生には適度にスリルがあつたほうが楽しいじゃない」

「俺は、人生は平々凡々ぐらいで丁度いいと思うけど……」
「そんなのつまらないわよ。だいたい定住したりして、傀儡が大量に押し掛けてきたらどうするの。楽しめるどころのスリルじゃないわよ」

想像して、一気に食欲が後退した風情のゆえだった。

「……午後は何するんだ？」

「そうね、買い物は終ったし。翔達はまだ帰って来ていないようだし……あっ」

思い出したように月はぽん、と手を打った。

「……?」

「稽古しなきゃ、稽古。もうすぐ旅立つんだし、武器も手に入っ
し」

「念ため訊くけど、誰に」

薄墨色の瞳を持つ少女は、予想したとおり指先を自分に向けた。

部屋に二人に書置きを残し裏庭に移動した後、月はおもむろに口を開いた。

「本当は中国刀を使う闘い方は、剣を腕の延長みたいにして戦うんだけど、まあ自己流でいいかしら」

低い石塀に腰掛けゆえにも向かいに座るよう促してから口を開いた。

「私の剣は剣道を主にしているの。技の基本は『切落』『袈裟切り』『逆袈裟』『右薙』『左薙』『右切上』『左切上』『切上』『刺突』の九つ」

どこを狙つかをとん、とん、と自らの体の部位を指し示しながら、少女は続ける。

「攻撃、防御ともに統べてこれが基本よ。ただしあくまでこれは基本よ。細かい技は他にも五萬とあるわ。挙げ出すときりがなくくら

いにはね。

例えば、打突動作の中に『左足の引き付け』という技があるの。『打突後にすばやく左足を右足の後ろに引き付けよ』という教えの事よ。ただどね、確かにそのとおりなんだけど……。打突動作では左足の引き付けがとても難しい技術で、それを意識しないと引き付けがうまくいかないことが多い。

でも、そんな時間の掛かる事やっていたらあつという間に敵に倒される。実践には向いていないのよ」

完璧に覚えてしまえば違うかもしれないけどね、と月は肩をすくめた。

「とりあえずあんたに必要なのは敵から実を守る事。もつとざくばらんに言えば、複数の敵に遭遇した時に、私達の誰かが援護に迎えるだけの時間稼ぎをしてくれればいい。付け焼刃でもそのくらいなら短時間で覚えられるわよ」

その根拠は何処から湧いてくるのかは不明だが、月はきっぱりと断言した。

「まず、最初は敵の事をよく見て、動きを見定める事。戦っている奴の動きを見るときは、一点に気をとられては駄目。全体を見るの。川の流れを見る時に浮かんだ木の葉だけを見る？見ないでしょ。石なんかがあると流れが曲がるように、全体を見て流れを読むのと同じ——動きにはどんなに隠していても向かう方向が自然に現われる。攻撃が向かう先が見えるのよね、それが一番の基本。それが出来なきゃ防衛も反撃も出来ないわ」

情報量の多さに混乱する頭でゆえは何とか頷いた。その様子を見透かしたように月は立ち上がった。

「小難しい事はこれで終わり。じゃあ、まず私に斬りかかってみて」
「・・・・・・・・・・は？」

我ながら間抜けな声だと頭のどこかで考えたが、それしか浮かばない。

「は、じゃないわよ。ほら早く。ああ、もちろん鞘から剣抜いてね

「？」

ね、とかいわれても——と言われるままに立ち上がり、ぎくしゃくした動きで鞘から剣を抜き出す。

そこで止まってしまった。

鞘から抜いた剣は、これまで持ったどの刃物よりも澄んだ輝きを放ちながら、切れ味のよさをしきりに訴えかけてくる。

「あのさ、まさかとは思うけど……私に怪我させないか心配しているわけじゃないわよね」

まさにそのとおりだったが、言うのは憚られた。無用の心配なのはゆえにも過去の体験から十分わかつている。だからと言って実際にやるとなつてな話が別だ。

どうにでもなれ、と捨て鉢になりながら剣先を向けた。

数秒後

あっさりかわされただけでなく、脇腹をしたたかに打たれて咳き込み悶絶するゆえがいた。

「脇あますぎ、覇氣足りなさすぎ。これは大仕事ね」

ちよつと待っていて、と涙目の目線を向けるゆえを置いて何処かへと姿を消した。戻ってきた時手には愛刀を持っていたのだが——

「何だそれ」

喋れるぐらいには回復していたので尋ねる。刀には厚手の柔らかそうな布地が幾重にも巻きつけられ、革紐できつく縛り上げられていた。

「即席練習用刀。このまま打っていたらゆえが全身あざだらけになるでしょ。じゃあ、今度は私が打ちかかるから、それをできるだけ多く防いで」

こんな調子で付け焼刃の練習は日暮れまで続いた。

「んで、結果がこれか？」

机に突っ伏したままぴくりとも動かない友人に、同情の視線を送りながら翔は指差す。

「ついつい熱が入っちゃってね」

あははー、と渴いた笑と洩らす月。やりすぎたと自覚はあるらしかった。

「かといって俺が柚が替わりに教えるわけに行かないし。まあ、がんばれよ」

「長剣じゃねー、私達のは特殊武器っぽいし。スパルタ教育だろうけどがんばって」

慰めにすらならない言葉にゆえは、唸るような声で答えた。
そしてふとある事に気がつく。

「……お前らも戦うんだ」

言った途端本日何度目かの呆れた眼差しが振ってきた。柚が口を開く。

「あのさ。いくら私でも今の素人同然のゆえよりはたぶん強いから
そう言えば朝にもそんな様な事を聞いた気がする、とゆえは心中で考えた。」

「良い機会だし、ゆえにも見せたら？翔と柚の武器」

「そうだな」

翔が答え、懷から短刀を取り出した。

「名前は胡蝶刀、よく似たのに子母刀とか牛耳尖刀なんかがある。
これも現実では中国の武器だ、南方系だけだな」

翔が懷から取り出したのは肘の長さほどの片刃の剣だった。昼間月が使っていた物とよく似ていたが、持ち手の部分に取っ手のような細い金属がついている。

「……どこが特殊武器なんだ？」

普通の短剣にしか見えないと続ければ、翔はにやりと笑った。

「そりゃ、鳩が出る仕掛けなんかは無いけど——□で説明するよりやった方が早いな。月」

「ん、わかった」

二人とも立ち上がり、家具の少ない窓辺へと移動していく。二人の行動の意味がさっぱりわからないゆえは眉をひそめた。

「物壊さないでよ二人とも。それからゆえ、早く動いた方がいいよ」さりげなく飲みかけの容器を持ち、壁に凭れた柚が忠告めいた言葉を投稿かけた。いぶかしむ間もなく、移動し終えた月と翔は対峙するように向かい合う。

「……まさか」

「そ。そのまさか」

月が鐔に左手をかけ、右手で白銀の刃を抜き放つ。

「じゃ、いくよ」

「おう」

行動とは裏腹にどこかのんびりとした声。だが次の瞬間部屋に響いたのは澄んだ剣の重なり合う音だった。

硬直するゆえをよそに、月は再び振りかぶった刀を翔にめがけて振り下ろす。手加減無しなどまるで考えさせぬ一撃だったが、翔は先程の短剣をくると手の中で回し、逆手に持ちかえこの一撃を受けとめた。

同時に左手を脇に滑り込ませ、抜き放ったもう一つの刀をびたりと少女の首筋に押し立てた。

「どう、わかった？」

首筋に剣を押し付けられたまま平然と問うてくる月に向かって機械的に頷く。それを見とけるとそれぞれあっさりと剣を引き、鞘に収めた。

「心臓に悪いわー」

柚ののんきなばやし声にゆえは力いっぱい同意したかったが声が出なかった。

「じゃあ、気を取り直して。私のはこれよ」

柚は立ち上がり、片隅の私物がまとめて置いてある区画に歩いていった。ごそごそと袋とある者を取りだし、無造作にゆえに差し出す。慌てて受け取るとゆえはしばし沈黙の後、口を開いた。

「・・・・・・・・棒？」

それは唯の棒にしかみえなかった。

長さは持ち主の身長より僅かに短く、黄味がかった木製の棒はへし折ったモップの柄と言われても納得しただろう。ちらりと見た袋のほうは、美容師や工事現場の作業員が用いるような細長いポケットがいくつも並んでいる変わった物で所々から金属片が覗いている。「当たり。私の基本戦法は棒術なの。でもこうすると」

手にとった棒の先端に、先程の袋から手の平ほどの刃の部分のみという不思議な刃物を取り出し押し当てて。部品のはめられる小気味のいい音が響いた。

「槍になるの。そして」

手品のように今度は反対に三本の鉄棒を組み合わせたような刃物を取り出し、はめ込む。

「三叉戟さんさげきになったりする。名前は万華槍まんかそう、名前のとおり何種類かの武器にする事が出来るのよ」

「・・・・・・・・あんなら本当に一般人か？」

三人は顔をしばし見合わせ、異口同音に言い放つ。

「誰が一般人って言った？」

「・・・・・・・・あつさり言うな・・・・・・・・」

肉体的な疲労の上、精神的な疲労まで増した気がするゆえだった。「今までの戦陣は私が先鋒、ゆえが主力、翔が後手、柚が奇襲だったけど今のゆえにはまだ主力はきついと思う。だから翔を主力にして、ゆえは補佐でどう？」

「良いんじゃないか。指示はどうする、引き続きお前が出すか」

「私も八割方は翔に賛成。でも、月一人で全員に指示出すのは大変じゃないかしら？」

「そうね。ちよっときついかな・・・・・・・・じゃあ、ゆえと翔を一

組と考えて動いて貰ってもいいかしら、それで足りないところがあれば翔が言っていくてのは？」

「……俺にはさっぱりわからないから決めてくれ」

「じゃ、了解ってところで」

「じゃもう夜中だし寝るか、という翔の言葉でその日は現実へ還った（眠る事になった）。

第四章 旅 二（後書き）

ゆえ、翔の武器は実在の武器です。

胡蝶刀は名前が可愛いのでいつか女の子にも持たせたい。けどほぼ徒手空拳と併用になりそうな武器です。刃のついたトンファーみたいな武器。

万華槍は創作武器。薙刀が女子でも挺子の原理を用いて戦力になると聞いたので採用したのですが…戦闘中に刃の付け替えができるのか？という突っ込みはスルーでお願いします。所詮ふぁんたじーさ！！（便利な言葉）

第四章 旅 三

三

「はい、若狭です」

『ゆえ？私、月だけ。あのさ今日柚と一緒に朝市行く事にしたの。だから起きたら私達いないだろうけど、適当に朝ご飯食べて』

「わかった。その事、翔は知っているのか？」

『知らないわ、伝えたいほしいの。後買出し分担したメモを机の上に置いとくから、翔と一緒に買ってきてくれない？』

「わかった」

『ありがと。お金は横の財布の分で足りると思うから。じゃあ後でね』

カチャリと受話器置く音が、静かな部屋に響いた。

「あれ、あいつらは？」

「朝市行く、って現実の方で電話掛かってきた。それよりお前その寝癖どうにかしろ」

欠伸をかみ殺しながら現われた少年にゆえは冷たく言い放つ。言われた方は首をかしげ、自分の頭に触れた。

「そんなにひどいか？」

ゆえは無言で鏡を差し出した。

「……確かにひどい、か。伸びてきたからな」

覗きこんだ先に見えた人物の頭は、重力に逆らったようなありさまだった。

「で、今日どうするんだ？」

頭の上に濡れた布を置きながら尋ねる。

「買出ししといってくれて言ってた。これらしいけど……」
受け取った紙を眺め、翔が露骨に顔をしかめた。

「どうかしたのか？」

「何か、重い物ばっかだな。だから先に出かけたのか？」

「は？」

「だから、俺らが起きてくる前に出かけちまえば文句つけられる心配ないだろ？」

「……はめられた？」

「かもな。まあ、値段が安定してるものばかりだから、もしかしたら違うかもしれないけど。んーでも何か確信犯な気がするなあ」
色々言いたい事はあるが、特に一つの言葉がゆえの頭に引かった。

「……“値段が安定してる”？」

「ああ、袖値切り倒しの名人だから。値切れるのはほとんどの袖が買ってきてんだよ」

「じゃあ、やっぱ気の所為なんじゃないか」

「どーだかなー、まあそれは後で聞くとして。ちょっと湯貰ってるわ、水じゃ全然効果ない」

市場は人だらけだった。

視界を埋め尽くすのは色とりどりの肌や髪で、どこに視線を向けても人間が視界に入らない事はない。唯一の例外である空を見上げゆえは溜め息を吐いた。出かける前にスリも多いから気を付けろ、といわれたが、自分が財布に手を伸ばすのでさえ困難だということにどうしろと言っのたろう。

「次はッ」

耳元で響いた大声に顔をしかめ、下からメモを読み上げる。

「花豆、麺、豆粉、青菜の干し野菜、干飯かれいか餅」

「それも買っただろ」

「豆はまだだぞ」

「今買ったんだ、いーまーっ」

「じゃあ終わりだな。そんなに怒鳴らなくても聞えてる」

「お前よくこの人込みでそんな冷静に喋れるな」

「うらめしそうな顔で見上げてくる翔に、ゆえは眉をひそめ言った。怒鳴ったって変わらないだろう。そんな事に時間かける方がよっぽどイライラする」

「へーへー。買うもん買えたならこの忌々しい人込みさつさと抜けるぞ」

言い終えるよりも早くゆえの腕をつかんで歩き出す。重い荷物と人込みに足を取られゆえはよろめいた。

「自分で歩けるから、腕をつかむなッ」

しばらくは互いに口を利かず足を動かし、市の開かれている広場を抜ける事に専念した。やっとの思いで抜けきった先は港だった。喧騒は先程と大差ないが人の数が圧倒的に少ない。日陰では犬や猫が白い腹を見せているのに混じって、座り込んだ人間の姿もあった。安堵の息を吐き、道の端に荷物を置き同じように地面に腰を降ろす。袋を下げていたため出来た赤い痕の残る手首を擦っていると、横からぬつと手を差し出された。

「ほらよ」

礼を言い、ありがたく差し出された飲み物を受け取る。口をつけるとすつと体温が下がった気がした。氷で冷やすほど冷えてはいないが、薄荷の香りがつけてある。

「これからどうするんだ？」

「そーだな。特に予定も無いけど。どうせだからちよつと遊んでいいかないか？」

笑みを浮かべてそう言うのと翔は対面を指差す。ゆえが視線を向けたそこには、屋台のような店が沢山並んでいた。的屋てきやのたぐいらし

「別にいいだろ？こっちは客なんだしさ。それにしても今日は調子
が良かったらなー、なあ、何に使う？やっぱ食物か、それとも何か
別に欲しい物あるか？」

「別に無い。それにほとんどお前独りで稼いだだろ、好きに使えよ」
「それじゃつまないだろーが、やっぱこういう時は一緒に楽しんで、
一緒に使うのが醍醐味だろ。じゃあ、剣帯でも買つか？持って
無いだ――」

「どうかしたのか？」

急に言葉をきった翔にゆえは眉を潜め目を向ける。

「いや別に。何でも無い」

口ではそう言いつつも、後ろを気にする気配がする。振り返ろう
とするとぐつと服を引っ張られた。

「視線はやるな気づかれる」

「何かつけてきてるのか……？あの、例の奴……
傀儡か？」

「いや、あいつらならこんなに気配は濃くない。どつかの馬鹿だろ
うけど。……まあ、撒くのは無理だろうな」

二人とも地理には乏しい旅人だ。口元に手を当てて考え込んだ後、
翔は路地裏へと入っていく。

「おい……」

「俺に任せとけて。とりあえず俺が言うまで動くなよ」

黙々と薄暗い建物の間の路地を歩む。道幅はそれほど狭くは無い
のだが、建物の高さがあるため狭苦しい。

「おい、ぼうす」

不意に後方から声が響く。痩せ気味の男が壁にもたれるように立
っていた。

「さつきはずーいぶんと稼いでみたいだな、あ？」

顔の造作は悪くは無いのだが、浮かべる表情が台無しにしていた。

「ああ、運がよくって。何か用？」

「ああ、用だとも。その金ちよつと回してもらおうと思ってよ」

こういう馬鹿には何言つても理屈が通ないんだよな、と内心で毒づくが表面上は笑顔で返す。

「へえ。それがこの場所の決まりなのか。初めて聞いたな、そんな話」

言い終わる前に近付いてきた男の腹に強烈な蹴りを入れ、叫んだ。
「走れっ！！」

黙って二人のやり取りを見ていたゆえは弾かれたように走り出した。どこから湧いてきたのか後から怒号のような男達の声が迫ってくる。後から走ってきた翔が、壁に吊ってあった紐を一線で切り放った。

「お前今何したんだ！？」

「いいから走れっつ」

その瞬間、異臭をふりまきながら男達の頭上に降ってきたのは、吊るしてあった雑多なごみだった。

背後からの悲鳴が完全に遠ざかった事を確認してから、二人は走るのを止め汚れた壁を背に座り込んだ。

「おま、え・・・・・・・・こくなるって・・・・・・・・わかって、て射的、やった・・・・・・・・のかよ・・・・・・・・」

「そんなわけないだろ・・・・・・・・あー、やな汗かいたな。もう追って来てないよな」

軽く後ろを振り返って確かめ、大きく息を吐く。

「予想しなかったわけじゃないけど誓って言うぞ、あんな馬鹿共が追って来るのなんて知らなかった。ほんとに治安良くないなこの国。夜出歩かなかったのは正解だな」

「予想できたんなら、次から教えてくれ。頼むから」

第四章 旅 三（後書き）

男達に振ってきたのはきつと生ごみ。
ご愁傷様です。

第四章 旅 四

四

「あ、おかえり」

「おかえりー」

扉を開けると同時に奥から声が響いてくる。

見れば二人の少女は楽しそうに談笑しながら荷作りの真っ最中だった。

「見て見てこの小鍋、革本一冊と交換してくれたのよー。これ今度から薬煎じる専用にするから」

「これからは料理鍋で湿布薬煮てるの止めなくてすむわね」

内容はともかく、ごく普通の年頃の少女達が会話するような明るく楽しげな口調である。だが翔は口を引きつった形に歪め、つかつかと近寄りメモを掲げた。

「柚さーん、このリストってなーんか重い物ばっかな気がするんですねどー、気のせいかな？」

翔の猫なで声にわざとらしく顔を見合わせた二人は、小首を傾げてこちらを向く。いかにも作られた風情の可愛い仕草に、翔は本気で嫌そうな目線を向けた。

「とぼけるなよ無駄だから」

「あ、ばれたの？」

柚は悪びれもせず可愛らしく舌を出してみせる。

少年の一方は一気に脱力した風情になり、もう一方はあからさまにむっとした顔になった。

「ばればれた。それにお前な、ちよつとは旅の事考えて服選んでこいよ。まさかその格好で行くのか？」

翔が言ったその格好とは柚が新しく買ってきて身に付けている服だった。雀色の長袖のシャツの上に萌黄色ストールを重ね、下は膝

丈ほどの鳶色のスカート。靴はくすんだ山吹色をした編み上げの長靴。^{うが}

「うるさいわね、人の好みにけちつけないでよ」

「好みとかの問題じゃない。だいたいなんでそんなひらひらしたスカートなんかで行くんだよ。野宿だつてするかもしれないんだぞ」

「その辺はちゃんと考えてありますよーだ。下に重ね着すればいくらでも工夫できるんだから。だいたい翔こそ人のこと言えた義理じゃないでしょうが、そんなずる長い上着着てさ」

「これは、占いで稼ぐのにはそれ相応の格好をしないと客が集まらないからだろ」

「はっ、大義名分」

「おい、言いすぎだ」

着実に二人の中が険悪になつていくたがいに口を開こうとした絶妙な間に、涼やかな声が割り込んだ。

「二人ともそろそろやめておきなよ。謝るタイミング外すと大変よ」
誰が謝るものかと、異口同音に訴えたが月は故意に無視した。

「私も服買ったのよ、この緋色のズボンもくたびれてきたしね。明日洗って古着屋に売るつもり」

包みを広げ現れたのは分厚い生地をつかった二着のズボンだった。それぞれ若草色と煉瓦色^{れんが}をしており、どちらも緋色の短甲によく似合っていた。

「こつちの方、短甲の飾り石とよく似た翠でしょ、この色だったら短甲の緋にも合うしいと思つて。あわせて靴も変えたわ」

すでに履いている焦茶の編み上げの短靴を指さす。

「翔は今回は服買わないの？」

少年は紫苑色の長い上着と煤色のズボンを一見し、首をすくめた。

「このままで別に不自由じゃないしな。ゆえはどうする？」

「この鞆に何着か着替え入っていたよな」

再会した時に『ゆえの物だ』と渡された荷物を指さす。別れた後も、皆で手分けをして持つてきてくれたらしい。

「だからいい。今着ているのもあるしな」

現在身につけているのは白のシャツの上に裾の短い暖かな夕日色の上着を着込んだものだ。灰黒のズボンはこの町に着てから買った物で、少しも痛んでいない。

「・・・・・・ところで、何か脱線しているような気がするの俺の気のせいかな？」

「ありがとう、ゆえ。今の今までさっぱ脳裏から消えてた。で月、袖」

溜め息をつく月と舌打ちをする袖を睨むように見て、翔はゆっくり言葉を紡いだ。

「なんで黙って先に出てったんだ？」

「わかるでしょう。荷物運びが嫌だったの」

しぶしぶと言った雰囲気で答える月に、翔は不敵な微笑みを浮かべた。

「それにしちゃ、らしくないな。いつものお前だったらそう言う時は下手に誤魔化さずにはつきり言うだろ」

「翔、そんなにかいかぶらないでよ」

「かいかぶってるつもりなんか無い。ただ正当に判断しているだけだ」

しばし無言で見詰め合う。先に視線を逸らしたのは少女の方だった。

「ゆえが気づかなかつたら誤魔化せたのに」

「残念だったな、とつとと話せ」

有無を言わせぬ口調に月は微笑した。

「荷物持ちが嫌だったってのも本音のうちよ。だけどね、妙な胸騒ぎがしたの」

目線だけで二人は続きを促す。

「昨日実は一騒ぎあってね。それならいつもの事だけど町中の噂になつたらしくて・・・・・・どうも嫌な予感がするよ。一番良いのはこの町にいる間できるだけ宿から出ない事なんだろうけど、服買

いたかったし、剣も取りに行きたかったから柚と相談して早くに出かけようって事に決めたの」

「補足させてもらえば朝市に出かけようって言い出したのは私よ。ああいう男の目に触れないように帰ってくるには早朝が一番だと思つたの。思いつきり言い訳だけど最小限の買い物だけしかしなかったわ」

「それならそうと……初めから言えよ」

「どっちにしても二人に買出し押し付けるのは変わりないじゃない。弁解なんてしたくないわ」

「そう言うのは“弁解”じゃなくて“理由”っーんだよ」

翔はがしと頭を掻く。怒り疑った分だけ決まりが悪い。

「で、結局遭遇しないで帰ってこれたのか？」

二人の顔が同時に曇った。

「……遭ったのかよ」

ずるずると背もたれにも垂れながら、やる気のなさそうな声で翔が尋ねた。

「一旦帰ってきてから荷物置いて、もう一回出かけたのが悪かったみたい。柚の本売りに行った帰りにばったり」

「……売ったのか」

ゆえが不思議そうに尋ねた。

佐保柚という少女はなかなか読書家なようで、ゆえが見る限り暇さえあれば書物に向かっていた。集められた本は少女達が使用している部屋だけでなく、居間として用いているこの部屋にまで侵入しうず高く積まれていたものだが、言われて見ればそれらは消えていた。

「本音を言えば手放したくない物ばかりだったんだけどね。まさか持っていくわけには行かないしさ、泣く泣く手放したわ」

本気で落胆したように肩を落とした柚に一同から呆れた眼差しが向けられる。

「で、どういう状況だったんだ？」

「そういえばその話だったわよね」

いつもの事だけど脱線してるわ、と口の中で呟き月は顔をあげた。
「今日は柚の方に声掛けてきたの」

「そう、それで適当に言っている所に月が来てね。大変だったんだから。まったく、逆恨みもいいかげんにしてほしいわよ」

「その後は応戦そして逃走か。参考までにその男の顔ってなかなか造作はいいのに食生活疑えるような隈がある若い男か？」

「妙に具体的ね。もしかしてそっちも何かあった？」

同時に深く頷くゆえと翔。翔が市での出来事をかいつまんで話した後、月は顔をしかめた。

「こんなに重なるなんて。治安悪いだけじゃないのかしら。翔、占やってみてくれる？」

「そうだな。まだ行き先もはっきり決めてないし、ついでにやつくか」

そう言うつと翔は藤色の札を何処からともなく取り出した。手慣れた様子で並べていくのをゆえは不思議そうに見つめる。

「……昨日も思ったけど何でそれがこっちにあるんだ？」

「作った。あっちのはじい様から受け継いだやつだったけどな。やつぱ慣れた道具が使いやすいし」

答えつつも手は休めない。しばらく手を機械的に動かし続けた後、不意に声を上げた。

「出た」

「で、どうだったの？」

「現状『凶』」

きつぱりと告げられた言葉に三人は何とも形容しにくい表情をなす。

「それって占うまでも無くわかってるでしょ」

不平めいた柚の言葉を見、翔は続けた。

「その後は『悪』『邪』『不』日にちが降るにつれてどんどん悪くなっているな。早いとここの国立ち去った方がよさそうだ。地図は

あるか？」

「ここよ。投げるわよ」

返事を待たずに放物線を描いて投げられたそれを難なく受け止め、折り重なった羊皮紙を開く。独特のインクの匂いが部屋中に広がった。

「『東』っていうと海から離れることになるわよね」

「そうだな。月は東南の方角の街道沿いにある国で書物に関係のある大きな国を探してくれ。東北は俺が見る。見つけられなかったらもう一回占うから」

額を寄せ合うようにしてさまざまな記号が記された地図中を探す二人。読み書きが乏しいゆえはぼんやり見ていることしか出来なかった。柚は二人を手伝おうとはせず、お茶を入れようと立ち上がる。「見つけた。これじゃないかしら『宗教と勉学の国又ワラエリヤ』」
部屋の中の視線が黒髪の少女に集まった。白い人差し指で示された場所と現在地を見比べ、柚は大げさな溜め息をつく。

「えらく遠いわね、これじゃ今までの調子で行けば半年はかかるじゃない」

「そこまではかからないわよ。立ち寄る国での滞在期間を最小限にすれば四ヶ月でつけるわ」

「いや、難しいと思うぞ。此处に山谷地帯があるから、越えるにしても迂回するにしても時間がかかる事に大差ないだろうし」

「でも、行くでしょ？」

薄墨色の瞳が輝き、銀の光を宿す。深い笑みを浮かべて月は確信をこめて言い切った。

「宝珠を見つげるためなら。どれだけ時間と手間がかかって、ね」
「まあそうだけだな。手札は嘘をつかない、それを信じるなら行くしかないな」

「今更だけどとんでもない事引き受けちゃったのね、私達」

散らばった札を集めながらはつきりと言う翔に、肩をすくめて見せる柚。

それを見ていたゆえに、妙な感情が湧いてくる。喪失感にも似た感情が、心の奥底に暗く溜まっていく。

ゆえがそれを疎外感だと理解する前に、月が口を開いた。

「じゃあ行き先も決まったし、出発明日に変更しようか」

出来るだけ早く此処を離れた方がいいんだよね？と同意を求めて翔の方に向き直る。

「そうだな……買出しもあらかたすんだし。残りは出国する前に市に寄ればすむ程度——」

「ちよつと待って！」

おずおずと手をあげ、柚は続けた。

「私の武器、研ぎに出しちゃったの。仕上がりが昼頃だからどう考えても朝一の出発は無理だと思うわ」

「そう言えばそうだったわよね」

月は考え込む風情で黙り込む。しばらくして口を開いた。

「じゃあ、こういうのはどう？宿を引き払った後、柚の武器を引き取りに言ってその足で此処を出るの。そうすれば夕方頃には宿場につけるんじゃないかしら」

「いいんじゃないか？あ、でも昼飯はどうするんだ」

「宿引き払った後に食べれば良いじゃない」

「じゃ、決定だな。明日朝女将に宿引き払うって事伝えて清算。その後は街にでて買い忘れが無いか確かめながら時間をつぶす。で武器屋寄ってから出国。これでいいか？」

ゆえは頷くことで肯定を示した。それを見た月は勢い良く立ち上がる。

「じゃあ、行き先も決まったし。ゆえ、お茶飲み終わったらさっそく稽古ね」

思わず天を仰ぎなくなつたゆえに二人分の声援がかけられた。

第四章 旅 四（後書き）

トラブルは避ける方向で動いてますね。
そう上手くいくかな

そして四人の服装は、絵師のいやあさんに描き下ろして頂いたイラストを描写しました。異世界風でかつけえ！！

・・・・・・URL書こうと思ったたら休止中のいやあさんのサイト載っていたのを思い出しました。自分とこかと思ってたよ。

そのうちうちのサイトでも上げるので、こちらにもURL書きますので。

第五章 旅 五

五

高くそびえる灰色の城門をくぐり終えた一行は真直ぐ伸びる道を歩いていった。

森の中に伸びる道の舗装は国を出るところでぶつとりと途切れてしまい、人々が踏み鳴らした剥き出しの土が延々と続いている。昼中から国を出るものはやはり少ないのか、人通りは絶えてなかった。「……………国を出るのって、思っていたよりずっと簡単なんだな……………」

独り事のようにゆえが呟いた。石造の門はいかにも厳めしく、国の中にいた時はさぞ物々しい警備がなされているだろう、と感じていたが実際はあくびをかみ殺しつつ見張る兵士が二人程いただけだったのだ。

「出るのは入るのよりずっと楽よ。それにあそこはオリイコフだからね」

目線だけで問うと、月は丁寧の説明を始める。

「あそこの国が商業国だって事。商業が発展しているって事は物と同時に人もたくさん集まってくるわ。それを規制したりしたらお金の流れも、物の流れも滞ってしまう。だからあの国は特に出入国の規制が緩やかなのよ」

「へえ」

「それに都を出たといっても此処もまだ国内だからね」

「どう言う事だ？」

「此処もまだオリイコフ内だって事よ。本当の国境線はもう少し先の宿場町なの、はつきりとした境は無いみたいだけどね」

疑問に満ちた眼差しを翔の方に向ける。無言で尋ねる友人に翔は言った。

「おかしな事にさ、この世界の支配者達は土地の支配欲が乏しいみたいなんだ。だから隣国ともほとんどの国々が友好関係を気づいてるらしい。表面上は、だけどな」

「それっておかしい事なのか？」

「少なくとも、現実の方じゃありえないわ」

柚がきっぱりと言い放つ。

「だいたい中世の世の中って言ったら古今東西すべて戦争ばかりのはずなのよ。文化や技術も発して、それに伴って人口が増える。人が増えれば消費される作物だって増えるわ、となれば作物を育てるための土壌が必要になってくる。森や沼地を干拓するより、他人の土地を奪い取った方が手っ取り早い、となれば――」

「戦が始まるのよ」

柚の言葉を受け継いだ月は苦々しい口調で続けた。

「嫌な言い方だけど、それが自然な歴史の流れなのよ。だけど、此処はそう言う動きが限り無く少ないの。――何かに、干渉されているかのように」

ふと、ゆえの脳裏にある情景が浮かび上がった。

苦笑を交えた笑みを浮かべ、彼の人は言葉を紡ぐ。

「――だから、わたくし達は――に干渉する――」

低すぎず、高すぎず、澄んだ音色で発せられる声で。

「まあ、こっちの人はなぜか『戦争は悪だ』って考えているからそのせいかもしれないけど」

「そう考えると仏教的だよね。どうしたの、ゆえ。急に立ち止ったりして」

「・・・・・・え・・・・・・？」

唐突に浮かんだ情景は、しっかりとつかみとる前に溶けるように消えてしまった。残ったのは懐かしさという感情のかすかな残滓の

み。

「……何でも無い」

「どうしたの、立ちくらみでも起こした？」

笑いを含んだ月の声。反論を口のぼらせようと視線を宙から少女へ移す。

「別に——って、お前こそどうしたんだ」

先程まで笑っていた少女の顔は、緊張に強ばっていた。

「何でも無いわ。こんなとこに突っ立ってないで早く行かないと日が暮れるわよ？」

いつものいたずらっぽい口調だが、眼は全く笑っていない。さつさと歩き出してしまった後を追う。

「どうみたって普通じゃないだろ。何でも無い訳が——」
不意に立ち止り、その場にしゃがみこむ。

「どうした？」

「靴紐がほどけたの。少し待って」

月が立ち上がった所で、今度こそ問い詰めようとゆえは口を開こうとする。が、少女の方が早かった。

「つけられているわね」

小さな呟きに反射的に後を振り返りそうになる。両脇から小突かれた。

「いいかげんに慣れろよ。つけられてる時は後ろ向くな」

げんなりした様子の翔に、返す言葉もないゆえだった。

「いつ気がついたの？」

「さつきよ。ゆえが立ち止った時に後ろのやつら私達の事追い抜かしていかなかったから」

「じゃあ靴紐も」

「ええ、ほどけてなんかいなかったわ。試したの。三日連続で尾行されるなんてね」

溜め息混じりの呟き。

「で、心当たりはあるの？」

「わかった」

皆少しずつ、後ろに気取られぬよう気を配りながら戦闘の準備を進めていく。

「あーあ、万華槍を三叉戟さんさげきにしたままだったわ。これじゃ手加減難しいのに」

ぶつぶつと呟く柚の横で月も顔をしかめている。

「せっかく研ぎに出してぴかぴかだっていうのに。あんなやつらの脂ぎった体何て斬ったらまた刃が痛むじゃない」

軽口を叩きながらも手は着々と戦闘準備を整えていく。柚が万華槍を包んでいた布を取り払い終えた頃には、森の中にぽっかりあいた脇道の入り口が見えていた。

「じゃあ三数えたら走り出すわよ、一、二、三！」

男達が気づき焦って走り出した時には、既に互いの影は木々に遮られ見えなくなっていた。

全速力で走り出したゆえと翔だったたが、獣道と大差ないような場所を追っ手を振り切るのは無理があった。転げるように坂道を下りながら、翔は叫んだ。

「この先に少し開けた場所がある、そこで一端止まって迎え討つぞ！」

頷くことで了解をの意を表わす。脇腹はすでに痛み出し、声を出す余裕が無かったのだ。

頭上の木々が無くなり、一気に視界が開ける。眩しさのあまり眼を細めたゆえの耳に、騒々しい足音が届いた。

はっと気がつき振り返ると、追っ手が二人を取り囲むようにしている。対峙している四人の覆面男達を眺め、ゆえは何度目かになるため息をもらした。

「何でこう、次から次へとやっかい事に巻き込まれるんだか」

「まあ、何とかなるだろ」

薄笑いを浮かべ、互いの背後を守るように背中あわせになりながら、翔は答えた。

「月の読みどおりこつちには少数がきたらしいな。五分もたせてくれ。その間に三人片付けて援護に行く」

それだけ言うと、愛刀の胡蝶刀を手に翔は敵に切り込んでく。ゆえも慌てて教えられたとおりに抜刀し、続いた。

（向こうは大丈夫だろうか・・・・・・？）

一瞬そんなことも頭をよぎったが、すぐにそんな余裕は無くなった。

「どう、まだやるの？」

「そろそろ、あきらめたら？」

少女二人の声が重なる、片方の少女は細身の銀色をした刀を男に向け、もう一人の少女は三^{みつ}極の槍のような武器を同じように向けている。

男はそれが信じられなかった。

華奢な身体つきの可憐とも言える少女二人に、大の男が七人がかりで戦い、あるうことが安々と倒されてしまった事実を。

思わず後ずさり、足元に倒れこんだ仲間を踏みそうになる。

「ばけもの・・・・・・」

「失礼なこと言ってくれるわね。こんなに弱いんじゃない、練習にもならないわ」

黒い髪をしたほうの少女——月が言い放つ。

「まさかこんな腕で“港一の男”なんて名乗っていたわけじゃないでしょうね、だったら笑いものね」

男は唸った。あきらかな挑発だったが、これを聞き流す余裕を完全に奪われていた。しかも此処でこの旅の一行をしとめ損なえば、街で笑いものになるのは目に見えている。

破れかぶれで獣のような咆哮を叫びながら切りかかったが、するりとかわされ脇腹に刃を叩き込まれる。

結果、声も出せずに倒れた。

「さあ、向こうはどうなったかしら」

「大丈夫でしょ。四人だし、翔もいるし」

少女二人はそれぞれの武器を鞘におさめ、少年達と合流するべく、走り出した。

柚の予想を裏切り、ゆえは苦戦していた。

（しかも、五分たつても誰も援護に来てくれないしなッ）

計ったわけではないが、もうそろそろ十分は経過しただろう。

情けない話だが、自分では到底眼前の男には勝てはしないだろう。応戦し受け流すのが精一杯で、いつの間にか森の中に入り込み日も陰っている。

剣を握り対峙しているのはひよろひよろとした手足の長い男。ゆえよりも確実に身長は高く、陰険そうな眼つきをしていて、本当なら近づきたくない部類の人間。

奇声を発しながら迫ってくるのに、及び腰にならぬよう意識しながら剣先とむける。

——耳障りな金属音が何度も辺りに響く。

後退しながら何とかさばいていたが、とうとう剣を組まれぎりぎりと上段から押さえ込まれる。

「・・・・・・・・ツク」

耐え切れず僅かに身を引いた。するとどんな偶然か、力を入れすぎた男が姿勢を崩した。

（此処だっ）

守勢が攻勢に転ずる。

恐怖はみるみるうちに収まり、逆に奇妙な高揚感が湧いてきた。考えるより先に体が動き、相手の脇を狙って刃を下ろす。だが、相手の服を裂いただけ。もう一撃喰らわせようと足を踏み出す——

——が、何を思ったのかわからないが男は大声をあげ剣を捨てて掴みかかって来た。

驚いた事で対応が遅れ、ものの見事に後ろへ倒れこむ。肺に衝撃が走り息が詰まった。気がついた時には男は眼前で短剣を構えていた。

「これで、終わりだあ!!」

剣は踏みつけられて動かせない、背中に冷や汗が流れる。

(・・・・・・・・・・・・・・・・ん?)

無駄とわかりつつ手をかざしていたが、いつこうに斬戟は襲ってこない。恐る恐る腕を解く。

「お前がね」

涼やかな響きの声。

につこり笑った月が、男の首筋に愛刀を突きつけていた。

「上出来ね」

月は手早く男を昏倒させると、何処からか出てきた縄で縛り上げる。

「・・・・・・・・俺の、事か？」

「他に誰がいるって言うのよ。防御しか教えてなかったのに、ちゃんと攻撃していたじゃない」

「・・・・・・・・見ていたのか」

断言だった。言外に非難を込めて少女を見上げる。月は驚いたように眼を見開き、心外そうに苦笑した。

「あのね私は超人じゃないのよ。柚と一緒に七人も倒してあんた達追いかけて探して、しかも相手に気がつかれないように近づくの、大変だったんだから」

全く大変そうでない表情で月は言った。疑わしい、といった風情の目を向けてくるゆえに月は肩をすくめる。

「ちょっとは『ゆえが何処まで出来るかなー』とか思わないでもなかったけど」

「やっぱりな」

呆れた、とでも言いたげな顔をしたゆえに月は手を差し伸べる。

「悪かったって。ほら、立てる？こいつさつさと運んじやおう」

「運んでどうするんだ」

「一つに縛り上げて、周りに薬焚いておくの。また追っかけられたら嫌だからね。運がよければ明日の朝くらいに誰かが見つけてくれるわ」

「誰かがって、どうツ——！？」

左足に力を入れた途端、激痛が走った。

「柚、こつちよ。見てあげて」

「痛みはどう、熱いような感じはする？」

「……押せば痛いけど熱いっていうよか、痺れている感じの方が強い」

「良かった。じゃあたぶん骨に異常は無いはずよ。腫れるかも知れないけど、せいぜい青あざになるくらいね。湿布するから」

どうやら転んだ際に打ってしまったらしく、肌の色みるみる変化していき毒々しい赤紫に変わっていった。内側にいくほど赤みが強いが、中央部分は黄淡色。あざは放射線上に広がっているため、毒花の刺青をいれたように見える。

「見た目凄いけど大丈夫よ。二、三日で痛みも引くわ」

「柚の言う事は確かかゆえ。柚は私達の救急係だから、打撲から縫合までお手の物よ」

「もう傷縫うのなんて二度とごめんよ。わかってる、月？」

（……？）

ゆえの不審げな目線に気づいた翔が、苦笑を浮かべた。

「前に、月がへましてさ。八針縫う傷作っただよ。ちょうど国や町からも遠い僻地だったから袖が縫ったってわけ」

「あら、ゆえの傷も翔の傷も縫ったこともあるわよ？本当に三人とも気をつけてよ」

うんざりした顔で大げさに肩をおとす袖にひきつった顔で月と翔が同時に返した。

「努力は、する」

「出来るだけ気をつけるように心がける、わ」

「・・・・・・こんな事が、毎回続くのかよ」

「大丈夫、その分楽しい事もたくさんあるわ」

疲れたように言うゆえに、月は明るく笑いかけた。

第五章 旅 五（後書き）

翔はちゃんと五分以内に全員沈めました。

けどちょうど合流した月に「ゆえの援護は私が行く」と言われ、助けに行きませんでした。

月は助けに行ったもののゆえが善戦してたもんだから、手出し控えで見えました。

弟子の声調具合が気になった模様です。

サド師匠です。

第四章 旅 六

六

「で、柚。今日中に歩き出せそう？ゆえは」

「五分五分つてとこね。数時間休めば歩けるだろうけど次の宿場町にたどりつけるとは……ちょっと思えない」

「となると微妙ね」

「微妙だな」

黒髪二人がうなずき合うのを、患部を抱えたゆえは見上げた。

「なにが微妙なんだ？」

「距離よ」

きつぱりと言い放ち、月は腕を組んだ。

「現在地から一番近い待ちつて地図が正しければ今出国してきたオリコフなのよ。ほとんどの旅人にとってあそこが旅の終着点であり出発地点なの。特に海路から陸路に代える連中にとっても重要な拠点でね。だから食料や道具、装備が整え易かったでしょ？」

比較する他例は知らないがとりあえずうなずいておく。

「と、なるとオリコフの次に旅人が足を止める宿場までのかなり距離が開くことになるのよ」

「………何でだ？」

「まあ地理的要因もあるんだけどな？出発地点で英気が養えている人間は元気良くて一日に歩ける距離が普通より多いってわけ。だから残念ながら今回の宿まではかなり距離がある」

「実際昼出発で夕暮れまでに駆け込むつてもかなりの強行軍だったのよ」

というわけでここは、妙に晴れやかな笑顔で月は宣言した。

「潔く野宿しましょう」

「だな」

きつぱり言い切られてしまいゆえは凍った。

野宿。一応いつかはあると思って覚悟はしていたが出発日、一夜目にして野宿。

硬直しているゆえを哀れに思ったのか、柚がひよっこり片手を上げた。

「はいはい、わざわざ野宿選ばなくてもオリイコフに戻るって選択肢は無いわけ？ゆえも怪我しているし

二、三日様子見てから再出発でもよくない？今日出国でまた入国つてのもまぬけではあるけど」

「まぬけ以前に何で出国したか思い出して見なさい、柚」

「あーああ………そっか。翔に不吉な予言を宣言されていたっけね」

「忘れてやがったのかお前」

「この脇道つて水場につながっていたわよね？じゃあ翔は水場の確保で。私は寝る場の候補探しとくわ。柚はあの阿呆どもの薬の調合をよろしく、安眠確保したいんできつめ希望」

「あ、そーよね。近くで一晩過ごさなきゃいけないもんね、お花畑でちようちよと戯れるぐらいのにしてあげるわ」

「お前ら人の発言無視スナァー！」

「ゆえは動けるようになるまでここで待機ね。だから柚の調合もここでやってくれる？火を使うようなら野宿の場所を特定してからでもいいけど」

「火の場所移すのも面倒だしね。いいよ今回は焚き物系統にするから。最後に燃やすだけのやつ」

「じゃあ解散、と。ほら翔行くよ？」

「お前らなあ？！」

少女が焚き火に香木をくべると、香ばしいような、甘いような匂いがぱつと広がった。虫除けと獣よけを兼ねている薬草らしい。

「その薬………」

「んー？」

ゴリゴリと何やら乳鉢ですりこぎ始めた少女の手を見つめながら、ゆえはぽつりもらした。

「毒じゃないんだよな」

波打つ金髪が揺れ、白い顔があらわになる。猫が興味を持つものを見つけたような顔をしたあと少女は意地悪く微笑んだ。

「ゆえが思っている毒の定義によるけど？」

「はあ?!」

「だってね？現実の医学的にだって『劇薬』という薬もあるし『毒薬』って名前の薬もあるのよ。それだけ体に与える影響が大きいってことで毒と薬の存在は同じなの。同じ材料の同じ調合のもので濃度によって弱くなったり心拍を強めることもできれば一気にとめてしまうこともできる。ちなみに今言った例は狐の手袋って植物のこね。あっちの名前じゃジギタリス」

「そういう、煙に巻くようなことが聞きたいわけじゃなく………」

「あはは、ごめん。人に害を成すかってことでしょ？それなら『大丈夫』な程度よ」

ほつとしていいのやら突っ込むべきなのか微妙な回答である。

「風邪薬程度の副作用って言えば安心する？これはどっちかっていったら『麻酔』に近いものよ————やや麻薬よりの」

「………」

いい加減、ひどく遊ばれているのを自覚しだしたゆえだった。むつとしたのがわかったのか、柚もごめんと返す。

「ちよつと何かこんなにゆえとたくさん喋ったの初めてで。反応がおもしろいからつい」

「………？はじ、めて」

「ん？あー、昔のゆえほとんど喋らない性格だったから。私達とは特に。唯一まともに受け答え返してくるの、月に対してだけだった

からねー」

正直に話していいかな？と柚は手を止め藍の瞳をゆえへと向けた。
「私、とそれから翔も。今も昔のゆえといまのゆえ、同一人物に思えないんだ」

以前同じようなことを月からも言われていたため、動揺もなくゆえは問い返した。

「別人だと疑っているってことか？」

「それは違うわ。だって月が同じだって言うんだもの。他ならぬ、月が。月は誰よりゆえのことを理解していた。もしかしたらゆえ本人よりもじゃないかってくらいで——まるで比翼の鳥みたいに」

片方の翼のように、それぞれにかけた欠片を預けたような存在で。だからこそ月はゆえの失踪後、かけた欠片を探して啼いていた。

「ヒヨクノトリ？」

鸚鵡返しに返されたことで、少年が言葉の意味をまったく知らないことと悟った柚は、あえて説明するのをやめた。かわりに先ほどよりいつそう悪うい笑みを浮かべる。

「ホント仲良かったからねー……翔が嫉妬するくらいには」

「は？」

「昔のゆえ、翔と仲悪かったのよー、それはもう」

「はあ?!?!」

「ゆえ？足が痛むのか？」

「いやべつに」

気まずい。『気にしない、気にしない。それだけ今のゆえが別人に見えるってことよ』などと金髪少女は笑い飛ばしてくださったが。覚えてもいない過去の不仲を暴露され、なんとなく動作がぎこちなくなるゆえである。

あからさまに話題を探しひらめいたのはいつかの疑問だった。

「前から聞こうと思っただけだ……生活費でどうやって稼いでいるんだ？」

三人が顔を合わせ、いつせいに首を傾げた。

「おい」

「や、ごまかしているんじゃないって考えているんだ。えつと主な収入源ってどれだ？」

「その時々によりけりとしか言いようが無いわね。ここんとこ最高額はたぶん細工物売り飛ばしたあれよ」

「有り金全部つぎ込んだもんね。でももつと買つとくんだったわ、その場で稼いでても」

「オリイコフの時点で仕入れ値の十倍はおいしかったな」

話しが果てしなく脱線しそうになったところで月がゆえに目を向けた。

「まずひとつは、今言った地域の特産物を仕入れ他国で売ることね。商人たちが普通にやっている手だわ。その差額が儲けになるから元手が必要だし、こんな少数人数しかも徒歩で移動の私達がやるんだからたかが知れている。よっぽどかさばらなくて、貴重で、換金率のいいものでないとまず無理ね」

「その条件に合ったのが二つ前に寄った国、スリジットの宝石細工だ。あそこの特産の細工物はどれも地金が軽くて細工が細かいのが特徴でな。他国では真似できないといわれている金細工なんだ。それを値切りの柚が片っ端から値切り倒して買いあさった」

「値切りじゃなくて目利きといってよ。他国で買えば高いものも原産地では安く手に入れられる。むしろ距離の開いた地点のほうがその土地では貴重になるからどんどん値があがっていくの。だからいくつかの細工は換金せずに持ってきた」

「これから価値がどんどん上がっていくから、か？」

「あたり」

ふたつめはそうね、と金髪の少女が小首をかしげた。

「博打、かな」

器をとりこぼしそうになったゆえだった。

「そんなことで稼いでいるのか?!」

「ゆえ、現実の価値観で考えるなよ。ここでスリや恐喝や窃盗がでなかっただけ俺らは旅人としてまともな部類に入る」

「そんなところで胸はついていいのか・・・?」

「まあ、あんまりやってないよ。スツたとき怖いし馬鹿らしいしね。よっぽど余裕があつて暇なときか、間逆の切羽詰ってどうしようもなくなつたときくらい」

でもぶつちやけ私達強いよねー、のめりこまないようにしないと軽く告げる月。

「ちなみに駒遊び系は柚、札関係は翔、感が頼りなのは私が担当。もつと詳しく話す?」

「・・・とばして次ぎ言ってくれ」

「そか。みつめ、残りはとなるとあとは個人の能力を生かしたつてやつだな。俺の占いしかり、柚の薬の調査しかり、月の剣術しかり。ただ月の剣術は言っちゃあ何だがあんまり稼げないんだよな」

「たいてい流れ者相手っていうと用心棒家業だものね」

「・・・何で稼げないんだ?」

心から不思議に思うゆえだった。先程の腕前といい、連日の稽古といい、少女の腕前は人から抜きん出たものだというのに。それに月は苦笑で答えた。

「用心棒家業じゃ腕より見てくれ重視なのよ。いかにも強面が腕組んでたつていたほうが迫力あるでしょ?特に素人なんかは私じゃ舐められておしまいよ。よっぽど特殊な事情じゃない限り、翔のほうはまだ雇われる確率高かつたわね」

ただ見てくれがむさいのが嫌だというかわつた依頼が過去数件あったことも確かだが。まあ今回は割愛していいだろうと月は思った。「私が稼ぐのならよっぽど街頭で居合いの技見せた方が稼げるわよ。藁斬ったり、板斬ったり、果物切ったり」

「……果物」

「所詮見世物だからね。そのほうが見栄えいいし、楽しいでしょ？
周りに配れるし」

「果物食べた人たいていお金払ってくれるしねー」

「ものすごく無駄使いな気がするんだが」

剣技とか、腕前とかの。価値がわかるものが知れば激怒してもおかしくないような使い刀気がしてならない。

「本人が気にしないんじゃないいいんじゃない？俺らもやるし」

驚いた顔のゆえに、翔は深く頷いて見せた。

「見世物系はどの旅人でもやるけどな。歌を歌ったり、踊ったり、
楽器吹いたり」

「翔、お前音楽の成績……」

「言っな」

このやりとりに少女達の明るい笑い声のはじけた。薄青の闇に染
まった河原に高く高く軽やかに響いていく。

「そこまで笑うかお前ら」

「いや、翔の腕前じゃなく、今の、やりとりがッ」

「あー、おかしっ 涙出てきた」

「もういいお前らさつさと寝ろ」

「そんな悪かったって。ちなみにゆえ、翔って歌う方はあれだけど
楽器演奏はまだいけるから」

「びっみょーなほろーどーも」

「ちよつとそんな顔しないで。お詫びとゆえへの披露を兼ねて一曲
奏でるからさ」

そういつて荷物の底から月が取り出したのは丸い手のひらほどの
素焼きの焼き物だった。よくよくみると完全な球でなくやや引き伸
ばしたように上の方がほそく、卵型と雫型の間のようなまをやか
な線を描いている。

「これが私達の楽器の土笛、現実の方で言うオカリナに似ているわ
ね。全員共用よ、吹き口だけ付け替えるけどね」

そう言つて首に下げていたのが取り出した竹の管を差込み、音階を確かめるように小指から順に動かしてゆく。

調音を整え終わると、そつと静かに唇を当て静かに曲を奏で始めた。

包み込んだようなこもつた音の、どこか素朴な音。聞きなれないはず異国的な音律の調べはそれでもどこか懐かしさをはらんで、宵闇へと広がる。

いつしか三人はぼんやりと少女の白い指の奏でる音色にそつと耳を傾けていた。

く第四章く 旅 宝玉へのがかり 終

第四章 旅 六（後書き）

はい、これにて四章は終わりです。

お付き合いくださり、ありがとうございました。感想などもお時間ありましたらよろしくお願い致します。

実はこの一話だけ、本館サイト『暁月夜空』では載せていないのですよー

『小説家になろう!』読者様特典です♪

第五章 夜 一

第五章 夜 遠い日の記憶

—

冷えた夜気が顔にあたり、意識がゆつくりとのぼっていく。

ゆつくりと瞼を持ち上げると銀砂を振りまいた夜空が映った。

頭上に広がり輝く星達を眺め、ぼんやりとゆえはなぜ星が見えるのかと考えた。

数分前まで視界を占めていたのは、安っぽいわら半紙と木目の浮いた机だったはずなのだが。

大儀そうに起き上がり周囲をぼんやりと見回し納得した。

ここは夢境界。

「眠れないの？」

からかうような声が後方から聞え振り返れば、薄墨の眼の少女が同じように体を起こしている。

今回の野宿は場所が悪かった。日当たりの悪いじめじめとした土地しか確保できず、山の派に入り込んでしま日中でも薄暗かった。肌に直接かかる風も冷気を孕んで冷たく、落ち葉も腐葉土に近く湿っている。油紙と布越しに横たわる地面は居心地が悪く、だから確かに寝付きにくかったが。

「……正確には、向こうで眠たくて寝たんだろうな」

「まあ、昼ご飯の後。六限目。自習。なんて事になったら、寝るなっという方が難しいわよね」

三拍子そろってるわ、と軽く笑い夜具代わりになっている厚手の外套を引き寄せる。今日は急な出張が入ったとかで担任がおらず、五限目の授業はプリントとなったため、少し前までそれをそれなりに必死に片付けていたのだったのだ。

「翔は来てないのか？」

「あれで結構真面目だから、今頃きつと睡魔と闘いながら必死にプリントやってるんでしょ」

「・・・・・・・・」

話題が、途切れる。

月がふと空を見上げると、その視線の先をつい、と光が流れる。

一面に天鰲絨を張ったような紺碧の空を、一筋の銀線が走る。それはまるで、銀刃が刻んだ斬撃の軌跡ようで。

「流れ、星」

月の眩きにつられて顔を上げれば、一呼吸後再び銀が流れる。息を呑みそれを眺めていると、かすかな笑い声が耳に届いた。

「どうした」

「あの時もこんな空だったな、って思ってた」

「・・・・・・・・あの時？」

「四年前の」

「はあ？」

不審ぎみな響きでゆえが言ったのを聞きとがめ、しばし月は考え込んだ。瞳を瞬かせ眉をよせた後ようやくああ、と呟く。

「そっか・・・・・・・・そうだよ」

続いてなにやら眉を寄せたままぐすくと笑う月にゆえが向けたのは、先ほどより三割ばかり増した不信な視線だった。

「だからなんなんだよ」

「いや、ちよつと自分がおかしくて」

「・・・・・・・・おい？」

「何だか私ずっと今のあんたと一緒にいたように思ってたみたい。ゆえが昔の事を忘れているって事、忘れてたわ」

くすくすと透明な笑みを浮かべ月は笑う。

ざあと音を立てて吹いた風が、茶と黒の髪をもてあそんだ。

「話そうか。四年前起こった、こと」

はじかれたように、ゆえは顔を上げた。それを笑みの残像を口許

に残した月は、穏やかにも思える不思議な瞳をしていた。

「こつやつて、四人で旅している理由よ。——宝珠の、事も」

聞きたい？、という問いかけに、頷くことでゆえは答えた。

第五章 夜 一（後書き）

草木香り緑もゆ臯月ですねえ
ですが話は暗め。というよりシリアスめ

前回ほど定期連載できないかもしれませんが、気長に付き合ってくださいけどありがたいです。

あと今回は（も？）サイトと改変部分があります。

前回差し込んだ最終話の関係で、矛盾点が出てしまったので。
お時間ある方はサイトのほうと見比べてみてください（CMです
！）

第五章 夜 二

二

「私はね、こつちの世界の両親の顔知らないの。覚えてないのよ。気づいたら、ひとりだったわ。」

私の一番古い記憶は島の記憶。二十人くらいの子どもと何人かの大人で村を作ってた。時々気づくと両方とも減ったり増えたりして入れ替わっていたけど。見知った顔がいなくなるのは、島の外に行っているからだと大人達には教えられていたから、不思議にも思わなかった。

私がこつちの柚と翔に会ったのはちょうど五歳の頃。

いつもみたいに何人か子どもがいなくなつたあと、新しく来た子が柚と翔だったの。二人とも同じ所から来たって聞いて、羨ましいって思ったことよく覚えている。あの頃からあの二人、仲良かったしね。

それからは三人でいる事が多くなつたわ。一緒にご飯作ったり、訓練したり技覚えたり。

そう、訓練。芸のね。私達、旅芸人の卵だったの。

ほら、オリイコフにもいたでしょ路上で芸を披露して稼いでいた旅芸人の一座。あんな感じよ。剣舞や軽業や的当なんか、やっていたでしょ。現実の方で言えば、巡業のサーカス、と言ったところかしら。

大人はお世辞にも優しいとはとても言えなかったし、子どもの中には根性曲がっているのやら、やたらと威張り散らす馬鹿もいたけれど、他なんて知らないから毎日結構楽しかった。

結局あそこにいた子供達はみんな親に売られたり、拾われたりした子だったのよ。私は親の顔も覚えてないからまだ良かった。二人とも来たばかりの頃はつらそうだったわ。

島を出たのは十歳になった歳だった。その頃にはもう一人前に芸もこなせるようになっていたからでしょうね。

はじめて島を出たときの、自分の心臓の音がまだ耳に残っている気がするわ。

見渡す限りの深い紺碧の海に高い蒼天の空は、私には新しい世界の始まりのように思えたの。

どうしたの、ゆえ。不思議そうな顔して。

え？ああ、その時はまだゆえには会ってなかったの。『ゆえ』に会ったのは、島を出たあと。

……どうしたのよ、いきなり暗い顔して。何でも無いって顔じゃないわよ。

そう、なら話続けるわ。

島を出てからの生活は、正直楽しじゃなかったわ。酷いと物乞いまでやらされたし、三日間寝ないで舞台に立たされたこともあったけど、三人一緒だったから、何とかこなしていた。

誰か一人でも欠ければその分の負担を誰かが背負う事になる。そう考えれば、おちおち倒れることも出来ないしね。

ゆえに会ったのは、そんな日常に慣れてきた頃よ。島を出てから、一年ぐらいたった頃だったかしら？

や、訊いてるんじゃないかって記憶を探ってるのよ。思い出しているの。何せ五年近く前の記憶なんだから。

あ、思い出した。うん、一年であってたわ。ちょうどその頃私の剣の先輩に当たる人がいなくなって、座長がぶつくさ言っていたから。

大きな町でね、確かどこかの王都だったわ。私たち以外にも何組もの旅芸人がいてね。歓楽街では毎日がお祭しているみたいに活気があった。その分こっちの負担は大きかったけどねー、立ったまま寝ているのなんてざらだし、時間さえあれば気を失うように寝てた。成長期だったし。

それで、もうそろそろ移動の話が出始めた頃。公演が終わったあ

と、一人の男の子が楽屋に現れたの。

腰には短剣を佩いて、上等の生地 of 衣服に身を包んだ貴族の子ども。

それがゆえ、あんだだったの。

たまあにあっただけだね。一般の人間が尋ねてくるの。けどそれは芸に見ほれて、召抱えるために来るためであって、一緒に行きたい何てのは初めてだったけど。

あっけにとられたよ、あの時は。何考えているのかと、思った。

そんな顔しないでよ。私だって知らないんだから。あの時のゆえ理由言わなかったし——言いたく無さそうだったし。

慌てて追い返そうとしているうちに、団長に見つかって。それからゆえは団長と交渉して、結局一緒に行くことになったの。

ゆえはあんまり喋らなかったけど、それから私達は『四人』でいるのが、当たり前になっちゃった。

そのころから私達は不思議な『授業』を受けるようになっていったけど、その意味に気がついたのは、もっとずっと後のことだった。最初にそれに気がついたのは、あんだだったのよ？

ある日突然ね、ゆえが言い出したの、最近おれたちの話がよくされているって。他の子や、私やあの二人でも笑って言ったわ。考えすぎだって。でも本当だった、私達をそろそろ使おうって話が出ていたのよ。

……それは、あとから言うわ。

一度は否定してみたものの、ゆえは軽はずみに物を言う性格じゃなくて、今以上に無口で慎重で神経質な性格だったから気になってね。

ために、大人たちの会話を盗み聞きして見ようって事になったの。本当は、そんなことすれば、食事抜きぐらいされることがわかっていていたけど、あまりに真剣なゆえの様子見ていたら、こっちまで不安になってきて……ね。

分厚い天幕の布地越しに聞きとれた言葉はそう多くなかった。

切れ切れに、聞きとれたのは「駒」だの「標的」だのわからない言葉だけ。痺れを切らしてゆえが天幕に切れ目をいれて、やっと聞こえたと思ったら見つかつて逃げ出す羽目になったわ。

でも一言だけはつきり聞こえた。嘲りの込められた、笑い声と一緒にに聞こえたその言葉だけは。

新たな『花』が咲きそうだ、そう私の耳には聞こえたわ。

次の日には新しい国に着いたんだけど、前日の事もあって私達はなんとなく落ち着かなかった。大人たちの様子も何だか変で、余計にね。

いつものように公演を終えた後、私達は団長に呼び出されたの。昨日のことがばれたのかと及び腰になっている私とは違い、ゆえは何だか怒っているようにみえた。

天幕から出ると、日はもう暮れていたわ。空は綺麗に晴れていて、行く筋もの流れ星の光が、予言のように流れていた。

呼び出しは、結局昨日のことじゃなかったわ。妙に愛想のいい団長は、その町の名士だとかいう男の元へ行くよう、私たちに指示を出した。白い粉が入った小袋と一緒に『これを主の飲む杯に入れろ』言葉という言葉とともに、手渡してね。

ゆえが白い粉を水鉢に放り込んで、中の魚が白い腹を浮かべて死ぬのを見て、はじめてその正体が毒だと知れた時の衝撃は、中々のものだったわ。

そう、旅芸人じゃなかったのよ。

いえそうじゃないはね。旅芸人だったことは確かだわ。

他にも後ろ暗殺なんかの闇行を兼任していただけで。

その時『闇花』という芸団の名前の由来が理解できた。

『闇』に咲く『花』だったのよ。まさしく私達は。

暗殺や謀報などの『闇』行に携わり『花』片のように活躍する者。恐慌状態の私達を正気に返したのは『ここからにげだそう』とい

う、ゆえの言葉だった。

本当に、本当にあの状態でよく言えたと今でも感心するわ。

相手は本業暗殺者、しかもこっちは多少剣使えるのがいるとしても実践なんてやった事の無い子ども。おまけに仕事をやりそこなっただうえに、逃げたと知られれば必ず口封じにやってくるような連中だろうってくらい簡単に見当がついたし。

実際にはどうやら私達は非常に優秀だと評価されていたらしくって、すぐには殺そうとはしなかったけどね。

あいつらの言い分はこうよ。『狐が兔を狩るように、狼が狐を狩るように私達は人を狩って生きている。これは悪い事でもなくただ、そう言うものだ』という事だ』って。

……そいつら頭どうかしてんじゃないのかって？

それが真実と信じているものにとっては、その言葉も真実になってしまふのよ。

彼らもそういわれて育ってきたと、今なら理解できる。

その時ゆえの言った言葉がまたすごいよ。ええそうよ、またゆえよ。

その時ゆえはね、ふざけるな、て怒鳴ってからこう言ったの

『人が人をあやめておいて、しかたがない事なんて、あるわけがない。おれたちは他の事をしてでも生きていける』ってね。それを聞いて何か感動しちゃってね。

心細くて、納得しそうになった私の心にその言葉は、強い閃光みたいに焼きついた。

それから私は自分で誓った“自分の全能力を出し切って、可能な限り人を殺めるのは避けよう”、てね。

……うん、無いよ。

私は、まだ人殺しをした事が無い。

自分の能力が及ぶ限り、これからも避けてみせる。同じ剣を握る者として、それだけが私とあいつらの違いだろうから。

けどね、それからは本当の生き地獄の始まりだった。

始めの追っ手から命からがら逃れて、私達は逃げ惑った。

泥沼を、這いずり回るような逃亡だった。五体満足なのは、なにかの奇跡か幻みたいなき運よ。

戦って戦って逃げて、逃げて。その、繰り返し。眠るのが、酷く怖かった。起きたらひとりになっているんじゃないかって。疲労とひもじさに、先に殺されるんじゃないかとも思った。

確か、その時も暗闇に星が、いくつも流れていたわ。

ぼろぼろになった三人を見ていたくなって、追い詰められたという現実を認めたくなくて、空をずっと見上げていたの。

三人が目の前で死ぬのを見ないためには、どう行動すればいいか考えて。

一番最初に死ぬのが私なら、それは不幸なことではない。

そう、思って立ち上がったの。

革紐で括りつけた刀が、手の甲を引きつらせて痛かったけど、まだ何とか立ち上がった。

隠れていた瓦礫を抜け、呼吸を整えようと眼を伏せた時。

世界が、変わった。

血臭も、殺気も遠のいて、ただ白い静謐な世界が広がっていた。

第五章 夜 二（後書き）

次回はちよつと特殊な話なので（そして短いので）連続更新します。

第五章 夜 三

三

—— 助けてあげましょうか

「だれ？どこ？ 何なの？！ 何者なのよ？！」

—— わたくしは高い処に、坐する者

「かみ、さま？」

—— それ、に近い存在

「………助けてくれるの？」

—— ええ。わたくしも助けて欲しいから

「え？」

—— わたくしは貴女の願いを叶えられる。貴女はわたくしの願いを叶えられる

「私たちを助ける代わりに、貴女の願いを叶えろと？ 願い事を聞いたら、本当に私たちを助けてくれるの？」

—— ええ。必ず。 貴女の願いは？

「っ。わたし、達を、逃がしてほしい。闇花の追っ手の来ない場所

へ、命の危険の無い場所へ、平穩に日常が送れる場所へ」

—— 一番目の願いだけなら、叶えてあげられる

「なぜ?! 他のはなぜだめなの?!」

—— わたくしの願いをあなたがきけば、きっと貴女はあれに追われるから。命の危険は、ついて廻る。

「あれって? 貴女の願いつて何なのよ?!」

—— 捜しもの

「え?」

—— 大切なもの、無くてはならないもの。けれど、わたくしの手の届かないところにある

「それは、なに?」

—— 宝珠。白き秘宝の珠玉、あれが無ければ大変なことになる

「もしかして、伝承の?・・・そんな、そんなものただの人間の私が、手に入れられるはず無い!!」

—— いいえ。貴女達でなければ、手に入れない

「そう、なの?」

——そう。お願い、助けてわたくしを

「……………ッ。どちらをえらんでも私達は危険なのね」

——けれど、今の危機からは、救ってあげられる。どうする？

「……………引き受けるわ。私達を助けて、貴女を助けてあげるから」

——ありがとう。貴女は、どこへ行きたい？

「どこでもいいわ。闇花の追っ手から離れられて、四人で一緒にいられるところなら」

——では、お願いしますよ。小さな地界の少女。いつかの時たま逢いまみえる時を愉しみにしていきましょう

第五章 夜 三（後書き）

名無しの人は意外と強引です。
そしてこの一言で色々台無しです。シリアスなのに。

第五章 夜 四

四

そして、目覚めたらそこはまったく知らない場所だった。

装束も食べ物も建物も眼にする物はみな見慣れないものばかり。

後で知ったことだけど、そこは東極から大陸半分ほど離れた地区だったの。地図見たときは、それはもう驚愕だったわよ。

そのころからかしらね、不思議な夢を見出したのは。

夢を見ると、まったく別の人間としての生活があるの。そこで生きて、触れて、笑って。

そう現実の私は『夢想』の夢を見て、夢想の私は『現実』の夢をみるようになったの。

そのうち、あんまりリアルに幾晩も同じ夢を見るものだから、自然と柚や翔とも夢の話をするようになっていつて。そうしたら、両方の世界で共通点がいくつもでてくるじゃない。

同じ町名覚えていたり、昼の給食の献立おぼえていたりしてね。

ゆえは何でかあんまり、夢の話はしたがらなかったけど。

いつしか私達は夢境界と現実世界の齟齬が、ほとんど感じられなくなっていた。

ある日、試してみようって事になったの。本当に、現実と夢想が同じなのか。私達の思い込みじゃなく、事実として私達は二つの世界を行き来しているのか。

手紙を、書いたの。

ゆえに。

ほら、ゆえだけは私も翔も柚も、現実では顔を合わせたことなかったのよ。

眠って、現実で目覚めたら朝一番に手紙を書いて、ポストに投函するって約束して、住所教えあって。どきどきしてなかなか寝付けなかったわ。今じゃ、笑い話だけだね。

その日も、夢想での一日も、ほとんど何も手につかなかった。そのせいで現実で寝坊して、明日華さんにたたき起こされた時、鼻先に白い封筒突きつけられて、きよとしたわ。

ゆえからの、手紙だった。

夜まで待てなくて、もう一度眠って夢想に行って、ゆえをたたき起こして確認したわ。ゆえの家にも、私からの手紙がちゃんと届いていたって。

嬉しかった、嬉しくてしかたなかった。目の前に居るゆえという男の子が、私が作り出した夢の幻想でなく、しっかりと存在する人だって知れて。

醒めれば消えてしまっ、夢じゃないと自覚できて、本当に嬉しかったの」

語り終えた月の顔には不思議な陰影が見て取れた。

それですべて何も言えなくなり、ゆえは無自覚なまま唇をかむ。

夜空に視線を向けたままだった月はぽつりとつぶやいた。

「不思議ね」

「・・・・ん？」

「あの時はみんな一緒にいたのに、なぜあの人は私にだけ願いを託していったのかしら」

月がそう呟くと見上げた空を星が流れて行く。

ぼんやりとそれを眼で追ったゆえの耳に月の言葉が届いた。

「いつか、この理由がわかる時が来るのかもしれないわね」

「なんでそう思う？」

「さあ何となく。それよりもう寝よう、そろそろ授業終るだろうし」
空には流星群でも来ているのかひとつ、またひとつと星が流れていた。ぽろぽろと絶え間なく零れる一瞬の閃光をみつめながら、ゆえは眠りに身を沈めた。

『いつか』という少女の言葉が胸の底にゆたっていた。

第五章 夜 四（後書き）

夢想過去語り編、これにて終了です。

シリアス話、どうだったでしょうか？また感想もお願いします。

これからちょっと色々迷ってまして…ぶっちゃけていうと、ストックが切れてまして。

正確に言うと、ストックが途切れてまして。

六章は書いてないんですが、七章は仕上がってるんですよ（汗）
割り込み機能使えば問題なく連載できるけど、書下ろしもがんばれる
ながらがんばりたいし。

考え中です。

ご意見あったら、聞かせていただけますか？

「とりあえず話飛ばしてもいいから早く載せる」

「根性出せ、時間かかってもいいから書き下ろせ！」

など。

よろしくおねがいします。

（続きをお読みくださる方に）

いつも読んでいただき、評価もしていただきありがとうございます。
大変申し訳ないのですが、この続き、実はストックが尽きておりまして・・・六章はまだほとんどかけていない状況です。

なおかつ、七章は完結しているというわけわからん状況で（汗）
このままでは本館と同じく、年単位で連載が止まりかねないので、
変則的ですが六章をとばし、八月から七章の連載を掲載させていただきます。

これまでと同じく、章は一つ一つ独立しておりますので、一応飛ばして読んでもさしつかえありません。

変則的ですが、楽しんでいただけたら幸いです。

そして

連載予定の七章『罨』なのですが、月の過去というかトラウマに触れる話となっております。

同シリーズの『閑章 帰郷』をよんで頂いた方が理解しやすい
と思い、先に閑章の連載を始めました。

あわせて読んでいただくと、ちよつと話がよくわかるかもしれません。

こちらもよろしくおねがいします。

では

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7240q/>

夢物語

2011年7月14日03時15分発行